熊本県文化財調査報告第１７１集

古閑山遺跡

一般国道３号熊本北バイパス改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

１９９９．３

熊本県教育委員会

古閑山遺跡遠景

平成６、７年度 調査区全景

平成４年度 調査区全景

熊本県文化財調査報告第１７１集

古閑山遺跡

一般国道３号熊本北バイパス改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

１９９９．３

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県教育委員会では、建設省の委託により、平成３年度から７年度にかけて、一般国道３号熊本北バイパス改築事業地内に所在する３遺跡の埋蔵文化財発掘調査を実施いたしましたが、このうち古閑山遺跡の出土資料の整理が終わり、報告書を出版する運びとなりました。

古閑山遺跡の発掘調査は、平成４年度と６、７年度の２次にわたって実施され、竪穴住居跡、円形周溝墓などの古墳時代を中心とする、縄文時代から古代に至る遺構、遺物が出土いたしました。これらの遺構・遺物は、この時代の熊本周辺の人々の生活を知るための貴重な資料になるものと思われます。

この報告書が、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解を深め、さらには学術研究の進展にいささかでも寄与するところがあれば、まことに喜びに堪えません。

なお、本調査を実施するにあたり、文化財保護の観点から多大の御協力を惜しまれなかった建設省九州地方建設局熊本工事事務所ならびに、御指導御助言をいただきました諸先生方に深く感謝申し上げます。

平成11年３月31日

熊本県教育委員会

教育長　　佐 々 木 正 典

例　言

1　本書は、一般国道３号熊本北バイパス改築事業に関連して、平成４年度から７年度にかけて実施した熊本市龍田町上立田に所在する「古閑山遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　調査時の遺跡の名称は「山ノ神遺跡」であったが、調査後、近接の別遺跡である「緑ケ丘山ノ神遺跡」との混同を避けるため、調査地点の小字名を採り「古閑山遺跡」と改称した。

3　調査は、建設省九州地方建設局熊本工事事務所の委託を受けて、熊本県教育委員会が行った。

4　現地での発掘調査は、平成４年度および６・７年度の２次にわたり長谷部善一、西住欣一郎、濱田彰久、池本利直、高谷和生、長尾至明、岡本勇人、三好伴典、田中康雄、山田大輔、前川真由美が行った。

5　遺物の整理および本書の編集は、平成８年度に熊本県文化財収蔵庫で実施し、濱田、赤坂希、知名石揚子が主にこれにあたった。遺物実測および製図は、主に濱田、赤坂、知名石、水本佳子が行ったが、石器実測の一部を村崎孝宏、岩谷史記、製図の一部を本松亜希子が行った。また、土器実測の一部については、（有）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

6　本書に使用した挿図のうち、第１図については、建設省熊本工事事務所から提供を受けたものを基礎にした。また、第２図および第２、３表は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図を使用し、「熊本県遺跡地図」をもとに作成した。

7　本書の執筆は、熊本県文化財収蔵庫において、濱田が行った。

8　遺物の写真撮影は、熊本県文化財収蔵庫において、今村龍太郎が行った。

9　整理後の遺物は、熊本県文化財収蔵庫（熊本市渡鹿３丁目15－12）に保管されている。

凡　例

1　本書に示した方位は、第１、２図を除き、すべて磁北である。

2　遺構の実測図は以下の縮尺で掲載した。

　円形周溝墓…120分の１　石棺墓、木棺墓、円形周溝墓主体部…30分の１

　竪穴住居跡、大型土坑…60分の１

3　遺構における高度は、海抜高である。

4　遺構の深さで特に断りのないものは、検出面からの深さである。

5　遺物の実測図は以下の縮尺で掲載した。

　土器…３分の１

　石器…原則として原寸大、第12図、第13図34、35は２分の１、

　　第13図36、37は４分の１、第14図は３分の１、第39図139は３分の２

6　出土遺物観察表における計測値は現存値であるが、土器の口底径については復原値を示した。

本　文　目　次

口　絵
序　文
例言・凡例

第Ⅰ章　序　説…… 1
　第１節　調査に到る経緯…… 1
　　1　調査に到る経緯…… 1
　　2　調査組織…… 2
　第２節　遺跡周辺の環境…… 2
　　1　地理的環境…… 2
　　2　歴史的環境…… 4

第Ⅱ章　調査の成果…… 9
　第１節　調査の概要…… 9
　　1　調査の概要…… 9
　　2　遺跡の基本層位…… 12
　第２節　旧石器時代の遺物…… 12
　第３節　縄文時代の遺物…… 13
　　1　土器…… 13
　　2　石器…… 18
　第４節　弥生時代の遺物…… 28
　第５節　古墳時代の遺構と遺物…… 30
　　1　竪穴住居跡…… 30
　　2　墳墓…… 33
　　3　土師器…… 35
　　4　その他の遺物…… 44
　第６節　歴史時代の遺物…… 45

第Ⅲ章　まとめ…… 46
　　1　旧石器時代…… 46
　　2　縄文時代…… 46
　　3　弥生時代…… 46
　　4　古墳時代…… 46
　　5　歴史時代…… 47

写真図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　古閑山遺跡調査区位置図…… 3
第２図　熊本北バイパス周辺文化財分布図…… 5
第３図　平成４年度調査区遺構配置図…… 10
第４図　平成６、７年度調査区遺構配置図…… 11
第５図　基本土層図…… 12
第６図　出土旧石器…… 13
第７図　出土縄文土器（１）…… 14
第８図　出土縄文土器（２）…… 17
第９図　出土縄文石器（１）…… 19
第10図　出土縄文石器（２）…… 20
第11図　出土縄文石器（３）…… 21
第12図　出土縄文石器（４）…… 22
第13図　出土縄文石器（５）…… 23
第14図　出土縄文石器（６）…… 24
第15図　出土縄文石器（７）…… 25
第16図　出土縄文石器（８）…… 26
第17図　出土弥生土器…… 29
第18図　出土石包丁…… 30
第19図　１号住居跡実測図および出土土師器（１）…… 31
第20図　１号住居跡出土土師器（２）…… 32
第21図　１号木棺墓および１号石棺墓実測図…… 34
第22図　１号円形周溝墓および主体部実測図…… 36
第23図　１号円形周溝墓出土土師器…… 37
第24図　１号大型土坑実測図および出土土師器…… 38
第25図　２号円形周溝墓および主体部実測図…… 39
第26図　出土土師器（１）…… 41
第27図　出土土師器（２）…… 42
第28図　出土土師器（３）…… 43
第29図　古墳時代出土遺物…… 44
第30図　歴史時代出土遺物…… 45

表　目　次

第１表　熊本北バイパス関係埋蔵文化財一覧表…… 1
第２表　熊本北バイパス周辺文化財一覧表（１）…… 6

第３表　熊本北バイパス周辺文化財一覧表（２）…… 7
第４表　出土縄文土器観察表…… 16
第５表　出土縄文石器観察表…… 27
第６表　出土弥生土器観察表…… 29
第７表　遺構出土土器観察表…… 33
第８表　出土土師器観察表…… 40
第９表　歴史時代土器観察表…… 45

写　真　図　版

図版１　平成４年度調査区全景（南より）、平成４年度調査区全景（北より）、１号住居跡（完掘）
図版２　１号木棺墓検出状況、１号石棺墓検出状況、１号石棺墓（完掘）
図版３　１号円形周溝墓遺物出土状況、１号円形周溝墓全景、１号円形周溝墓主体部
図版４　１号大型土坑、２号円形周溝墓全景、２号円形周溝墓主体部
図版５　作業風景、作業風景、熊本北高校遺跡見学
図版６　出土縄文土器（１～27）
図版７　出土縄文土器（28～50）
図版８　出土旧石器、出土縄文石器（１～22）
図版９　出土縄文石器（23～30）
図版10　出土縄文石器（31～35）
図版11　出土縄文石器（36～43）
図版12　出土縄文石器（44～64）
図版13　出土弥生土器（１～11）
図版14　１号住居跡出土土師器（１～４、７、８）
図版15　１号住居跡出土土師器（５、６、９）
図版16　１号円形周溝墓出土土師器（10～21）
図版17　１号円形周溝墓出土土師器（22）、出土土師器（１～４）
図版18　出土土師器（５～10）
図版19　出土土師器（11～13）
図版20　出土土師器（14～19）
図版21　出土土師器（20～27）
図版22　出土石包丁、古墳時代出土遺物
図版23　出土歴史時代土器、作業員の皆さん

第Ⅰ章　序　　説

第１節　調査に到る経緯

１　調査に到る経緯

昭和47年度、建設省九州地方建設局熊本工事事務所から、松橋バイパスや玉名バイパスと共に、熊本北バイパスの路線について、分布調査の依頼があった。依頼を受けた熊本県教育庁文化課では、３路線の踏査を行い、松橋バイパス９か所、玉名バイパス12か所、熊本北バイパスについては、下記の「熊本北バイパス関係埋蔵文化財一覧表」(第１表）の12か所を確認して、熊本工事事務所に報告した。

このうち、第４工区にあたる西谷遺跡・上西原遺跡(新南部遺跡群の一部)は昭和58、59年度、竜田陳内遺跡(調査時に竜田陳内南遺跡を改称)は昭和61年度にそれぞれ発掘調査を実施し、平成３年に供用が開始された。

また、竜田陳内北遺跡、緑ヶ丘遺跡、緑ヶ丘山ノ神遺跡については、確認調査を行ったが、遺構、遺物等は検出されなかった。

平成２年、熊本工事事務所と県文化課の協議の結果、第３工区の施工に伴い、区内に存在する庵ノ前遺跡、迫ノ上遺跡、および試掘調査により新たに確認された山ノ神遺跡の３か所を対象に発掘調査を行うことが決まり、平成３年度から７年度にかけて、調査を実施した。

山ノ神遺跡の発掘調査は、道路用地の買収状況や工事の進捗状況等に応じて、平成４年９月から平成５年３月、平成７年１月から６月の２次にわたって行った。このうち、平成４年度調査は学芸員長谷部善一、平成６、７年度調査は文化財保護主事濱田彰久がそれぞれ主査として担当した。

なお、調査終了後、遺跡名の「山ノ神」は遺跡所在地名とは何の関係もなく、さらに、近接する別遺跡の「緑ヶ丘山ノ神遺跡」と混同される恐れがあるため、所在地の小字名を採り「古閑山遺跡」と変更することとした。

また、平成６年10月には麻生田包含地の確認調査を実施したが、遺構・遺物等は確認されなかったため、熊本工事事務所に発掘調査は不要であるとの通知をおこなった。

また、古閑山遺跡の出土遺物整理及び報告書作成作業は、平成８年度に濱田を主査として、熊本県文化財収蔵庫において行った。

第１表　熊本北バイパス関係埋蔵文化財一覧表

遺跡名	面積(m²)	所在地	時代	内容等
四方寄御馬下遺跡	17,500	北部町四方寄御馬下	縄文、古墳	縄文時代、古墳時代の住居跡
鶴羽田横穴群	3,600	北部町鶴羽田	古墳	古墳時代後期の横穴群
須屋城跡	11,500	西合志町須屋	中世	天正年間、菊池氏一族の須屋市蔵の居館跡と伝えられる。濠、土塁に囲まれた要害である。
新地包含地	19,400	熊本市清水町新地	弥生、古代、中世	弥生、古代、中世の集落跡
麻生田包含地	6,100	熊本市清水町麻生田	弥生、古墳	弥生、古墳時代の集落跡、甕棺遺跡
楡木庵ノ前遺跡	10,900	熊本市清水町楡木	縄文、弥生	縄文時代の集落跡、弥生時代の甕棺遺跡
迫ノ上遺跡	18,500	熊本市龍田町上立田	縄文、弥生	縄文時代の集落跡、弥生時代の集落、甕棺遺跡
緑ヶ丘山ノ神遺跡	5,400	熊本市龍田町上立田	縄文	縄文時代の集落跡
緑ヶ丘遺跡	14,000	熊本市龍田町上立田	縄文、古墳、古代	縄文時代、古墳時代の集落跡、古代の窯跡群
竜田陳内北遺跡	6,600	熊本市龍田町陳内	縄文、古墳	縄文時代、古墳時代の集落跡
竜田陳内南遺跡	10,500	熊本市龍田町陳内	縄文、古墳	縄文時代、古墳時代の集落跡
新南部遺跡	9,200	熊本市新南部町	縄文～奈良	縄文、弥生、古墳時代の集落跡、弥生時代の甕棺遺跡の他、奈良時代の寺院跡

2　調査組織

調査主体　　熊本県教育委員会
調査責任者　　大塚　正信（平成４年度主席教育審議員・文化課長）
　　桑山　裕好（平成６～８年度文化課長）
調査総括　　松本　健郎（主幹・文化財調査第二係長）
調査担当（平成４年度）　　長谷部善一、西住欣一郎、長尾　至明、岡本　勇人
　　（平成６、７年度）濱田　彰久、高谷　和生、池本　利直、三好　伴典、田中　康雄
　　山田　大輔、前川真由美
報告書担当　　濱田　彰久、赤坂　希、知名石揚子、水本　佳子

第２節　遺跡周辺の環境

1　地理的環境（第１図）

古閑山遺跡は、白川北岸に展開する合志台地の西端にある立田山山系の一部にあたる天拝山の東側尾根上から北側斜面に広がり、標高は約75～85mである。一帯は戦後開墾され、畑として使用されていたが、現在は耕作されておらず、竹林や雑木林となっている。熊本北バイパスの予定路線は遺跡のある丘陵を南北に切り通す形で設定されており、これに伴う試掘調査によって、遺跡の存在が確認された。

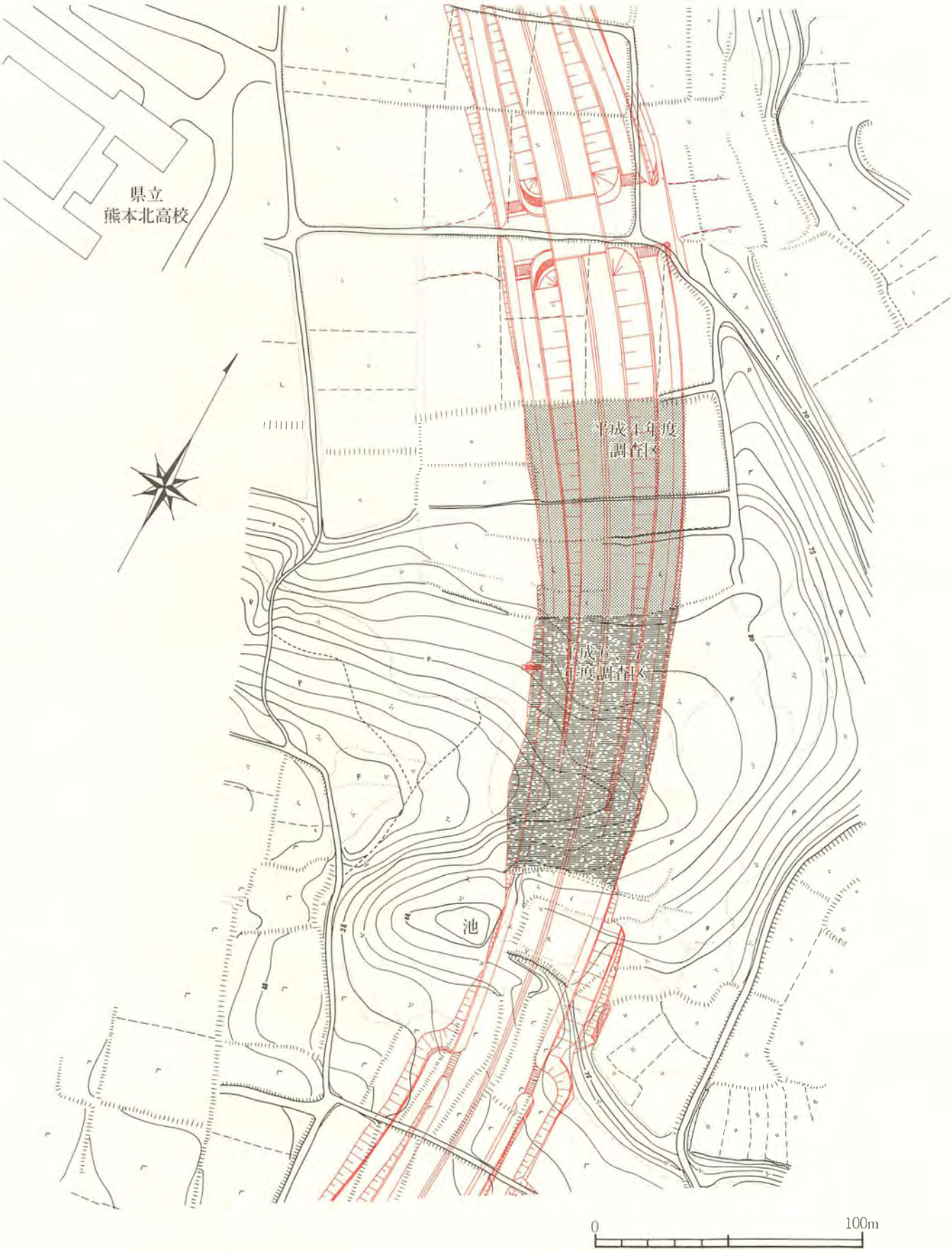
周辺の丘陵地帯は、全域にわたって、旧石器時代から奈良・平安時代に至る各種各様の遺物が散布しており、一大遺跡群を形成している。

遺跡南側の丘陵上には迫ノ上遺跡が広がる。この遺跡からは昭和35年に中に人骨を伴う弥生中期の甕棺が発見され、また、今回の北バイパス建設に伴う調査では、縄文早～晩期の土器・石器や古墳時代の住居跡が確認されている。両遺跡の間には小さな谷があり、一部を堰き止めて、灌漑用の溜池が造られている。

また、遺跡と谷を挟んだ北側の台地上には庵ノ前遺跡がある。昭和57年度と昭和63年度の調査で縄文早期と古墳時代の住居跡、今回の調査で弥生中期の甕棺墓と古墳時代の住居跡などが確認された。遺物は、押型文や塞ノ神式等の縄文土器、弥生土器、土師器などが出土している。

一方、遺跡西側に位置する天拝山A遺跡からは、旧石器時代に属する安山岩製のポイントの他、縄文時代早期、前期、後期、晩期の土器が採集されている。

この一帯は、表土が保水性の悪い火山灰堆積層であるため、ゴボウやニンジン、サツマイモなどを主とする畑作や栗などの果樹園芸作物の栽培が行われていたが、昭和40年頃から、周囲の楠、武蔵ヶ丘などに大型の住宅団地が造成され、また岩倉山一帯など、周辺の宅地開発が相次ぎ、急速な市街地化が進んでいる。遺跡付近も平成11年度に予定される熊本北バイパスの開通を見込んで、区画整理事業の計画が進められており、今後も市街地化は一層進み、周辺の環境も大きく変わっていくものと思われる。



第１図　古閑山遺跡調査区位置図

2　歴史的環境

古閑山遺跡の周辺には、各時代の遺跡が集中的に分布しており、熊本市内でも有数の遺跡群を形成している。詳しくは「熊本北バイパス周辺文化財分布図」(第２図）及び「熊本北バイパス周辺文化財一覧表」(第２、３表）にまとめたが、ここでは周辺の主な遺跡について、簡単にまとめてみたい。

（１）旧石器時代

熊本地方における歴史上の最初の痕跡である旧石器時代の遺跡であるが、最近では発見される遺跡数も増加し、次第にこの時代の文化の様相が明らかにされつつある。天拝山A遺跡からは安山岩製の尖頭器、楡木遺跡からは黒曜石製の細石核、庵ノ前遺跡と竜田陳内遺跡からは三稜尖頭器、さらに、清水町谷口遺跡からはナイフ形石器が出土している。また、国体主会場予定地である熊本市平山町の石の本遺跡からは約22,000年前の火山灰堆積層である「姶良・丹沢（ＡＴ）層」の下にあたる赤褐色土層から局部磨製石斧や剥片石器などの石器が出土し、熊本のみならず九州でも最も古い段階の石器群として注目されている。

（２）縄文時代

白川両岸の河岸段丘を中心に遺跡が点在している。一般には丘陵地で傾斜のある地形が多い北岸より、平坦な南岸の方に大規模な遺跡が立地しており、縄文早～晩期にわたる多量の土器が採集された新南部遺跡群、縄文後期の土器や土偶が多数出土した上南部遺跡、鐘崎式土器などが出土した渡鹿貝塚、後期中葉の北久根山式土器が出土し、その標識遺跡となった北久根山遺跡などが代表的な遺跡としてあげられる。

一方、北岸では、縄文早～晩期にわたる各種の土器が出土したカブト山遺跡や、縄文前期の曽畑式土器が多数出土した竜田陳内遺跡、縄文晩期の土器、土偶、配石遺構等が確認された竹ノ後遺跡が著名である。

（３）弥生時代

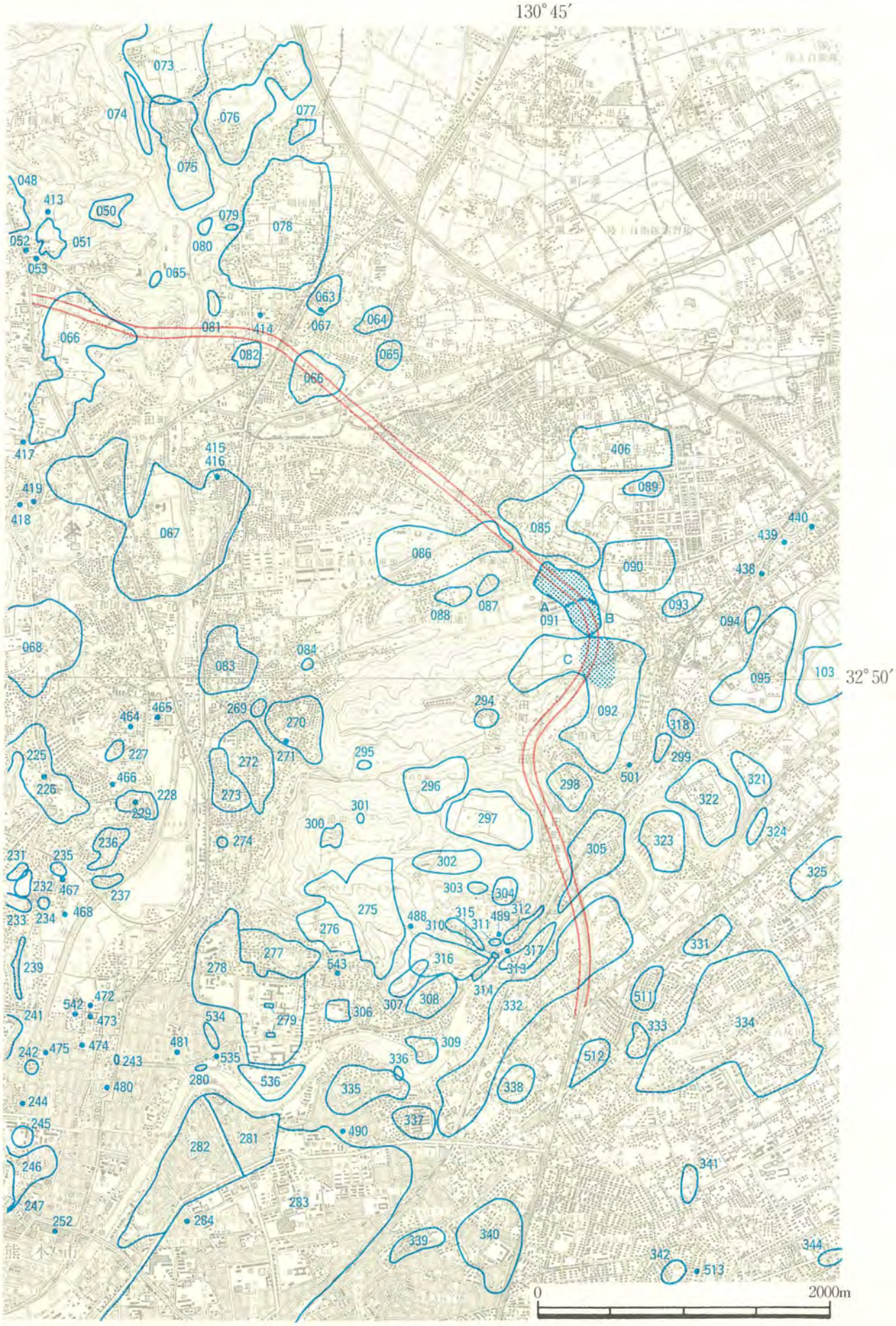
弥生時代の遺跡は、立田山周辺を中心に多数分布している。特に甕棺遺跡は黒髪式土器の標識となった黒髪町遺跡群をはじめ、清水町遺跡群や、竹ノ後遺跡、中牧鶴遺跡など、熊本市内でも有数の分布を示している。古閑山遺跡の周辺では、平成５年に調査され、人骨の残る須玖式の合口甕棺が出土した庵ノ前遺跡や、楡木遺跡などがあり、岩倉山でも、住宅団地造成の際に多くの甕棺が出土している。

住居跡を伴う遺跡では、白川南岸の西谷遺跡で中・後期の住居跡や磨製石鏃、鉄器など、下南部遺跡で後期の住居跡や磨製石鏃、石包丁などがそれぞれ出土している。また、県運動公園建設の際に調査が行われた石原亀ノ甲遺跡からは後期を中心とする集落の跡が確認され、銅鏡や土器、石器など多くの遺物が出土している。

（４）古墳時代

古墳時代になると、立田山一帯でも、万石茶山古墳や立田山南麓古墳などの古墳が築かれているが、その一方で、膨大な数の横穴群が立田山麓から白川北岸にかけて築かれている。これは、比較的加工しやすい凝灰岩の崖面が立田山周辺に多く存在するためで、宇留毛小碩橋際横穴群や浦山横穴群など、一大横穴群地帯を形成している。特につつじヶ丘横穴群は墓前祭祀の様子がわかる好資料として注目され、県指定文化財になっている。

また、集落関係では迫ノ上遺跡、下南部遺跡、竜田陳内遺跡などでかまどの付いた住居跡が確認されている。



第２図　熊本北バイパス周辺文化財分布図

第２表　熊本北バイパス周辺文化財一覧表（１）

市町村	番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	旧遺跡名	備考
熊本市	91A	庵ノ前	清水町兎谷、龍田町上立田ほか	旧石器～古墳	包蔵地			縄文早期住居跡、弥生甕棺墓群、古墳時代集落。県報告書
	91B	古関山	龍田町上立田	旧石器～古墳	包蔵地			円形周溝墓、石棺墓、木棺墓、古墳時代住居跡
	92C	迫ノ上	龍田町上立田	縄文～古墳	包蔵地			弥生甕棺墓、古墳時代集落
	48	四方寄	四方寄町	縄文	包蔵地		村上屋敷板碑	縄文後晩期大集落、調査あり
	50	城ヶ辻城跡	四方寄町	中世	城			田螺の貝塚あり、城主は西牟田常陸守
	51	四方寄御馬下	四方寄町	縄文	包蔵地			後晩期土器、土偶、住居跡
	52	御馬下の角小屋	四方寄町	江戸	建造物	市		細川、高津の巻勘交代休憩所
	53	四方寄六地蔵・庚申塔	四方寄町	中世	石造物	市		六地蔵…文明年間、九州でも希有の塔、庚申塔…天和元年銘
	65	辻横穴群	四方寄町	古墳	古墳			
	66	飛田遺跡群	四方寄町、飛田1･2丁目、大窪1丁目	縄文～中世	包蔵地		飛田塔の木・飛田上ノ原・飛田桑山塚古墳	桑山塚古墳…報告書、塔の木…縄文晩期土器、土師器
	67	清水町遺跡群	山室2～6丁目、八景水谷1丁目、大窪1･3～5丁目	縄文～中世	包蔵地		横山A～C・山室A・山室打出（山室地頭）屋敷・八景水谷・八景水谷愛棺群・山室東屋敷阿弥陀堂墓碑	弥生甕棺群、土師器、縄文前後晩期土器
	68	慈王	山室１丁目、慈王町ほか	縄文～平安	包蔵地		慈王寺跡・慈王寺跡板碑	縄文後期、弥生土器、土師・須恵器、内行花文鏡
	73	大鳥居遺跡群	大鳥居町、梶尾町ほか	縄文～中世	包蔵地		大鳥居・井出原柳房参考地	
	74	梶尾横穴群	梶尾町	古墳	古墳			風化、防空壕利用、数・原形不詳
	75	梶尾遺跡群	梶尾町	弥生	包蔵地		甲佐大明神遺跡	弥生中後期土器、甕棺群
	76	梶尾古関原・古屋敷	梶尾町	縄文～中世	包蔵地		梶尾谷山お茶屋跡	
	77	梶尾立野	梶尾町	縄文～中世	包蔵地			
	78	鶴羽田（鶴ノ原・垣ノ外）	鶴羽田町	縄文～古墳	包蔵地			縄文後晩期土器、土偶。県報告書。須恵・土師器、銅戈
	79	鶴羽田かぶと塚古墳	鶴羽田町	古墳	古墳			円墳
	80	竹の下横穴群	鶴羽田町	古墳	古墳			
	81	山際畑	鶴羽田町	縄文～中世	包蔵地			
	82	羽田	鶴羽田町	古代～近代	包蔵地		飛田眼鏡橋	土師器
	83	亀井遺跡群	清水亀井町	縄文～中世	包蔵地		亀井・亀井城跡・亀井金剛院跡・亀井松山墓地・亀井薬師堂前板碑	城は現光照寺内、板碑天文２年銘、縄文土器、土師器、瓦器など
	84	万石昭和団地前	清水万石５丁目、清水町兎谷	縄文～中世	包蔵地			
	85	楡木	清水町楡木	縄文・弥生	包蔵地			縄文早・前・後・晩期土器、弥生甕棺群
	86	岩倉山中腹	清水町兎谷	縄文～中世	包蔵地			弥生甕棺
	87	岩倉山山頂	清水町兎谷	縄文～中世	包蔵地			
	88	岩倉山	清水町兎谷	旧石器～中世	包蔵地			
	89	楡	楡３丁目	縄文～中世	包蔵地			縄文晩期土器
	90	堂ノ前遺跡群	清水町楡木、龍田町上立田ほか	旧石器～中世	包蔵地		堂ノ前遺跡・一丁畦遺跡	縄文早・前・晩期土器、弥生甕棺、土師・須恵器、須恵器窯跡
	92	迫ノ上遺跡群	龍田町上立田・陳内	縄文～平安	包蔵地		迫ノ上甕棺群・緑が丘・緑ヶ丘山ノ神 堂ノ前屋敷窯跡・長遍寺窯跡	堂ノ前窯跡は平安期か？縄文土器、弥生甕棺群、土師・須恵器
	93	老町鶴	龍田町上立田	縄文～中世	包蔵地			
	94	吉ノ平	龍田町上立田	縄文～中世	包蔵地			
	95	竹ノ後・芭蕉遺跡群	龍田町上立田・弓削	縄文～平安	包蔵地		竹ノ後・竹ノ後甕棺群・芭蕉	竹の後…縄文後期土器、土偶、弥生甕棺
	103	上南部	上南部	縄文	包蔵地			縄文前・後・晩期土器、土偶、後晩期集落、市報告書
	225	池田山伏塚遺跡群	池田２・３丁目、高平１丁目、津浦町	弥生・古墳	包蔵地		山伏塚A～C・長迫古墳・電通学園石棺・長迫	山伏塚…弥生土器、土師器、電通石棺…鏡・鉄剣、長迫…横穴式石室
	226	山伏塚	池田２丁目	近世	墳墓	市		
	227	高平箱式石棺	高平２丁目	古墳	埋葬		名義尾塚	
	228	永浦遺跡群	打越町	古墳～中世	包蔵地		稲荷山古墳・白川学園石棺・永浦城跡・天祖寺	永浦城…代官長浦氏居城
	229	稲荷山古墳	打越町	古墳	古墳	県		円墳、装飾古墳、横穴式小口積石室
	231	津浦一ノ谷横穴群	津浦町	古墳	古墳			防空壕利用、数・原形不詳
	232	一ノ谷	津浦町	古墳～平安	包蔵地			土師器
	233	稗田横穴群	稗田町、津浦町	古墳	古墳			防空壕利用、数・原形不詳
	234	舟場	津浦町	縄文～中世	包蔵地			
	235	舟場山古墳	津浦町	古墳	古墳			円墳、石棺
	236	紅葉遺跡群	打越町	弥生・中世	包蔵地		打越城跡・打越甕棺	
	237	打越貝塚	打越町	縄文	貝塚			北久根山式、石斧
	239	寺原横穴群	京町本丁･2丁目、壺川1･2丁目ほか	古墳	古墳			多数の横穴
	241	伝大道寺遺跡群	京町２丁目	縄文～近世	包蔵地			伝大道寺跡を含む
	242	内坪井	内坪井町、壺川１丁目	弥生	包蔵地			弥生土器
	243	安元元年笠塔婆塔身	坪井４丁目	古代	石造物	県		県重要文化財、本光寺
		安元元年笠塔婆	坪井４丁目	古代	石造物	市		市指定建造物
	244	夏目漱石内坪井旧居	内坪井町	明治	建造物	市		市指定建造物
	245	藤園中学校校庭	千葉城町	弥生～平安	包蔵地			甕棺群
	246	熊本城跡遺跡群	本丸、二の丸、宮内、古城町、古京町、千葉城町ほか	古墳～近代	包蔵地		古城横穴群・千葉城横穴群・特根橋際横穴群・茶臼山魔寺跡・藤崎宮跡・段山・千葉城跡・千葉城箱式石棺・古城跡・古城洋学校・医学校・新町一丁目御門跡	古城横穴…県報告書
	247	熊本城跡	本丸、二の丸、宮内、古城町、古京町、千葉城町ほか	近世・近代	城	国	熊本城跡・監物台・歩兵13連隊跡・一日亭跡・不開門六地蔵・小天守台・国立病院（一字一石碑・六地蔵）・陸軍兵器廠	国指定重要文化財・国指定特別史跡、加藤清正慶長12年築城
	252	小泉八雲熊本旧居	安政町	明治	建造物	市		市指定建造物
	269	古関前	清水亀井町、清水本町ほか	縄文～中世	包蔵地			旧石器
	270	清水町谷口	清水万石４丁目	旧石器～平安	包蔵地		万石遺跡	ナイフ型石器、県調査
	271	万石塚坊主古墳群	清水万石４丁目	古墳	古墳			２基円墳
	272	松崎遺跡群	清水本町、清水万石３丁目ほか	弥生～平安	包蔵地		松崎甕棺・松崎中世・松崎桑山天神跡	弥生甕棺、土師器、瓦器、青磁、白磁
	273	松崎八幡箱式石棺	清水本町	古墳	埋葬		松崎石棺	鉄剣
	274	室園	室園町	縄文～中世	包蔵地			
	275	黒髪町下立田遺跡群	黒髪４・５・８丁目	古墳～江戸	包蔵地		白石古墳・白石・立田山南中腹・城床古墳群・豊国廟跡	土師・須恵器、豊国廟跡…金箔瓦
	276	泰勝寺細川家墓所・庭園	黒髪４丁目	江戸	寺社	国	泰勝寺墓地古塔碑群・六地蔵	細川家霊廟は国指定史跡、寺跡を含む庭園は県指定
	277	小峰	黒髪３～５丁目	縄文～平安	包蔵地		金光山無相寺跡	縄文土器、弥生甕棺、土師・須恵器
	278	黒髪町遺跡群	黒髪１～３丁目	縄文～中世	包蔵地		黒髪町（清々園敬地）・九州女学院・坪井古屋敷甕棺	縄文土器、弥生甕棺墓群、土師・須恵器、古代住居跡、瓦など
	279	五高等中学校本館・化学実験場・表門	黒髪２丁目	明治	建造物	国		国指定重要文化財、イギリスのクイーン・アン様式
	280	子飼	子飼本町	縄文～中世	包蔵地			縄文後期土器
	281	大江白川	大江１丁目	縄文～近世	包蔵地		旧往生院跡・曽行寺の板碑・放牛地蔵	縄文早・前期土器、弥生甕棺
	282	新屋敷	新屋敷１～３丁目	弥生～中世	包蔵地			弥生住居・環濠、弥生前期土器、輸入陶磁器
	283	大江遺跡群	大江２～６丁目、新大江１・２丁目、大江本町、九品寺２～４丁目、白山３丁目、渡鹿１～４丁目ほか	縄文～明治	包蔵地		大江・　・　・　・　・杉ノ本・旧冠波高校・熊高敷地・熊高通り・託麻郡家推定地・渡鹿魔寺・熊本英学校跡・建設会館ほか	市報告書
	284	大江義塾跡（旧徳富邸）	大江４丁目	明治	建造物	県		大江義塾…県指定史跡、徳富旧邸…市指定史跡
	294	天狗山	龍田町上立田	旧石器～弥生	包蔵地			石棺、縄文早期土器、弥生甕棺

第３表　熊本北バイパス周辺文化財一覧表（２）

市町村	番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	旧遺跡名	備考
	295	万石桑越	桑越ヶ丘	縄文～古代	包蔵地			
	296	万石茶山	龍田町陳内、黒髪８丁目	縄文・弥生	包蔵地			
	297	秣野	龍田町陳内	縄文～平安	包蔵地			縄文晩期土器、土師・須恵器
	298	陳内上ノ園遺跡群	龍田町陳内	縄文～中世	包蔵地		上ノ園A・B・竜田陳内館跡	縄文早・後期土器、弥生甕棺、方形周溝墓
	299	三の宮（牧鶴宮脇）	龍田町上立田	縄文	包蔵地			縄文晩期土器
	300	立田山山頂	室園町	古墳～平安	包蔵地			土師・須恵器
	301	万石茶山古墳	室園町	古墳	古墳			横穴式石室
	302	立田山東中腹	黒髪８丁目	古代・中世	包蔵地			
	303	宇留毛浦山市営墓地	黒髪７丁目	縄文～平安	墓地			縄文土器、土師・須恵器
	304	九女グランド	龍田町陳内		包蔵地			
	305	竜田陳内遺跡群	龍田町陳内	旧石器～中世	包蔵地		竜田陳内・陳内宮の前	竜田陳内…県報告書
	306	桜山中学校校庭	黒髪５丁目	古墳～平安	包蔵地		下立田・里木	
	307	カブト山	黒髪８丁目	縄文	包蔵地			縄文早・前・後・晩期土器
	308	宇留毛A	黒髪６丁目	縄文	包蔵地			
	309	宇留毛B	黒髪６丁目	縄文～平安	包蔵地			縄文土器、土師器
	310	浦山第２横穴群	黒髪７丁目	古墳	古墳	県		
	311	浦山第１横穴群	黒髪７丁目	古墳	古墳	県		18基
	312	女瀬平横穴群	龍田町陳内	古墳	古墳		長薫寺横穴群を含む	
	313	長薫寺古墳	黒髪７丁目	古墳	古墳			円墳、横穴式石室
	314	宇留毛小碇橋際横穴群	黒髪７丁目	古墳	古墳			
	315	つつじヶ丘横穴群	黒髪７丁目	古墳	古墳	県		
	316	宇留毛神社周辺遺跡群	黒髪６～８丁目	古墳・中世	包蔵地		宇留毛神社境内古墳群・立田山南麓古墳（上・下）・宇留毛浦山火葬墓・立田山城跡	立田山南麓古墳…円墳２基、横穴式石室
	317	竜田口	龍田町陳内、黒髪７丁目	縄文～平安	包蔵地			縄文、弥生、土師・須恵器
	318	堂前畠	龍田町上立田	縄文～平安	包蔵地			
	321	王田	上南部町	縄文～平安	包蔵地			黒髪式合口甕棺
	322	牧鶴遺跡群	龍田町上立田	縄文～古墳	包蔵地		牧鶴古墳・西牧鶴箱式石棺群・中牧鶴箱式石棺群	
	323	下南部	下南部２丁目	縄文～古墳	包蔵地			須恵式甕棺
	324	平ノ山	上南部町		包蔵地			
	325	北小迫	御第２・３丁目		包蔵地			
	331	松の窪	西原３丁目、御第１丁目		包蔵地			
	332	新南部遺跡群	新南部1～6丁目、渡鹿8・9丁目ほか	旧石器～平安	包蔵地		新南部A～D・北久根山・西谷・小関原・小関小松山甕棺・新南部三石	西谷…県報告書
	333	南原	保田窪５丁目、八反田１丁目ほか		包蔵地			
	334	乾原・迫八反田	保田窪5丁目、八反田1-2丁目ほか	縄文～平安	包蔵地		乾原・迫八反田・田の迫	乾原…縄文後・晩期、迫八反田…縄文早期、市報告書
	335	渡鹿遺跡群	渡鹿５・６丁目	縄文～中世	包蔵地		渡鹿貝塚・北原甕棺	渡鹿貝塚…阿高・鐘崎式、北原…弥生甕棺、板碑釈迦像天文16年銘
	336	渡鹿菅原神社境内	渡鹿６丁目		寺社	市		市指定史跡
	337	辻	渡鹿７丁目	縄文～平安	包蔵地			縄文後・晩期、へら描き土器・墨書土器
	338	新南部西原	渡鹿９丁目、保田窪本町	縄文～平安	集落		保田窪地蔵碑	
	339	南平上	新大江３丁目	奈良・平安	包蔵地			
	340	帯山遺跡群	帯山１・２丁目	縄文～平安	包蔵地		帯山・保田窪	布目瓦、縄文前・中・後期土器
	341	保田窪東一本松	帯山６・７丁目	縄文～平安	包蔵地			
	342	三郎塚	三郎１丁目	縄文～平安	包蔵地			
	343	豪潤宝篋印塔	尾ノ上４丁目	中世	石造物	市		元は天福寺境内にあった
	344	新外A	新外２丁目	縄文	包蔵地			
	406	麻生田	清水町麻生田、楠５丁目	縄文～平安	包蔵地			
	413	半田天神板碑・石仏	四方寄町	中世	石造物			板碑大永６年銘
	414	古代官道	鶴羽田町	古代	包蔵地			
	415	須屋観音堂板碑	八景水谷１丁目	中世	石造物			
	416	八景水谷塔の本五輪残欠	八景水谷１丁目	中世	石造物			
	417	吉次往還追分け石	下硯川町	近世	石造物			
	418	大窪五輪塔	大窪２丁目	中世	石造物			
	419	大窪高笠観音堂前板碑	大窪２丁目	中世	石造物			
	438	二里木跡	龍田町弓削	近世	交通			
	439	武蔵塚	龍田町弓削	近世	墓			宮本武蔵墓、正保２年
	440	センボサン	龍田町弓削	中世	墳墓			経文ある小石出土
	464	永福寺跡	高平２丁目	中世・近世	寺社			臨済宗天文21年
	465	浄国禅寺古塔碑	高平２丁目	中世～明治	石造物	県		昭和42年本山より移転、塑像巡礼姿観音立像、松本喜三郎の作
	466	天福寺跡	打越町	中世	寺社			天台、布目瓦出土
	467	給場山古墳	津浦町	古墳	古墳			円墳、墳丘破壊
	468	宗徹寺跡	津浦町	中世	寺社			寛文12年
	472	探釣園跡	坪井４丁目	近世	園池			長岡監物邸庭園
	473	長岡監物屋敷跡	坪井４丁目	近世	包蔵地			
	474	成就院大喜山覚勝寺跡	坪井４丁目	中世	寺社			
	475	浄国寺跡	壺川１丁目	中世	寺社			
	480	報恩禅寺境内石造物	坪井３丁目	中世	石造物			豪潤宝篋印塔・坪井の跡
	481	お茶園跡	茶園町	近世	包蔵地			藩主重賢開園
	488	狐穴古墳参考地	黒髪８丁目	古墳	古墳			
	489	宇留毛城床古墳	黒髪７丁目	古墳	古墳			石材各所に散乱
	490	渡鹿板碑	渡鹿４丁目	中世	石造物			釈迦座像、天文16年
	501	伝立田将監墓・古塔碑群	龍田町上立田	中世	石造物			五輪塔
	511	市営託麻団地	西原２丁目	縄文	包蔵地			押型文、御第式
	512	西原	西原１丁目	縄文	包蔵地			押型文
	513	三郎塚古墳	三郎２丁目	古墳	古墳			
	534	七軒町	子飼本町	縄文～中世	包蔵地			
	535	一夜塘	黒髪２丁目	近世	建造物			藩主斉茲築造
	536	上河原	黒髪２丁目	縄文～古代	包蔵地			
	542	峰雲院跡墓地	坪井５丁目	中世	墓地			
	543	常楽寺	黒髪５丁目	中世	寺社			
西合志町	63	柏の山（須屋）	須屋	弥生	埋葬			弥生合口甕棺・土師器片一括
	64	梨の木	須屋	縄文	包蔵地			
	65	向島	須屋	縄文・弥生	包蔵地			甕棺
	66	須屋城跡	須屋	中世	城			中世城跡、菊池一族・須屋市蔵居館
	67	妙泉寺跡	須屋	中世	寺社			

（5）歴史時代

奈良・平安時代になると、律令体制の導入に伴い、肥後においても行政組織の整備、条里制の施行が進められ、その影響が周囲に及んでくる。現在の熊本市北部は、白川を境に北は飽田郡、南は託麻郡に属し、飽田郡家は京町付近、託麻群家は渡鹿付近にあったとされる。また、立田山西麓を官道（西海道）が通り、現在の子飼に蚕養駅が設置されたと推定されている。

立田山の東部では、須恵器の生産が行われるようになり、窯が作られた。当時の生産遺跡として長蓮寺窯跡や堂の前屋敷窯跡などがある。

また、白川南岸の大江遺跡群や新南部遺跡群の調査では、須恵器、土師器を伴う住居跡が多く確認され、西谷遺跡からは平安期の住居跡が出土している。

中世、立田山周辺では、西麓の亀井や南麓の宇留毛に城が築かれたが、生活の中心は主に白川と坪井川の沿岸の低地にあり、台地上は未開発であった。

近世になると、肥後藩によって、台地上の開拓が行われるようになった。現在の清水町、龍田町一帯は五町手永に属し、細川忠利は麻生田、楡木、兎谷などに地筒衆をおいて、開拓と防御の任にあたらせている。

現在の遺跡周辺は、熊本市域の拡大に伴う農地の宅地化が進み、また、造成によって旧地形が削られるなど、急速に昔の面影を失いつつある。また、交通混雑の緩和など、市街地化に伴う道路、施設などの環境整備が、早急な課題となっている。

第Ⅱ章　調査の成果

第１節　調査の概要

１　調査の概要

古閑山遺跡は、天拝山からほぼ東方向にのびる丘陵上に位置し、北バイパスの予定路線はこの丘陵を南北方向に切り通す形で設定されている。発掘調査は、工事計画の進捗状況に合わせて、調査区を２つに分け、それぞれ平成４年度と平成６、７年度に行った。

各調査区の地番及び調査面積は、平成４年度調査区が龍田町大字上立田字古閑山2,368－１、2,347番地などの約4,500㎡、平成６、７年度調査区が字古閑山2,321、2,326番地、字天神免2,171、2,174番地などの約3,000㎡である。

（１）平成４年度調査

平成４年度の調査区は、丘陵の北側斜面部分にあたり、海抜は75～81mである。調査は平成４年９月より開始した。重機による表土剥ぎ後に、一辺10mのグリッドを設定（第３図）し、土層観察用のブリッジ（畔）を残して包含層を掘り下げた。

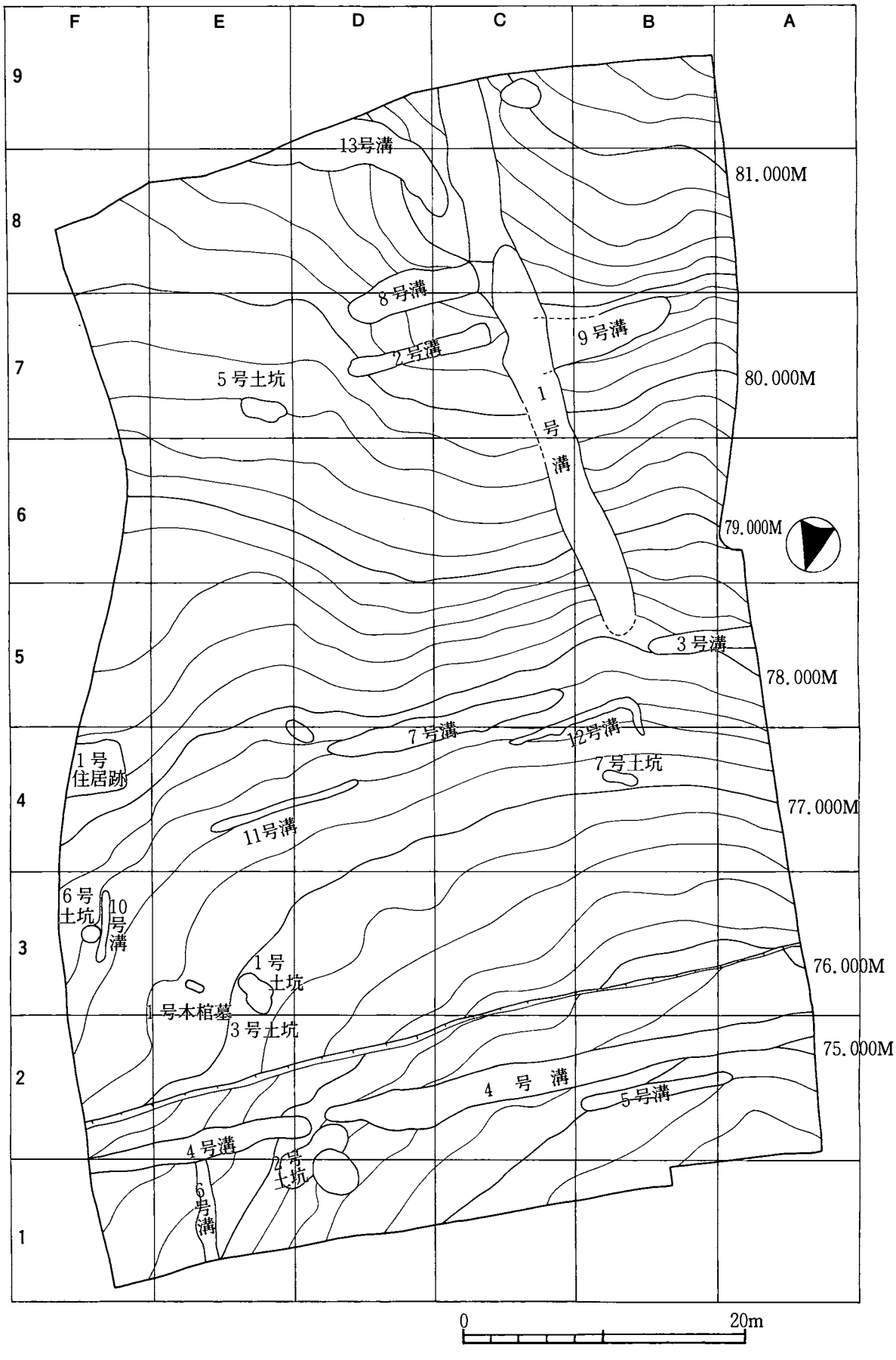
調査区は竹林であったため、竹根の攪乱が激しく、包含層は一部しか残っていなかったが、主に縄文時代早期・前期・後期・晩期、弥生時代中期・後期、古墳時代の遺物が出土した。特に古墳時代の遺物は最も多く、土師器を中心に、鉄の刀子、銅環、ガラス玉などが出土した。遺構は竪穴住居跡１基、木棺墓１基、溝13本、小土坑多数が確認された。出土遺物などから、住居跡と木棺墓は古墳時代、溝は中世以降のものと思われる。さらに、調査区からは多数の小土坑が確認された。この中には柱穴と思われるものがあり、何らかの建物が建っていた可能性があるが、はっきりとした建物跡は確認することができなかった。また、土層確認のため、Ｆ－６グリッドにトレンチを設定し掘り下げたところ、旧石器時代の台形様石器が出土した。このため、周辺を拡張して旧石器の調査を行い、Ｅ－４グリッドからも黒曜石の剥片が出土した。

平成５年３月に遺構実測、写真撮影等すべての作業が終わり、調査を終了した。

（２）平成６、７年度調査

平成６、７年度調査は、平成７年１月18日より開始した。調査区は、平成４年度調査区の南側部分にあたり、丘陵の尾根上にある。重機による表土剥ぎ後、調査区の清掃とグリッドの設定を行ったが、平成４年度調査区はすでに工事によって削平され、グリッドの基準線が不明であったため、新たに基準線を設定して、１辺10mのグリッドを設定した（第４図）。

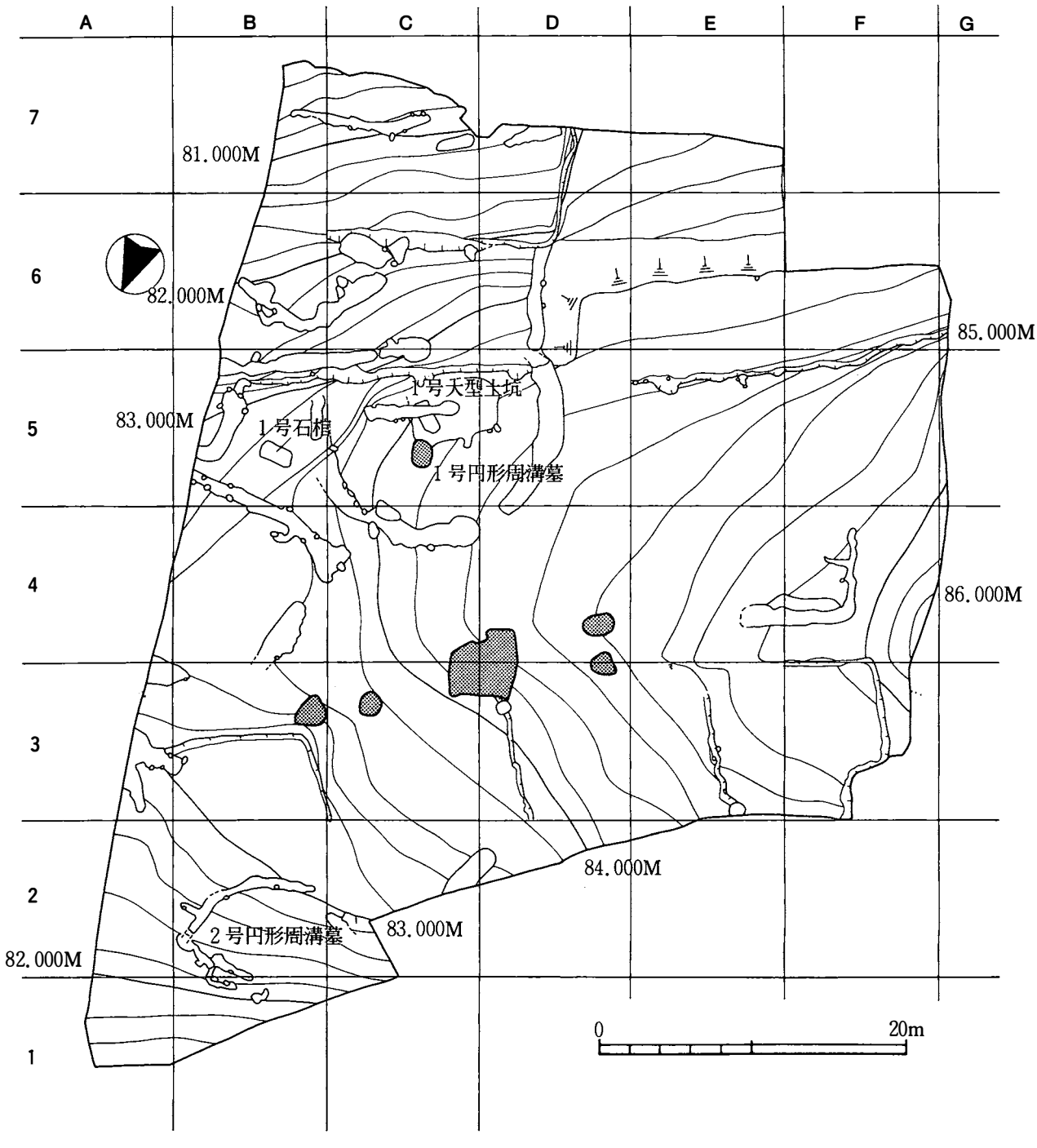
グリッド設定後、ブリッジ（畔）を残して包含層を掘り下げた。調査区は開墾による削平をかなり受けており、包含層の残りはあまり良くなかったが、主に縄文時代早期・前期・後期・晩期、弥生時代中期・後期、古墳時代の遺物が出土した。包含層出土の遺物については、遺物分布図に出土地点、絶対高を記入後に取り上げた。また、主要な遺構として、円形周溝墓２基、石棺墓１基、溝13本が確認された。出土土器などから円形周溝墓と石棺墓は古墳時代、溝は近世以降のものと思われる。遺構については20分の１で実測図を作成したが、円形周溝墓の主体部および石棺墓については10分の１で作成した。遺構から出土した遺物については、上層のものは原則として一括で取り上げ、下層のものである程度の大きさをもつものについては、実測したあと番号をつけて取り上げた。調査途中に年度変わりのため一時調査を中断したが、引き続き平成７年



第3図　平成4年度調査区遺構配置図

度も４月17日より作業を再開した。

遺構実測と包含層の掘り下げ後、バルーンを使用して調査区全景の空中写真を撮影し、７月10日に調査を終了した。



第４図　平成６、７年度調査区遺構配置図

2　遺跡の基本層位

調査区の掘り下げに先立ち、数か所に土層確認トレンチを入れ、その結果をもとに検討し、遺跡の基本層序とした（第５図）。

Ⅰ層は暗茶褐色土層で、耕作土層である。近世陶磁器、土師器が入る。

Ⅱ層は黒色土層で、耕作による攪乱を受け、近世陶磁器、土師器が入る。溝の一部はこの層より掘り込まれている。

Ⅲａ層は暗褐色土層である。アカホヤを含む。土師器、須恵器、縄文晩期土器が入る。遺構の多くはこの層より掘り込まれていたと思われる。

Ⅲｂ層は褐色土層である。アカホヤを含む。

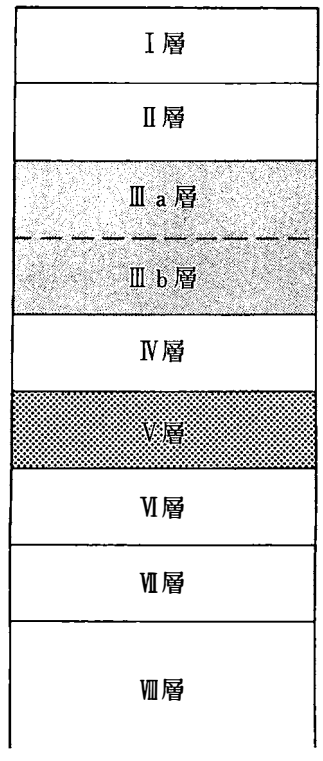
Ⅳ層は黒褐色土層である。

Ⅴ層は、ニガシロと通称される黒褐色土層で、層が塊状に硬化している。中には長石、石英、火山ガラスなどを多量に含んでいる。無遺物層である。

Ⅵ層は、明茶褐色ローム質土層で、所々にしか見られない。

Ⅶ層は黄色ローム層である。やや粘質で、砂礫および小石を多く含む。黒曜石の剥片が出土している。

Ⅷ層も暗黄色ローム層で、遺物の出土は見られなかった。



第５図　基本土層図

第２節　旧石器時代の遺物

平成４年度調査時の旧石器時代の調査の結果、旧石器時代のものと思われる台形様石器や剥片が出土した。

台形様石器（第６図１）

平成４年度調査区Ｆ－６グリッドで、ニガシロ層下のローム層直上から出土した。チャート製の厚みのある幅広の剥片を素材とし、左側縁の表裏両面から平坦剥離を施し、右側縁は表面に裏面側からやや急斜度の調整加工を施している。また、左側縁裏面側は平坦剥離により素材剥片の打点部が除去されている。長さ2.9cm、幅2.5cm、厚さ0.9cm、重さ6.3gを測る。

細石刃（２）

平成４年度調査区の清掃中に出土した。黒曜石製で、長さ1.15cm、幅0.55cm、厚さ0.15cm、重さ0.1gである。頭部及び先端部を欠失している。素材となった黒曜石は、挟雑物を全く含まない良質の石材が利用されており、西北九州産と考えられる。両側縁には使用痕が残る。しかし、今回の調査では、細石刃核は検出されておらず、また資料も頭部を欠失しているため詳細な位置づけは困難である。

剥片（３）

平成４年度調査区Ｅ－５グリッドで、ニガシロ層下のローム層直上から出土した黒曜石の剥片である。単

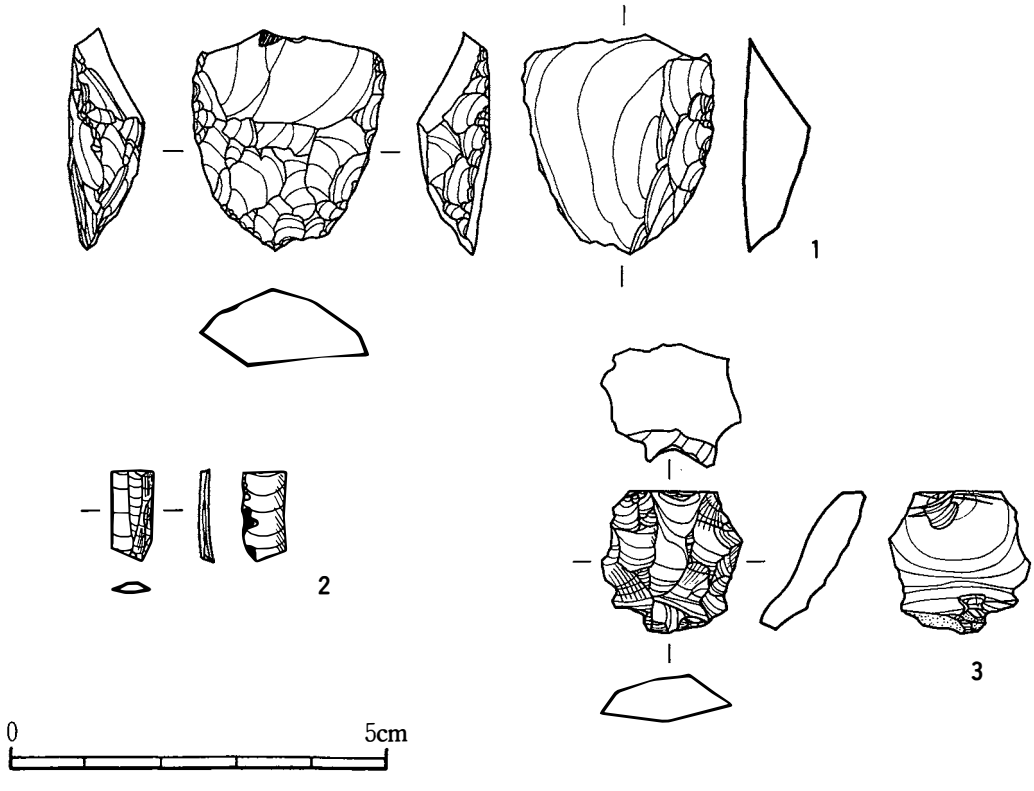
剥離面を打面とし剥出され、下端部に礫面を残す。表面の剥離構成は石器中央に向けほぼ全周に剥離痕が認められる。このことから、さほど大きくない分割礫ないしは剥片を石核素材とし打面を縁辺に沿って頻繁に転移する剥離技術が採用されていたことが窺える。長さ1.8cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm、重さ2.2gである。縁辺に使用痕などは認められない。

第３節　縄文時代の遺物

１　土器（第７、８図）

古閑山遺跡から出土した縄文土器の時期は、早期、前期、後期、晩期にわたるが、早期と後期、晩期の土器がその多くを占める。このうち、口縁部と底部を中心に器形の推定が可能なものを50点掲載した。以下、これらの土器について時期別に見ていきたい。

なお、個別の土器の計測値および観察結果については［出土縄文土器観察表］（第４表）にまとめている。



第６図　出土旧石器

（1）縄文早期土器

押型文土器、撚糸文土器、条痕文土器、塞ノ神式土器などが出土した。

押型文土器（1～12）

格子目文（1）、山形文（2～6）、楕円文（7～11）、同心円文（12）の4種類である。

押型文土器は口縁部周辺の施文の特徴から、外面のみに押型文を施文したもの（Ⅰ類）、外面に押型文、内面は原体条痕が施文されたもの（Ⅱ類）、内外面とも押型文が施文されたもの（Ⅲ類）、外面に押型文、内面に原体条痕と押型文が施文されたもの（Ⅳ類）の4つに分けることができる。また、口縁部の器形からは、口縁部が直口するもの（A類）、端部がわずかに外反するもの（B類）、大きく外反するもの（C類）に分けることができる。

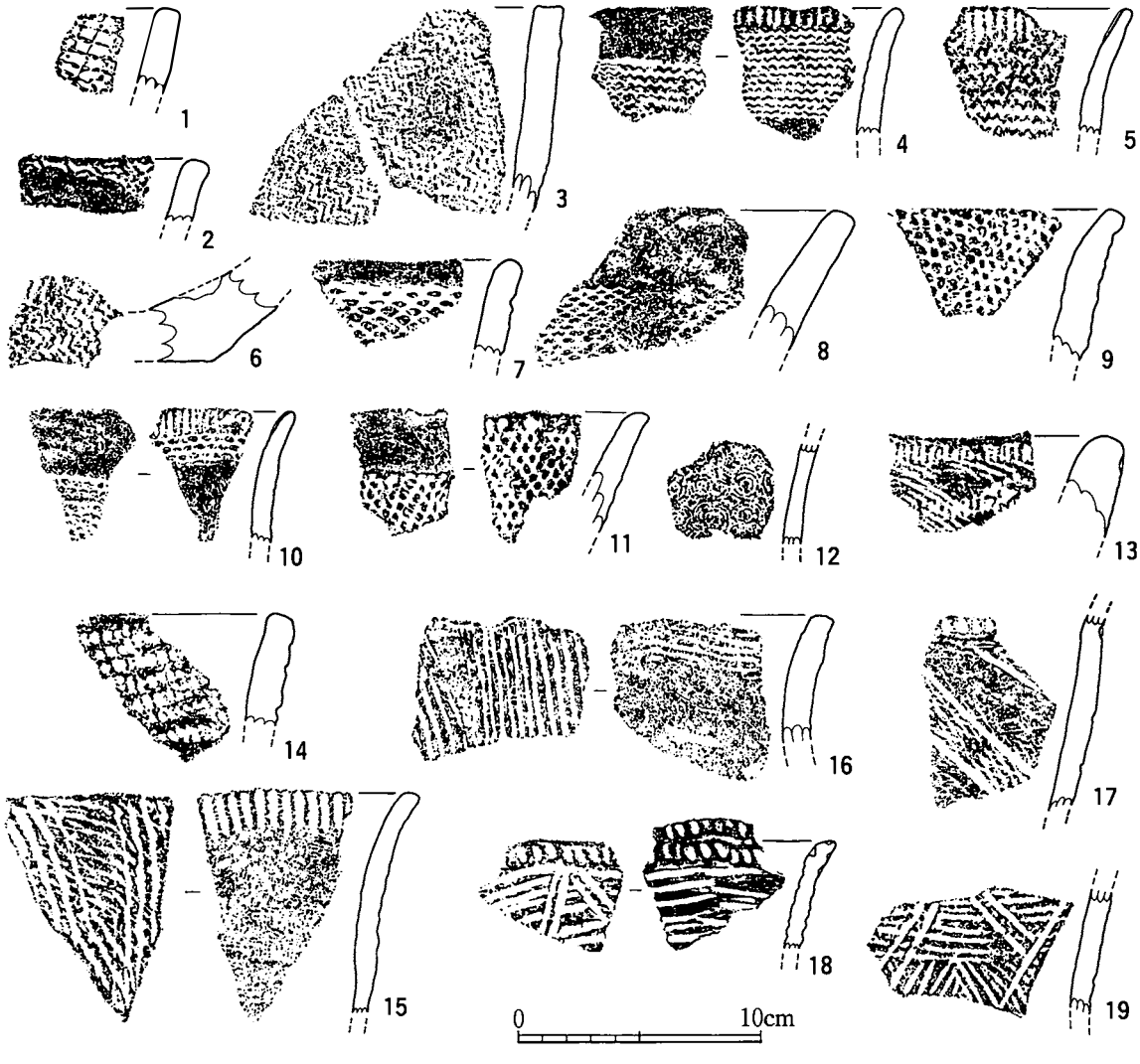
このうち、古閑山遺跡から出土した押型文土器はⅠA、ⅠB、ⅣA、ⅣB、の4類である。

ⅠA類（格子目1、山形2、3、楕円7、8）

直口口縁で、外面に押型文を施文しているものである。内面は主にナデ調整で、横位施文が多くを占めるが、斜位施文のもの（3）もある。

ⅠB類（楕円9）

口縁端部がわずかに外反し、外面に押型文を施文しているものである。内面は主にナデ調整である。施文



第7図　出土縄文土器（1）

方向は縦位である。

ⅣＡ類（楕円11）

直口口縁で、口縁部内面に原体条痕と押型文、外面に押型文を施文しているものである。内外面とも縦位施文である。

ⅣＢ類（山形４、５、楕円10）

口縁端部がわずかに外反し、口縁部内面に原体条痕と押型文、外面に押型文を施文しているものである。３点とも内外面横位施文である。なお、５の残存部の外面はナデ調整のみであるが、他の例から見て、下部に押型文が施文されている可能性が強いためⅣＢ類に含めた。

胴部（12）

外面に同心円押型文を持つ胴部片である。文様の特徴から手向山式土器と思われる。

底部（６）

平底で外面に山形押型文が施文されている。底部と胴部は直線的につながっている。

撚糸文土器（13～15）

撚糸文土器についても、形態的に押型文土器と同様の分類が可能で、13、14はＩＡ類、15はⅡＢ類に分類される。施文方向は14が横位施文、15が縦位と横位の併用である。13は斜位の回転施文を縦位の連続押圧文で区画している。

条痕文土器（16）

口縁部の破片である。外反気味で、外面に縦位、内面口縁部に横位の条痕文が施され、口唇部にも条痕がある。押型文ⅡＢ類と近似した特徴を持ち、文様置換の関係にあると考えられる。

塞ノ神式土器（17）

胴部破片である。外面に連点文と沈線で区画された撚糸文文様帯をもつ。

（２）縄文前期土器

曽畑式土器（18、19）

18は口縁部の破片である。外反気味で、内面に連続刺突文と平行沈線文、外面に連続刺突文と平行・山形沈線文の組み合わせが施文されている。また口唇部にも連続刺突文がある。19は胴部破片で外面に平行・山形沈線文の組み合わせが施文されている。

（３）縄文後期前半土器

磨消縄文系（Ｂ類）とそれ以外のもの（Ａ類）に分けた。

Ａ類（20～25）

直口口縁のもの（20、21）、口縁部を肥厚させたもの（22、23）、外反口縁で口縁部に断面三角突帯を張り付けたもの（24、25）に分けられる。20、21は御手洗A式、22、23は出水式、24、25は市来式に似た特徴を持つ。

Ｂ類（26～32）

直口口縁のもの（26）、頸部で屈曲して外傾する口縁をもつもの（27）、口縁外面に突帯をもつもの（28～30）、口縁部を肥厚させたもの（31、32）に分けられる。27～30は鐘崎式、31、32は北久根山式に近似する特徴を持つ。

（4）縄文後期後半、晩期土器

器形の特徴から深鉢型土器と浅鉢型土器に分け、さらに残存部、形態の特徴をもとに細分を行った。

深鉢形土器（34～42）

口縁部の形態によってA、B類に分類した。

A類（34）

外に開く頸部から直立気味に立ち上がる口縁帯を持つもの。口縁帯には3条の沈線をもつ。

B類（35～42）

直口口縁で直立か、外反気味に開く口縁部を持つもの。口縁部のみの破片が多く、下部の形態が不明なものが多い。ほとんどが粗製で、外面は条痕調整である。37は口唇がわずかに内彎し、外面に放射状に開く沈線文を持つ。

浅鉢形土器（33、43～45）

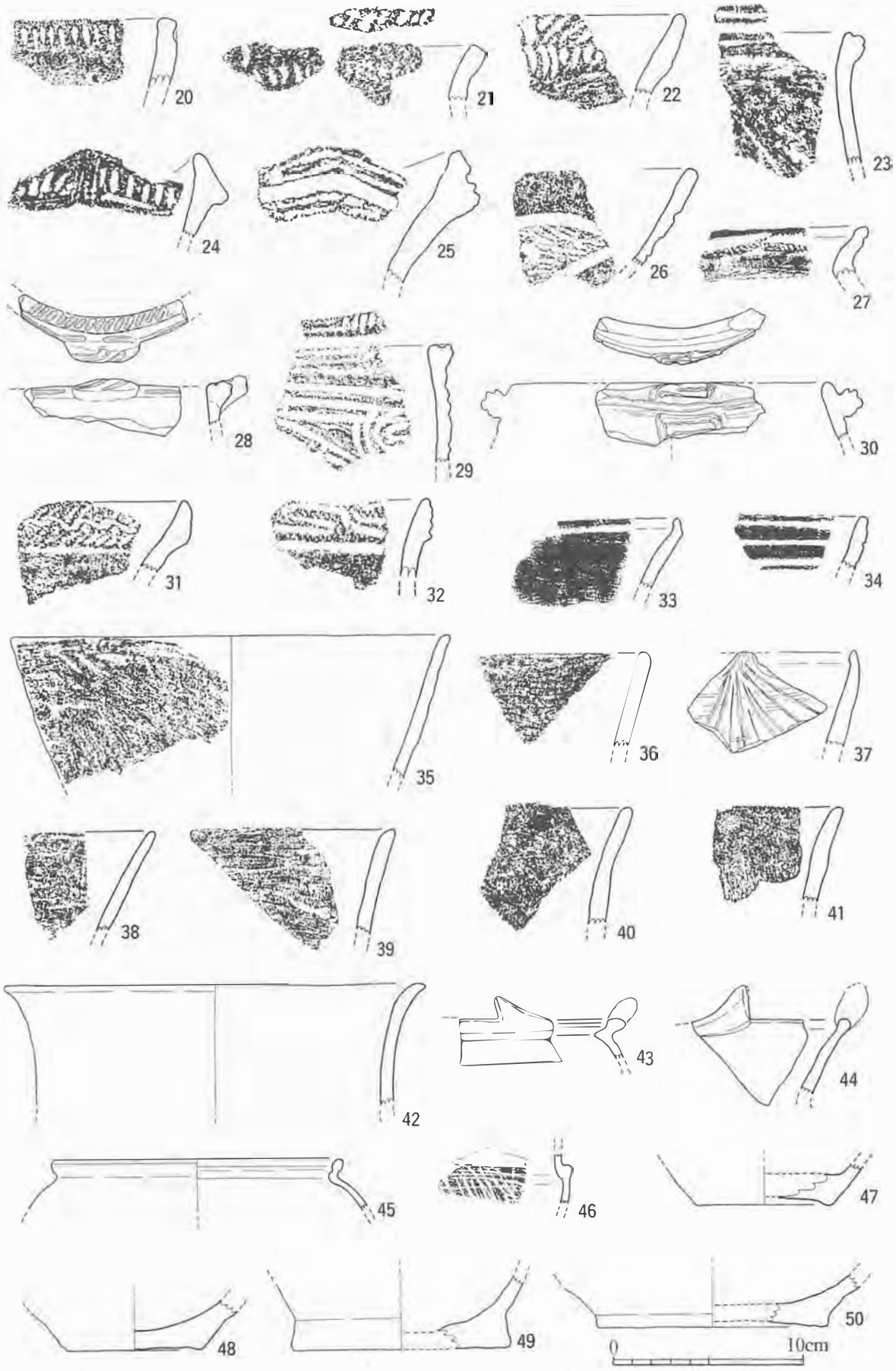
口縁部の形態によってC～E類に分類した。

C類（33）

外反する頸部から直立気味に立ち上がる口縁帯を持つもの。内外面ともミガキ調整で、口縁帯には1条の凹線がある。

第4表　出土縄文土器観察表

遺物番号	器種	口底径(cm)	現存高(cm)	調整 (内面)	調整 (外面)	色調 (内面)	色調 (外面)	胎土	焼成	調査年度	取上番号	備考
1	鉢口縁		3.4	ナデ	格子目文	にぶ黄橙(10YR6/4)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	やや良	H6	C－4P－1	
2	鉢口縁		2.5	ナデ	山形文	にぶ黄橙(10YR6/3)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	E－3	
3	鉢口縁		8.0	ナデ	山形文	にぶ黄橙(10YR6/4)	にぶ黄褐(10YR5/3)	粗砂粒多量、長石、石英、角閃石を含む	やや良	H6	C－4P－1	
4	鉢口縁		4.9	原体条痕、山形文、ナデ	ナデ、山形文	にぶ黄橙(10YR6/4)	にぶ黄褐(10YR5/3)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H4	10T	
5	鉢口縁		5.0	原体条痕、山形文	ナデ	灰黄褐(10YR5/2)	にぶ黄橙(10YR7/3)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	1号大型土坑3	
6	鉢底部		3.6	ナデ	山形文	にぶ褐(7.5YR5/4)	橙(5YR6/6)	粗砂粒多量、長石、石英、角閃石を含む	良好	H6	B－5	
7	鉢口縁		6.8	ナデ	ナデ、楕円文	にぶ褐(7.5YR5	にぶ褐(7.5YR5/4	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6		
8	鉢口縁		5.5	ナデ	ナデ、楕円文	にぶ黄褐(10YR5/3)	にぶ黄褐(10YR5/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	E－6	
9	鉢口縁		1.3	ナデ	楕円文	にぶ黄褐(10	にぶ橙(7.5YR6/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H4	1T	
10	鉢口縁		5.2	原体条痕、楕円文、ナデ	ナデ、楕円文	にぶ黄褐(10YR5/3)	にぶ黄褐(10YR5/3)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	D-5 1周溝墓周溝	
11	鉢口縁		4.8	原体条痕、楕円文	ナデ、楕円文	にぶ黄橙(10YR6/4)	にぶ黄褐(10YR5/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	B－5 63	
12	鉢胴部			ナデ	同心円文	にぶ黄褐(10YR5/4)	にぶ黄褐(10YR5/4)	砂粒少量、石英、長石を含む	不良	H4	F－6P－1	
13	鉢口縁		4.0	ナデ	撚糸文	にぶ黄橙(10YR6/4)	にぶ黄橙(10YR6/4)	粗砂粒多量、長石、石英、角閃石を含む	良好	H6	E－6	
14	鉢口縁		4.4	ナデ	撚糸文	にぶ黄褐(10YR5/4)	にぶ赤褐(5YR5/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	やや良	H6	E－7	
15	鉢口縁		9.0	原体条痕、ナデ	撚糸文	にぶ黄橙(10YR6/4)	にぶ黄褐(10YR4/3)	砂粒多量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	H4	D－3 151	
16	鉢口縁		5.0	条痕文、ナデ	条痕文、口唇部条痕文	にぶ黄褐(10YR5/3)	にぶ黄褐(10YR5/3)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	不良	H6	E－7	
17	鉢胴部			ナデ	連点文、沈線区画撚糸文	橙(7.5YR6/6)	にぶ褐(7.5YR5	砂粒多量、長石、石英、角閃石を含む	やや良	H6	E－5	
18	鉢口縁		4.2	刺突文、平行沈線文、口唇部刺突文	刺突文、平行沈線文、山形沈線文	にぶ橙(7	橙(7.5YR6	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H4	D－9 14	
19	鉢胴部			ナデ	平行沈線文、山形沈線文	にぶ黄橙(10YR6/4)	にぶ黄褐(10YR5/3)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	B－5 161	
20	鉢口縁		3.6	ナデ	ナデ、刺突文	にぶ黄褐(10YR5/3)	にぶ黄褐(10YR5/4)	砂粒多量、長石、角閃石を含む	良好	H6	B－5	
21	鉢口縁		2.8	ナデ、連点文	ナデ、連点文、口唇刻目	にぶ黄橙(10YR6/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	やや良	H6	A－1 15溝	
22	鉢口縁		4.0	ナデ	爪形連点文、刺突文、ナデ	にぶ黄褐(10YR5/4)	黄褐(10YR5/8)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H4	F－4 29	
23	鉢口縁		6.7	ナデ	ナデ、沈線1条、口唇沈線1条	にぶ黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒少量、長石、石英、角閃石を含む	良好	H6	B－5 125	
24	鉢口縁		4.3	ナデ	貝殻刺突文、連点文	にぶ褐(7.5YR5/4)	にぶ赤褐(5YR5/4)	砂粒少量、長石、石英、角閃石を含む	良好	H6	B－4 5溝	波状口縁
25	鉢口縁		6.8	条痕後ナデ	貝殻刺突文、沈線、条痕後ナデ	にぶ黄橙(10YR6/4)	にぶ橙(7.	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	C－6P－2	波状口縁
26	鉢口縁		5.7	ヘラミガキ	ヘラミガキ、沈線文、磨消縄文	にぶ橙(7.5YR6/4)	にぶ褐(7.5YR5/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H4	C－2	
27	鉢口縁		2.7	ヘラミガキ	ヘラミガキ、沈線文、磨消縄文	灰黄褐(10YR4/2)	にぶ褐(7.	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	B－5 155	
28	鉢口縁		4.5	ナデ	ナデ、沈線文突起、口唇刺突文	にぶ黄褐(10YR5/3)	灰黄褐(10YR5/2)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H4	B－2 17	
29	鉢口縁		6.1	ナデ	ナデ、沈線文、口唇刺突文	灰黄褐(10YR4/2)	にぶ黄褐(10YR5/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	やや良	H6	B－2P－1	
30	鉢口縁	16.4	3.0	ヘラミガキ	ヘラミガキ、沈線文、磨消縄文	にぶ黄橙(10YR6/4)	灰黄褐(10YR5/2)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H4	196	
31	鉢口縁		3.7	ナデ	撚糸文、ナデ	暗褐(10YR3/	にぶ褐(7.5	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	やや良	H4		内面煤付着
32	鉢口縁		4.2	ナデ	沈線文、撚糸文、ナデ	にぶ黄褐(10YR5/3)	にぶ黄褐(10YR5/3)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	やや良	H6	D-5 1周溝墓周溝	波状口縁
33	浅鉢口縁		3.7	ヘラミガキ	ヘラミガキ、凹線1条	にぶ黄橙(10YR6/4)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石、黒曜石を含む	良好	H4	F－5 3	
34	深鉢口縁		2.8	ナデ	ヘラミガキ、沈線3条	浅黄(2.5YR7	黄灰(2.5YR4/1)	砂粒多量、角閃石、長石、雲母を含む	良好	H4		
35	深鉢口縁	23.2	7.4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶ黄橙(10YR6/4)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石、黒曜石を含む	良好	H4	134	
36	深鉢口縁		4.9	ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰黄褐(10YR5/2)	にぶ黄褐(10YR5/3)	砂粒少量、角閃石、長石を含む	良好	H4	B－2	外面煤付着
37	深鉢口縁		5.0	ナデ	条痕、沈線文	にぶ黄橙(10YR6/4)	にぶ黄橙(10YR6/3)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H4		
38	深鉢口縁		5.2	ヘラミガキ	ナデ	黄灰(2.5YR4/	にぶ黄橙(10YR7/3)	砂粒少量、角閃石、長石を含む	良好	H4	C,D	
39	深鉢口縁		5.4	ナデ	ナデ	にぶ黄橙(10YR6/4)	灰黄褐(10YR5/2)	砂粒多量、角閃石、長石を含む	良好	H4		
40	深鉢口縁		6.0	ナデ	ナデ	にぶ黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/3)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H4	F－4 1住30	外面煤付着
41	深鉢口縁		4.9	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶ黄橙(10YR6/4)	黒褐(10YR3/2)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H4	A－2	外面煤付着
42	深鉢口	22.2	6.2	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶ黄橙(10YR6/3)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒多量、角閃石、長石、緑石を含む	良好	H4	88	
43	浅鉢口縁		3.2	ヘラミガキ	ヘラミガキ、リボン状突起	灰黄褐(10YR5/2)	にぶ黄褐(10YR5/3)	砂粒微量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	C－7	
44	浅鉢口縁		5.7	ヘラミガキ	ヘラミガキ、リボン状突起	黒(10YR2/1)	黒(10YR2/	砂粒微量、長石を含む	良好	H4	E－3P－2 5	
45	浅鉢口縁	15.2	2.7	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶ橙(7.5YR7/4)	にぶ橙(7.5	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H4	211	
46	浅鉢胴部			ヘラミガキ	ヘラミガキ、条痕	褐灰(10YR5/	褐灰(10YR4/1)	砂粒微量、長石を含む	良好	H4		
47	鉢底部	7.0	2.1	ナデ	ヘラミガキ	にぶ黄橙(10YR7/3)	灰黄褐(10YR6/2)	砂粒多量、角閃石、長石を含む	良好	H4	B－2 16	
48	鉢底部	7.2	2.6	ナデ	ヘラミガキ	灰黄褐(10YR5/2)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒多量、角閃石、長石を含む	良好	H4	F－2 4溝6	
49	鉢底部	11.6	3.8	ナデ	ナデ	にぶ黄褐(10YR5/3)	にぶ橙(7	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H4	D-8·9 13溝27	
50	鉢底部	12.0	2.8	ナデ	ナデ	にぶ黄橙(10YR7/3)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H4	F－3 9土坑2	


20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
0
10cm

第８図　出土縄文土器（２）

Ｄ類（43、45）

頸部でくの字状に屈曲し、外傾する口縁部の内面に粘土を貼り付けて口唇部を分厚くしたもの。43は屈曲が強く、リボン状突起がある。

Ｅ類（44）

外反する口縁部の内面に突帯を貼り付け、短い口縁帯を作り出したもの。リボン状突起がある。

胴部（46）

浅鉢形土器と考えられる。中位で稜をなして屈曲し、下位外面には条痕をもつ。

底部（47～50）

形態により、やや上げ底で胴部から底部端にかけてほぼ直線的に連なるもの（47、48）と、平底で底部端が張り出すもの（49）、胴部が外反し、ほぼ垂直に底部端に連なるもの（50）の３つに細分できる。

２　石器（第９～16図）

調査区から出土した縄文時代の石器のうち、主要な遺物64点を掲載した。以下、器種ごとに、特徴を見ていきたい。

なお、それぞれの遺物の計測値については、「出土縄文石器観察表」(

石鏃（１～21）

石鏃は、21点出土した。石材としては、黒曜石製が13点、チャート製が１点、安山岩製が７点となっている。

出土した石鏃は、すべて無茎鏃にあたるが、その形状によって、正三角形を呈するもの（Ⅰ群）、二等辺三角形を呈するもの（Ⅱ群）、その他の形状のもの（Ⅲ群）の３種類に分けられる。

さらに、基部の形状の特徴から、平基のもの（Ａ類）、Ｖ字状に浅い抉りが入るもの（Ｂ類）、Ｕ字状に抉りが入るもの（Ｃ類）、深く抉られた長脚のもの（Ｄ類）に分けることができる。

このうち、実際に出土したのは６種類で、ⅡＢ類が７点で一番多く、次いでⅡＣ類が６点、ⅡＡ類が４点出土している。

ⅠＡ類（１、２）

平基で、正三角形を呈する石鏃である。２点出土した。１は素材剥片の剥離面を残し、先端と基部の一部を欠損している。

ⅡＡ類（３～５、７）

平基で、二等辺三角形を呈する石鏃である。４点出土した。３は素材剥片の剥離面が一部残っている。また、５は内彎気味の縁辺をもつ。なお、３～５は基部の一部を欠損している。

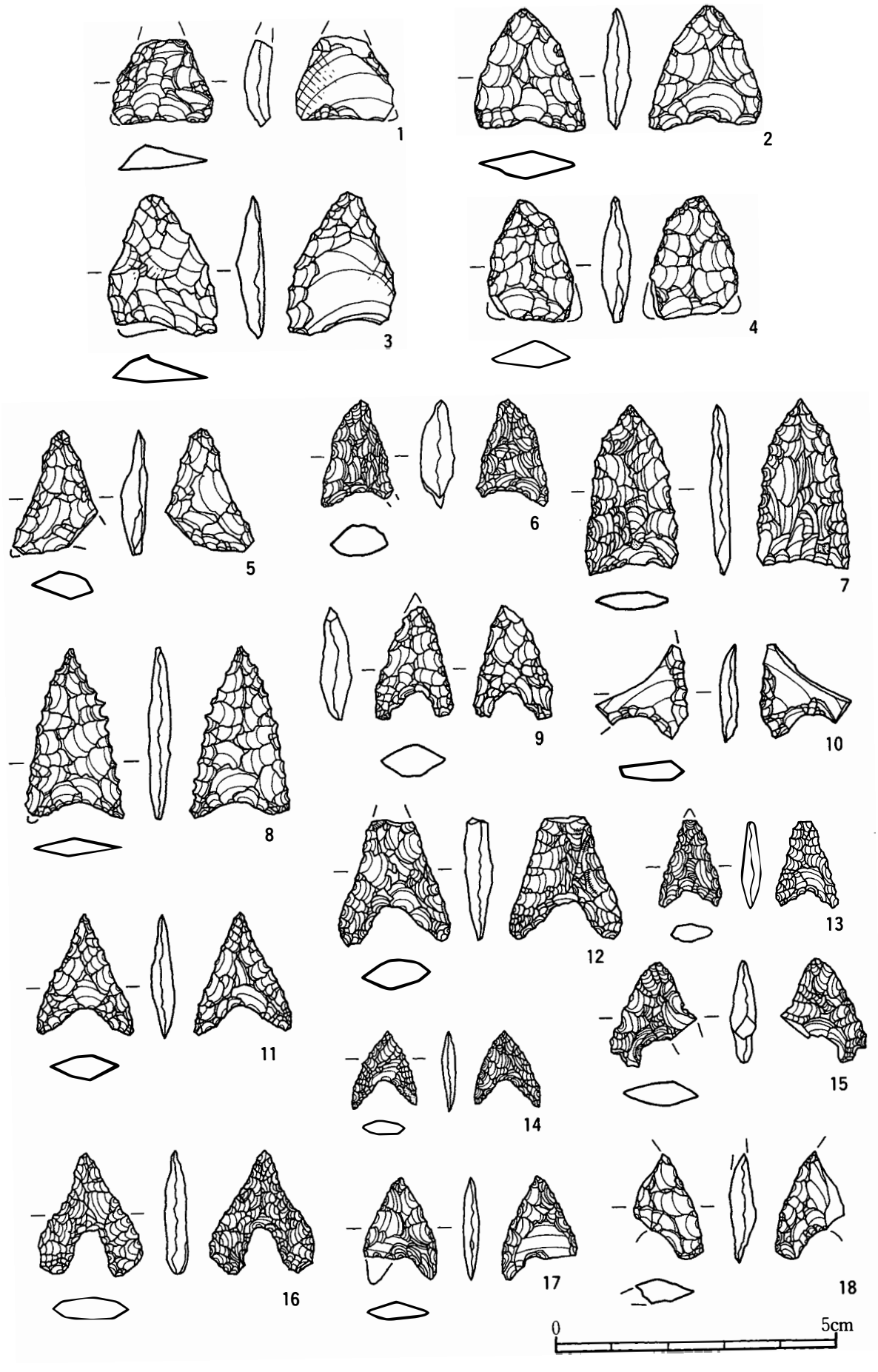
ⅡＢ類（６、８、10～14）

二等辺三角形で、基部にＶ字状の浅い抉りが入る石鏃である。７点出土している。

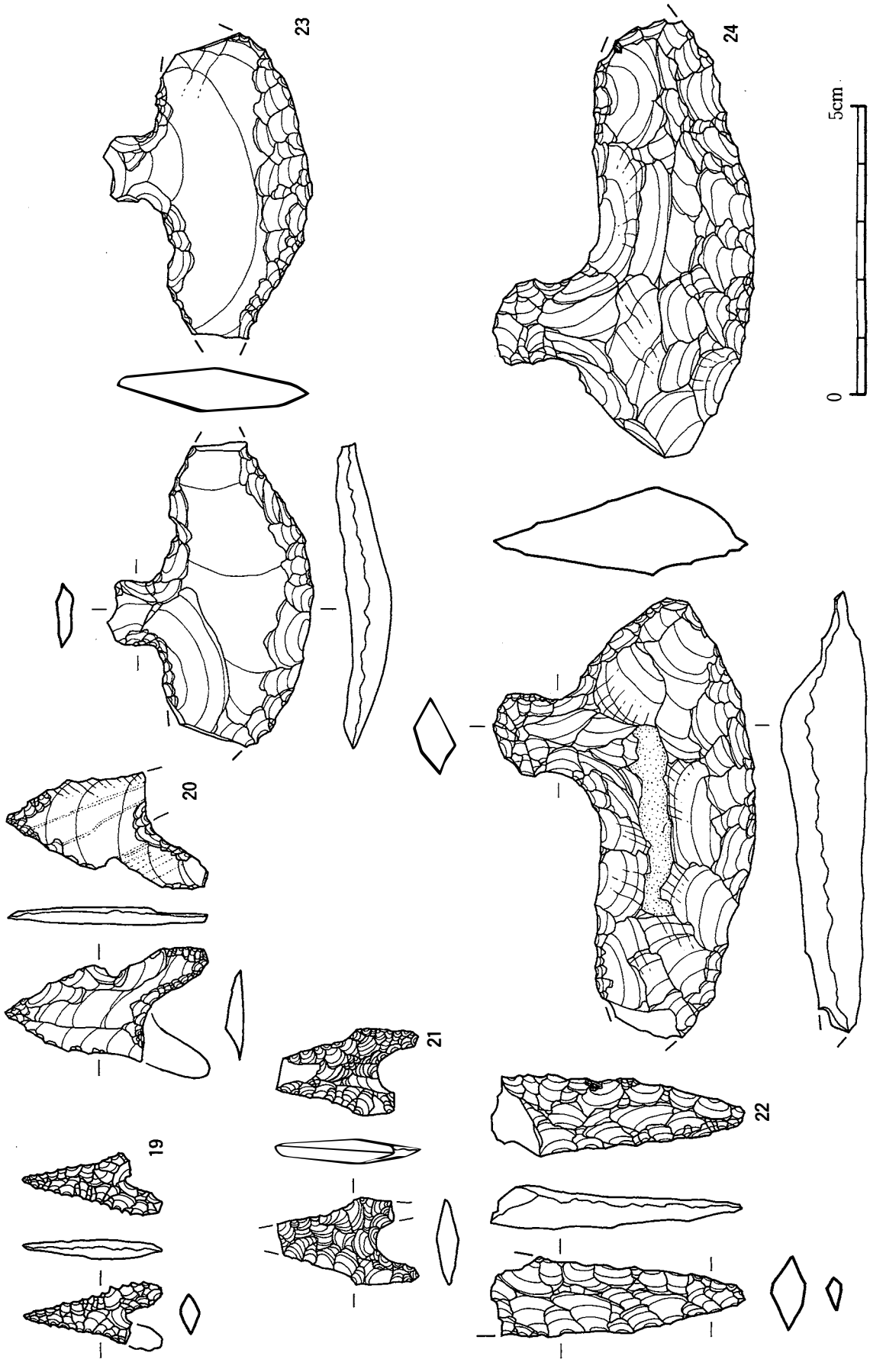
６、11、13、14は小型の石鏃である。10は素材剥片の剥離面が一部残っている。また、６、８は基部の一部、10は上半と基部の一部、12、13は先端部を欠損している。

ⅡＣ類（９、15～19）

二等辺三角形で、基部がU字状に抉られた凹基の石鏃である。６点出土している。16、19は内彎気味の縁辺をもち、細かい調整が入っている。17は素材剥片の剥離面を残す。なお、９は先端部、15、17、19は脚の一部、18は左半部を欠損している。



第９図　出土縄文石器（１）



第10図　出土縄文石器（2）

ⅡＤ類（20）

二等辺三角形を呈し、基部が深く抉られて長脚になる石鏃である。20は剥片鏃で、左脚部を欠損している。

ⅢＣ類（21）

21は基部がＵ字状に抉られた凹基の石鏃である。上半部内彎気味の側縁が下半で角をなして屈曲する特異な形をしている。

石錐（22）

サヌカイト製である。上半部欠損のため、つまみ部の形状は不明であるが、錐部は細身の棒状で、縁辺に細かい調整が入っている。

石匙（23、24）

２点出土した。いずれもサヌカイト製の横型石匙である。23の調整は縁辺のみで、素材剥片の剥離面がかなり残っている。

削器（25～30）

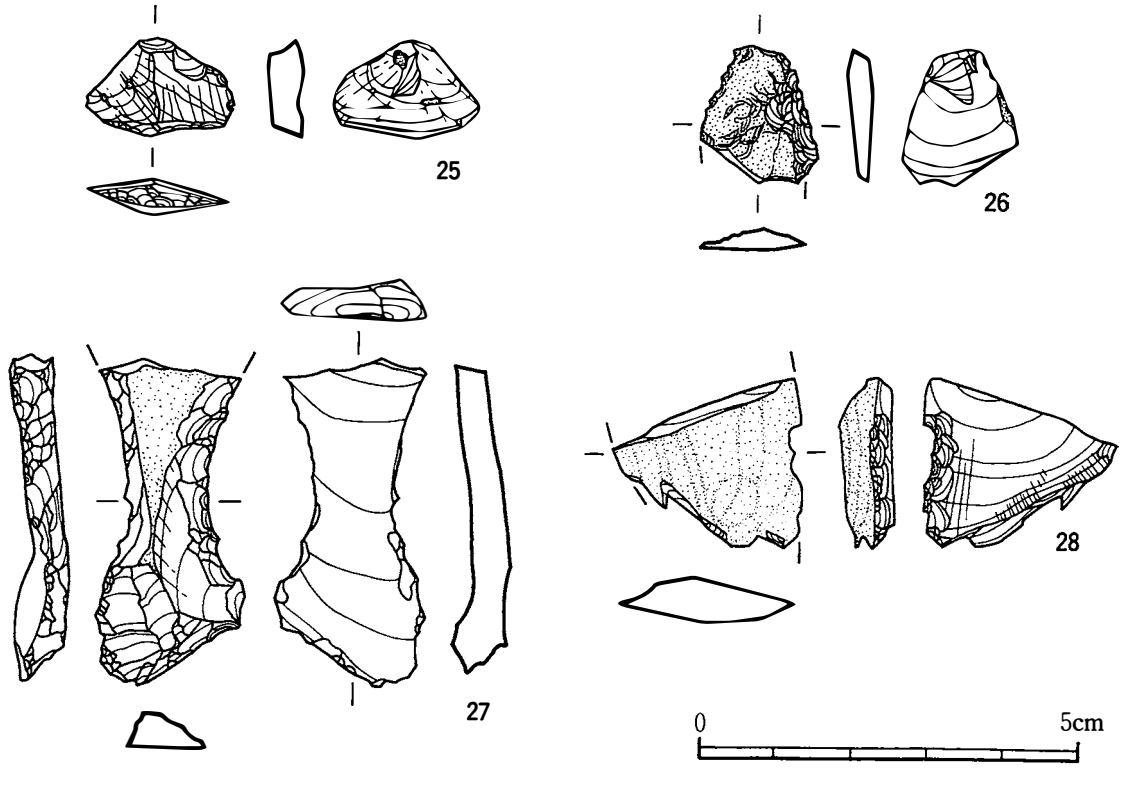
剥片の側縁部に連続的に調整を加えて作られた刃部を持つもので、6点を掲載した。大型のもの(29、30)と小型のもの(25～28)に分けられ、大型のものはいずれもサヌカイト製、小型のものはいずれも黒曜石製である。

打製石斧（31、32）

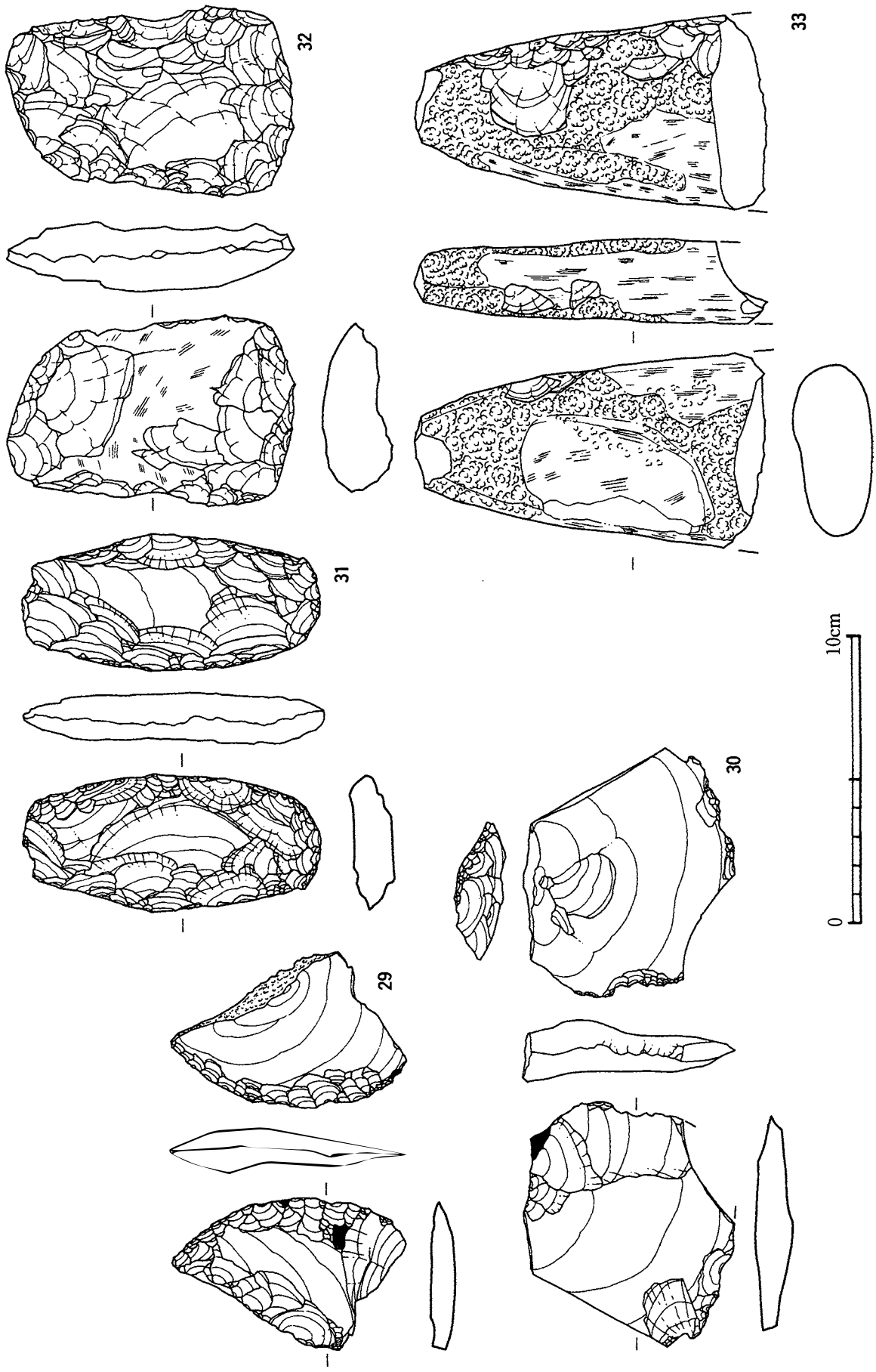
２点出土した。２点とも両側縁がほぼ平行な短冊形（長方形）で、石材は31が砂岩製、32は片岩製である。32は表面に礫面を残しているが、礫面には磨痕が残っており、磨石を石材として二次使用した可能性がある。

磨製石斧（33～35）

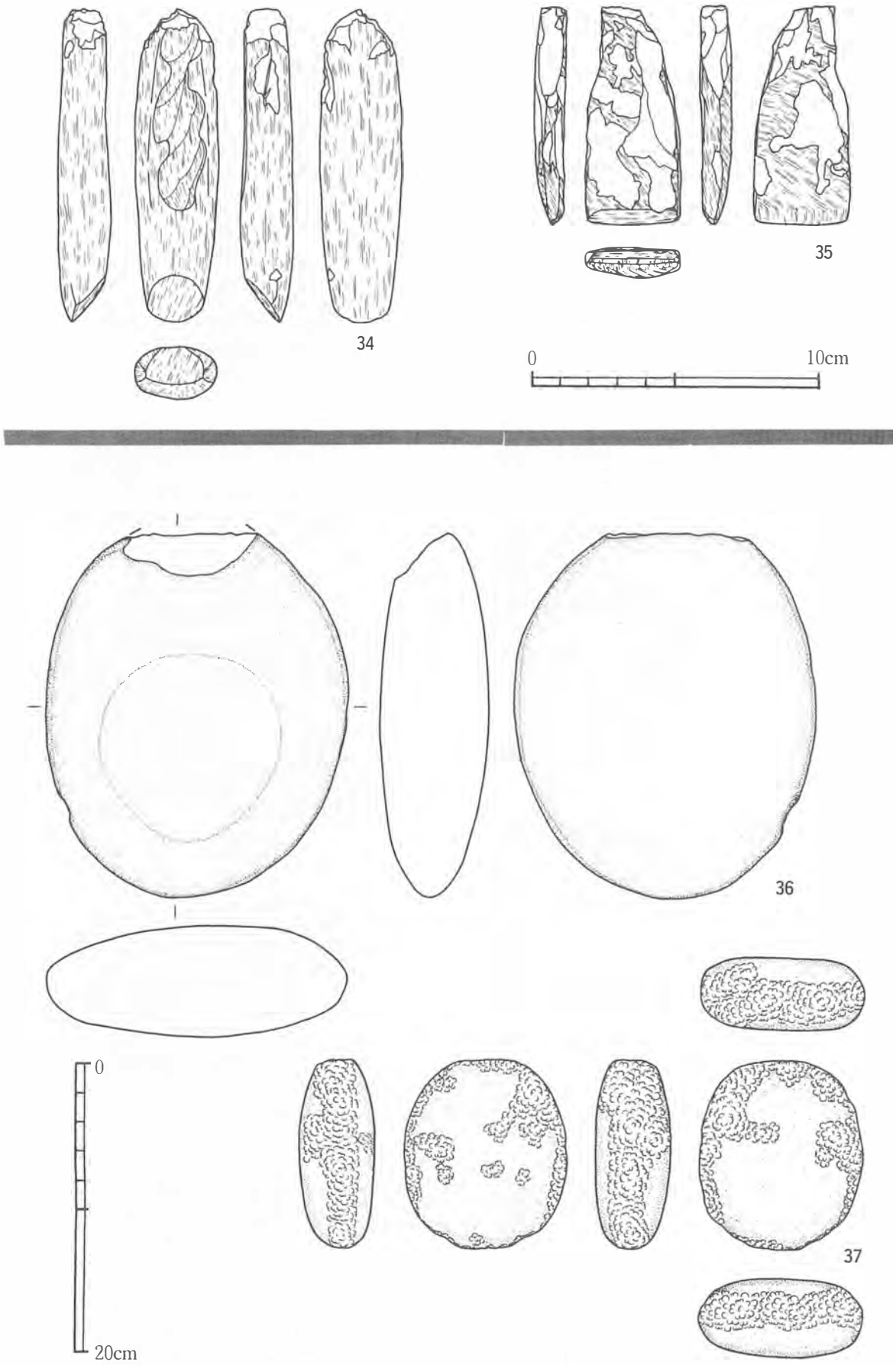
３点出土した。33は刃部を欠損している。上半部には調整の際の敲打痕が残る。34は小型の片刃石斧、35も小型の片刃石斧で、ともに蛇紋岩製である。



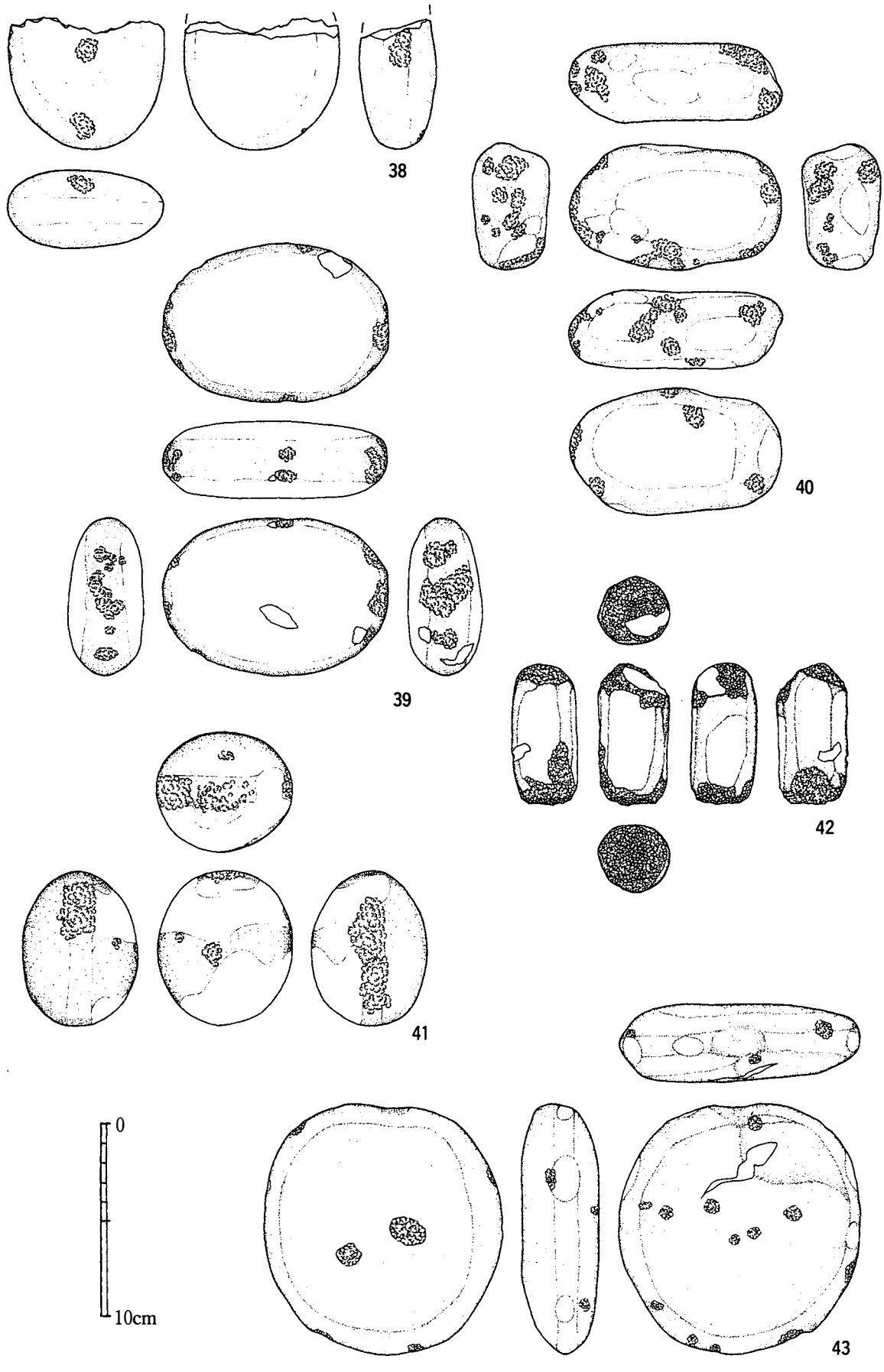
第11図　出土縄文石器（３）



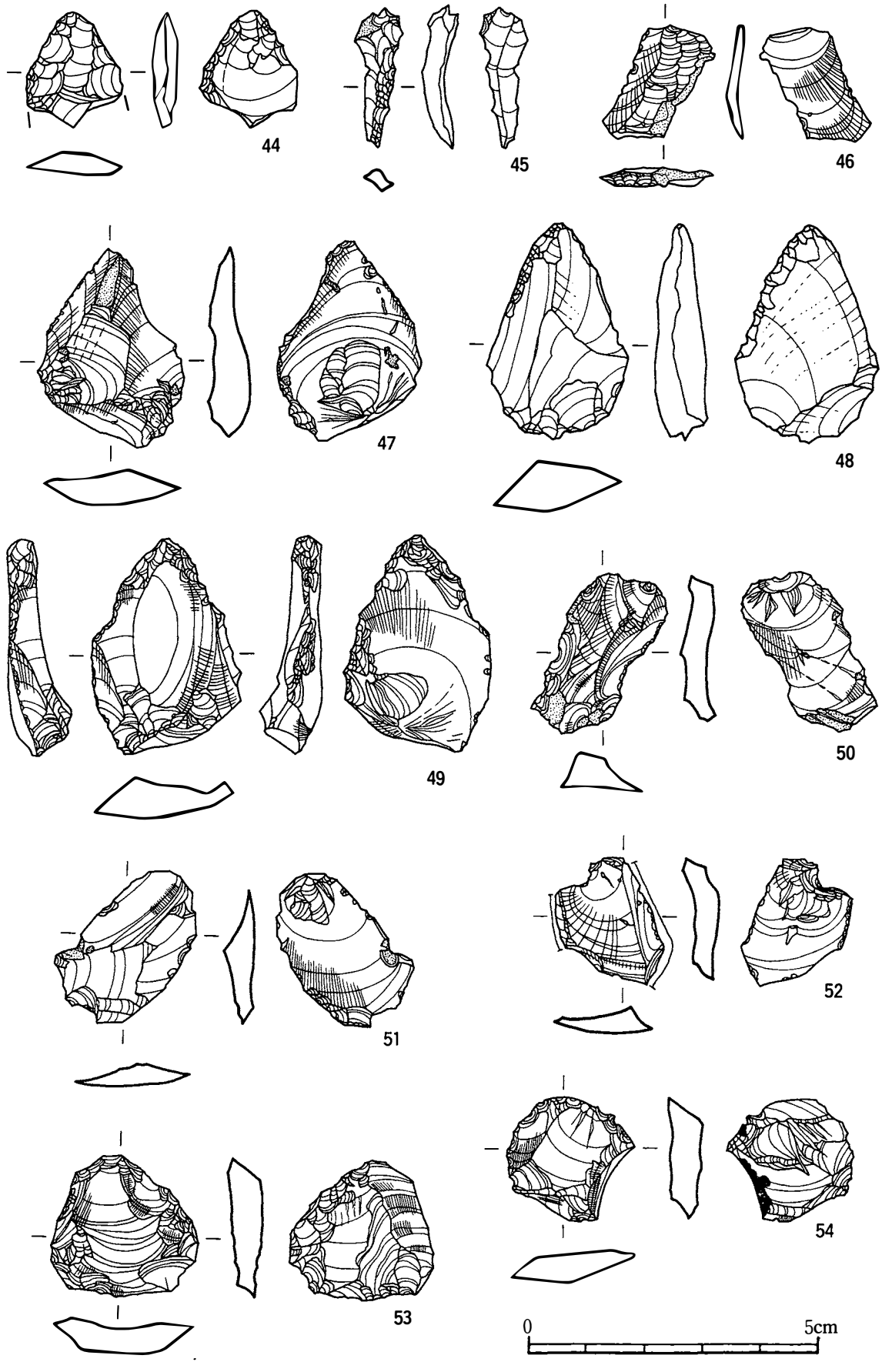
第12図　出土縄文石器（4）



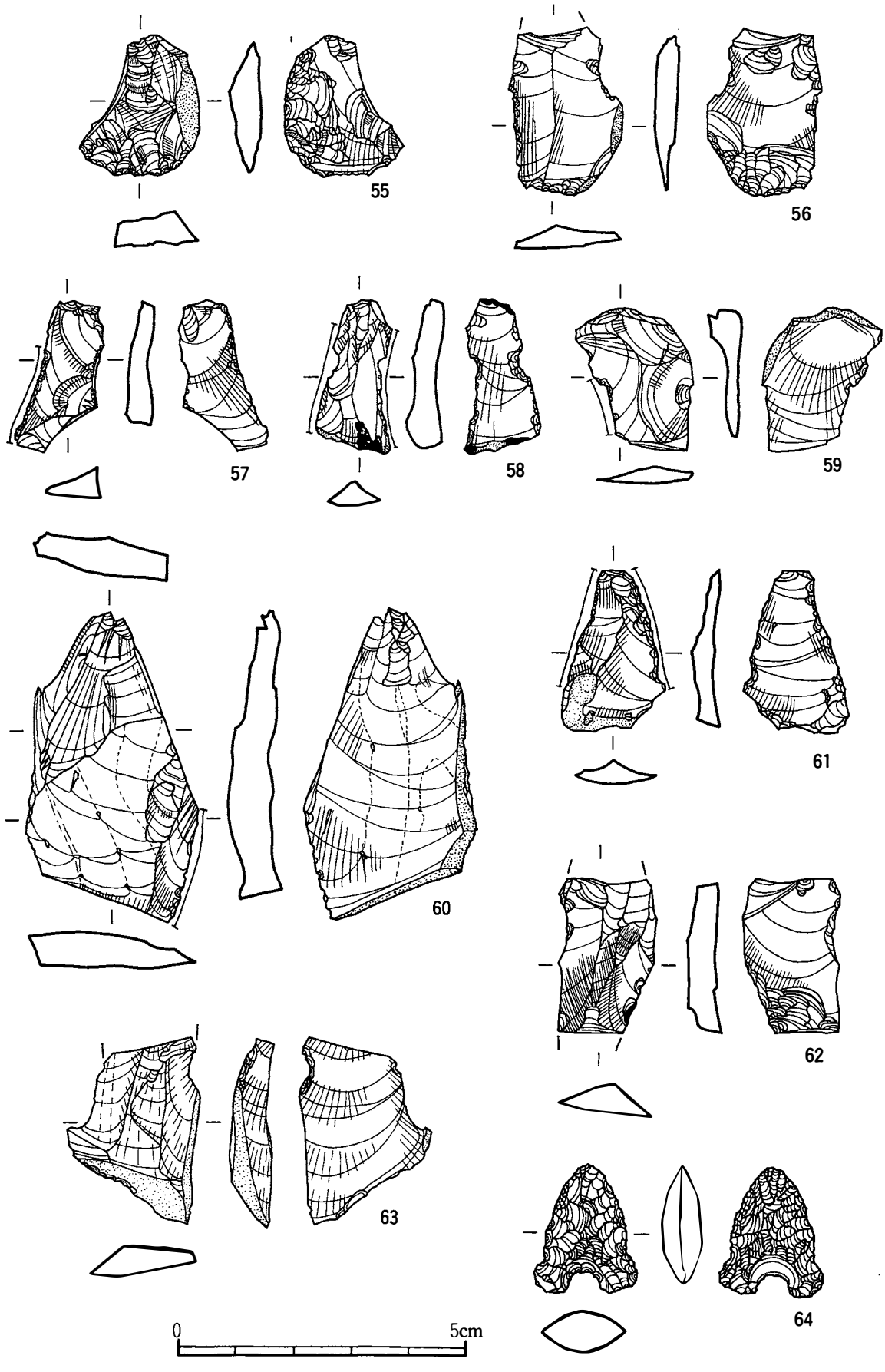
第13図　出土縄文石器（５）



第14図　出土縄文石器（6）



第15図　出土縄文石器（７）



第16図　出土縄文石器（8）

第５表　出土石器観察表

遺物番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	調査年度	取上番号	備考
1	石鏃	黒曜石	1.4	1.8	0.4	1.0	H4	B－2	上半部欠損
2	石鏃	安山岩	2.2	2.0	0.5	1.4	H4	E－5	
3	石鏃	安山岩	2.5	1.9	0.5	1.6	H6	E－7	未完成品
4	石鏃	黒曜石	2.2	1.5	0.5	1.2	H4	B・C・D－2	基部の一部欠損
5	石鏃	安山岩	2.2	1.5	0.5	0.9	H6	D－5	基部の一部欠損
6	石鏃	安山岩	1.9	1.3	0.6	1.1	H4	表土剥ぎ	
7	石鏃	安山岩	3.0	1.6	0.3	1.7	H4	清掃中	
8	石鏃	チャート	3.0	1.8	0.4	1.3	H4	230	基部の一部欠損
9	石鏃	黒曜石	2.0	1.4	0.6	0.9	H6	C－4	
10	石鏃	黒曜石	1.6	1.6	0.3	0.4	H6		上半と基部の一部欠損
11	石鏃	黒曜石	2.1	1.7	0.4	0.7	H4	B－2　5溝20	
12	石鏃	安山岩	2.2	2.0	0.5	1.5	H4	E－2	先端部欠損
13	石鏃	黒曜石	1.5	1.1	0.4	0.4	H4	C－2	先端部欠損
14	石鏃	黒曜石	1.4	1.2	0.3	0.2	H4	B－2	
15	石鏃	黒曜石	1.8	1.5	0.5	0.8	H4	A－1	右脚欠損
16	石鏃	黒曜石	2.2	1.8	0.4	1.0	H4	清掃中	
17	石鏃	安山岩	1.8	1.3	0.3	0.5	H4	清掃中	左脚欠損
18	石鏃	黒曜石	1.9	1.2	0.5	0.6	H4	A－2	右半部欠損
19	石鏃	黒曜石	2.4	1.1	0.4	0.4	H4	A－2　4溝P－1	左脚欠損
20	石鏃	黒曜石	3.5	2.0	0.3	1.2	H4	B－2	剥片鏃、左脚欠損
21	石鏃	黒曜石	2.5	1.5	0.4	0.9	H4	Ⅱ層	先端と脚の一部欠損
22	石錐	サヌカイト	4.4	1.4	0.7	3.2	H4	185	上半部欠損
23	石匙	安山岩	3.6	5.2	0.7	10.8	H6	B－5　82	両端部欠損
24	石匙	安山岩	4.5	7.5	1.5	34.8	H6	C－4　18	左端部欠損
25	削器	黒曜石	1.3	1.9	0.5	0.8	H6	1周溝墓周溝	
26	削器	黒曜石	1.8	1.5	0.3	0.8	H4	D－2　4溝	
27	削器	黒曜石	4.3	1.9	0.5	4.5	H6	D－5　1周溝墓周溝	
28	削器	黒曜石	2.2	2.5	0.7	2.8	H6	D－5　1周溝墓周溝	上半部欠損
29	削器	サヌカイト	8.2	5.3	1.5	46.2	H6	B－5　157	
30	削器	サヌカイト	7.5	8.6	1.8	91.0	H6	B－5　244	
31	打製石斧	砂岩	10.5	4.7	1.7	103.9	H6	D－7　12溝	
32	打製石斧	片岩	10.1	6.5	2.4	180.4	H4	1溝	
33	局部磨製石斧	砂岩	12.5	6.7	2.8	328.0	H6	C－5　56	先端部欠損
34	磨製石斧	蛇紋岩	10.8	2.9	1.8	85.5	H6	C－5　1周溝墓周溝	
35	磨製石斧	蛇紋岩	7.4	3.3	1.1	37.4	H6	D－7	
36	台石	凝灰岩	24.9	21.0	7.6	5150.0	H6	B－5　162	
37	磨石・敲石	凝灰岩	13.0	11.3	5.2	925.0	H6	B－5　109	風化激しい
38	磨石・敲石	凝灰岩	6.8	8.1	4.0	320.1	H6	B－5　181	一部欠損
39	磨石・敲石	凝灰岩	11.7	8.1	3.9	565.0	H6	1大土坑37	
40	磨石・敲石	凝灰岩	11.0	6.5	4.0	460.3	H6	B－5　216	
41	磨石・敲石	凝灰岩	7.9	7.0	6.1	449.0	H6	A－3　1	
42	磨石・敲石	砂岩	7.2	3.7	3.5	142.2	H6	F－6P－2	
43	磨石・敲石	凝灰岩	12.9	12.5	4.0	1390.0	H4	82	
44	二次加工	チャート	1.9	1.7	0.4	1.2	H4	C－4・5　7溝	一部欠損
45	二次加工	黒曜石	2.3	0.8	0.4	0.5	H4	A－2	
46	二次加工	黒曜石	1.9	1.9	0.3	0.7	H4	E－6	左縁辺に使用痕
47	二次加工	黒曜石	3.4	2.5	0.7	4.7	H4	F－3　9土坑	左縁辺に使用痕
48	二次加工	黒曜石	3.8	2.5	0.9	5.6	H6	B－5　33	
49	二次加工	黒曜石	3.7	2.6	1.1	6.7	H4	B－2	
50	二次加工	黒曜石	2.7	2.3	0.9	3.2	H4	A－1	右縁辺に使用痕
51	二次加工	黒曜石	2.6	2.4	0.5	2.5	H4	E－2	縁辺に使用痕
52	二次加工	黒曜石	2.2	1.9	0.6	1.6	H4	B－2　4溝	縁辺に使用痕
53	楔形石器	黒曜石	2.4	2.5	0.6	3.6	H4	E－1　6溝	
54	楔形石器	黒曜石	2.1	2.2	0.6	2.5	H4	D－1　4溝	
55	楔形石器	黒曜石	2.4	2.0	0.6	2.3	H4	清掃中	
56	楔形石器	黒曜石	2.9	2.0	0.5	2.1	H4	Ⅱ層	
57	使用痕	黒曜石	2.5	1.5	0.6	1.4	H4	F－4　1住	左縁辺に使用痕
58	使用痕	黒曜石	2.6	1.3	0.6	1.5	H4	136	両縁辺に使用痕
59	使用痕	黒曜石	2.4	2.0	0.6	1.8	H4	F－4　40	左縁辺に使用痕
60	使用痕	黒曜石	5.3	3.0	1.1	12.4	H4	124	両縁辺に使用痕
61	使用痕	黒曜石	2.7	1.8	0.5	1.6	H4	D－2	両縁辺に使用痕
62	使用痕	黒曜石	3.2	2.3	0.7	3.3	H6	C－4　39	抉入あり
63	使用痕	黒曜石	2.6	1.7	0.6	2.6	H4	D－3	両縁辺に使用痕
64	異形石器	チャート	2.2	1.8	0.7	2.3	H4	清掃中	

台石（36）

36は凝灰岩の扁楕円形の大型礫の表面に磨痕を持つ。台石あるいは石皿として使われたものと思われる。

磨石・敲石（37～43）

７点を掲載した。石材は凝灰岩が多く、砂岩がこれに次ぐ。形態は扁平な円盤状のもの（37～39、43）、卵状のもの（41）、棒状のもの（40、42）に分けられる。また、38は一部を欠損している。

二次加工のある不定形石器（44～52）

ここでは９点を掲載している。石材は、44がチャートで、残りは黒曜石である。

44は一部を折損しているが、調整の特徴から石鏃の一部の可能性がある。また、45は棒状剥片の両側縁に調整を加えており、石錐の可能性がある。47は表面に礫面を残す。

楔形石器（53～56）

向かい合った２辺の縁辺部に階段状の剥離痕が対になる石器で、４点を掲載した。すべて黒曜石製である。

53は上下両端と両側縁に対向する剥離痕がある。54は両側縁に対向する剥離痕があり、右側縁には折れ面がある。55は上下両端と両側縁に対向する剥離痕があり、左側縁には折れ面がある。56は上下両端に対向する剥離痕がある。

使用痕のある剥片（57～63）

縁辺に刃こぼれ状の使用痕が残る剥片で、７点を掲載している。両側縁がほぼ平行している刃器状剥片を使用しているもの（57、58、62）と、それ以外の不定形剥片を使用しているものの２つに分けることができる。

その他の石器（64）

64は俗に「トロトロ石器」と称される異形石鏃である。チャート製で、先端部は丸く、脚部に角状の突起を持つ。

第４節　弥生時代の遺物

１　土器（第17図）

調査区から出土した弥生土器のほとんどは、形態の特徴から、中期から後期にあたるものと思われる。ここでは、主要な遺物11点を掲載した。詳しい内容については、以下のとおりである。

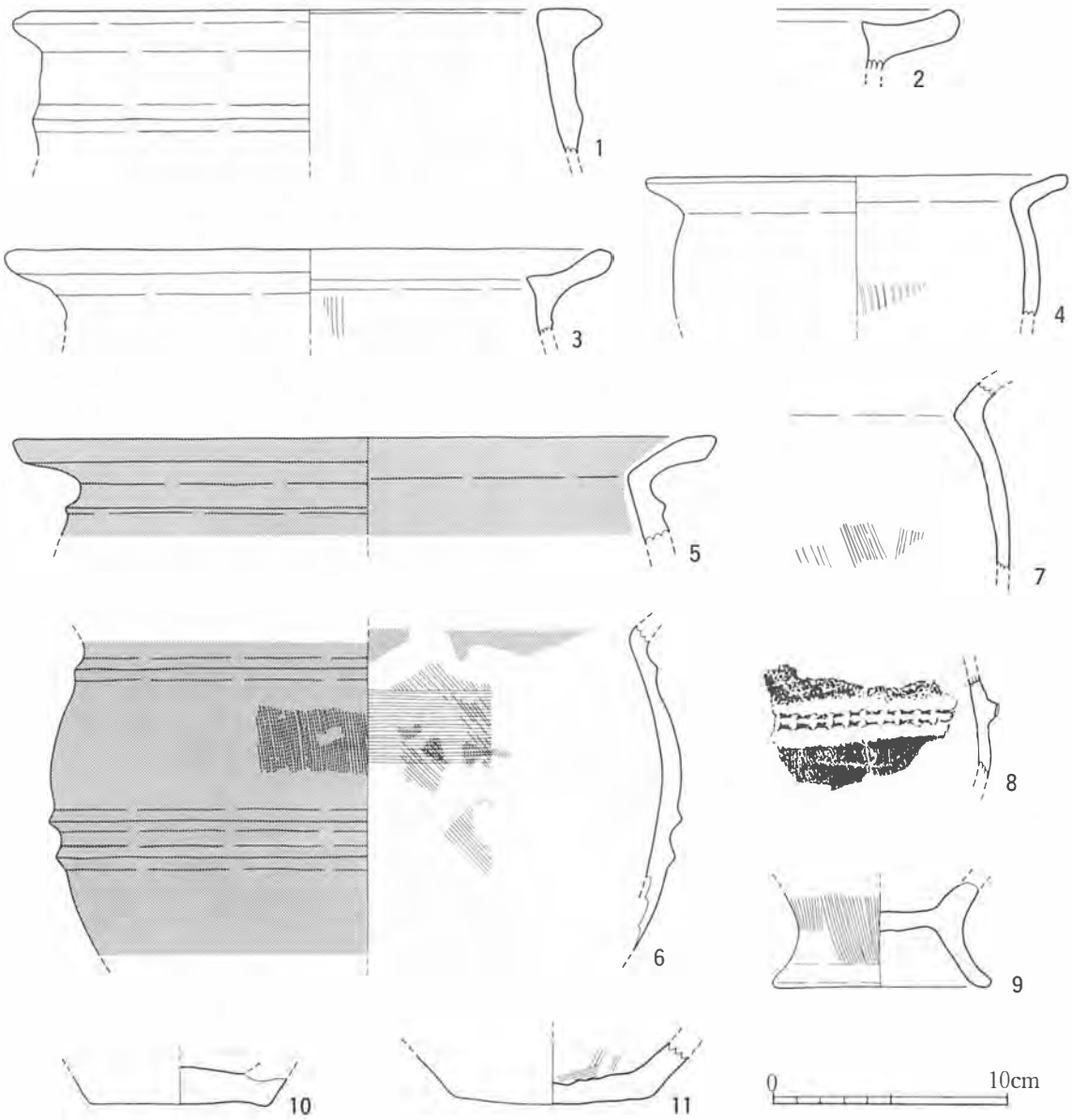
なお、それぞれの遺物の計測値については、「出土弥生土器観察表」（第６表）にまとめている。

１～４は甕の口縁部片である。１は口縁部外側に断面が分厚い三角形の突帯を張り付け、胴部上半に１条の突帯を持つ。２、３は口縁外側がU字型に長く伸び、上面にくぼみを持つ。また口縁内側には張り出しを持つ。４は口縁部がくの字形に屈曲し、口縁外側は薄く、ほぼ均一の厚さになっている。５は甕または鉢の口縁部である。くの字形に屈曲し、口縁下に１条の断面三角の突帯を持つ。また、赤色顔料が全面に塗られている。６も朱塗の甕または鉢の胴部片である。上半に最大径があり、口縁下に１条、胴部に２条の断面三角の突帯を持つ。５と６は接合しなかったが、形態や出土地点などから同一個体である可能性が強い。７はくの字口縁を持つ甕の胴部片である。８は甕または壺の胴部片で、断面コの字形の刻目突帯を１条持つ。

９は甕の底部である。底面と脚部の器壁が薄く、脚台状になっている。10、11は壺の底部で、10は厚めの平底、11は薄いレンズ状の底になっている。

第６表　出土弥生土器観察表

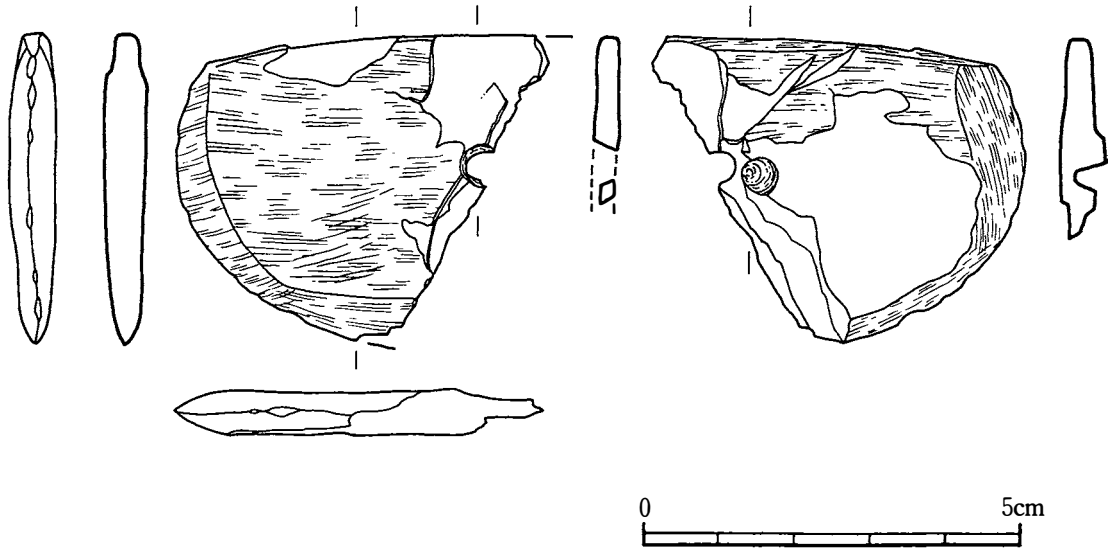
遺物番号	器種	口底径(cm)	現存高(cm)	調整 (内面)	調整 (外面)	色調 (内面)	色調 (外面)	胎土	焼成	調査年度	取上番号	備考
1	甕口縁	23.8	6.0	ナデ	ナデ、突帯１条	明黄褐(10YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	やや良	H6	C－4　24	
2	甕口縁		2.4	ナデ	ナデ	にぶ黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H4		
3	甕口縁	26.0	3.6	ハケ目	ナデ	にぶ黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H4	D－1　4溝	
4	甕口縁	17.8	5.9	ハケ目	ナデ	にぶ黄橙(10YR6/4)	にぶ黄橙(10YR6/3)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	B－5	外面煤付着
5	甕口縁	30.0	4.5	ナデ	ナデ、突帯１条	赤褐(2.5YR4/6)	暗赤褐(5YR3/2)	砂粒少量、長石を含む	良好	H6	B－5　272	朱塗
6	甕胴部			ハケ目	ヘラミガキ、一部ハケ目、突帯	明黄褐(10YR7/6)	赤褐(2.5YR4/6)	砂粒少量、長石、石英を含む	良好	H6	B－5　28,173－175	朱塗
7	甕胴部			ナデ、ハケ目	ナデ	橙(7.5YR6/6)	灰黄褐(10YR4/2)	粗砂粒多量、長石、石英を含む	やや良	H6	B－5　229	
8	甕胴部			ナデ	ナデ、一部ハケ目、刻目突帯	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	粗砂粒多量、長石、石英を含む	良好	H6	B－5　274	
9	甕底部	8.9	4.6	ナデ	ハケ目	にぶ橙(7.5YR6/4)	にぶ橙(7.5YR7/4)	小石、砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H4		
10	壺底部	7.6	1.1	ナデ	ナデ	にぶ黄橙(10YR7/3)	にぶ橙(7.5YR7/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H4		
11	壺底部			ナデ、一部ハケ目	ナデ	灰黄褐(10YR5/2)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒多量、角閃石、長石を含む	良好	H4	D－1　4溝	



第17図　出土弥生土器

2　石器（第18図）

調査区から出土した石器のうち、明らかに弥生時代のものと思われるのは、粘板岩製の石包丁１点である。平成６、７年度調査区Ｂ－５グリッドより出土した。左端部の破片で、残存部の長さ4.9cm、幅4.0cm、厚さ0.6cm、重さ13.8gを測る。背部はほぼ直線であり、刃部の形状は不明であるが、端部で彎曲して背部に至る。穿孔は、中央部やや上寄りで、両側から開けられているが、裏面の穿孔横に別の穿孔が途中まで開けられている。



第18図　出土石包丁

第５節　古墳時代の遺構と遺物

1　竪穴住居跡

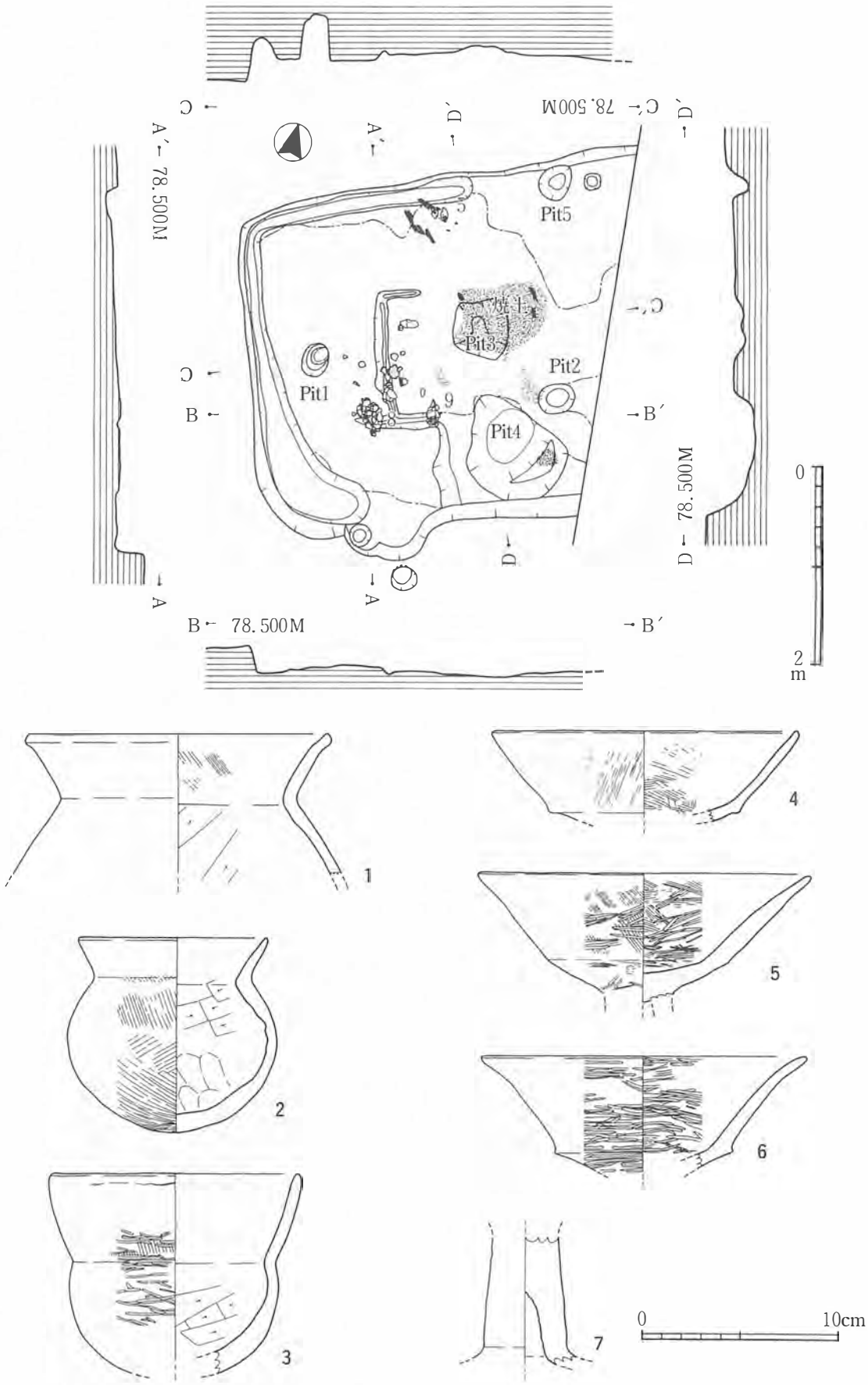
平成４年度調査において、竪穴住居跡が１基確認された。埋土中より土師器が出土したことから、古墳時代の住居跡と考えられる。住居跡の詳しい内容については、以下のとおりである。

なお、出土した土師器は主要なものを図化して掲載し、個別の計測値および観察結果については「遺構出土土器観察表」(第７表）にまとめた。

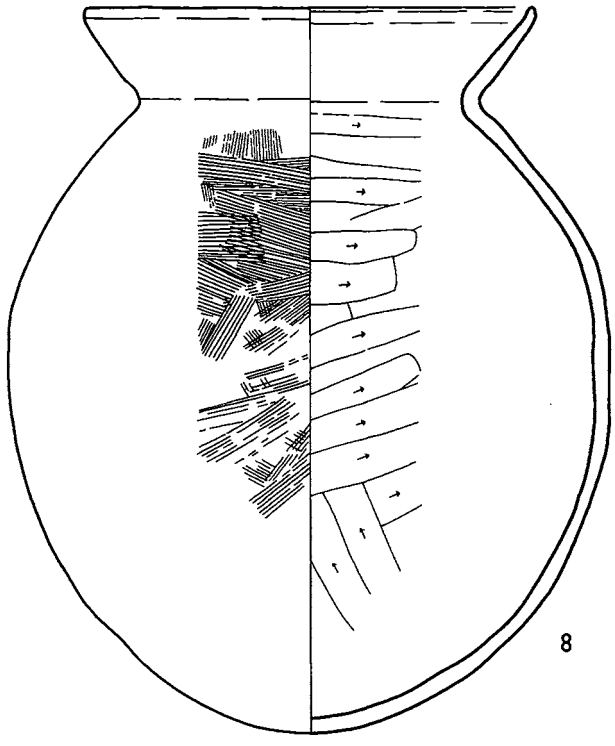
１号住居跡（第19図）

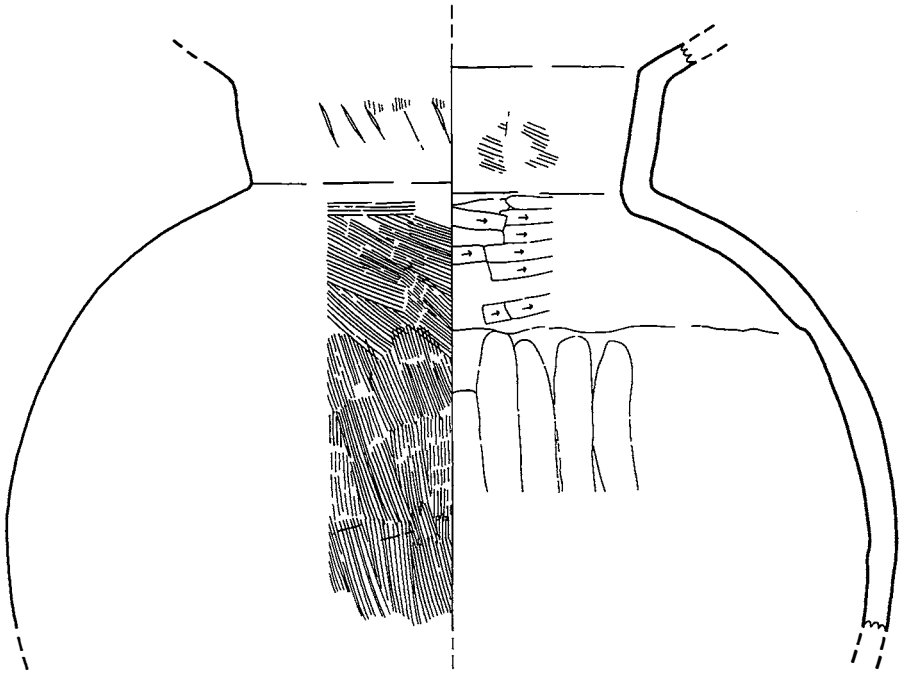
平成４年度調査区の東部、Ｆ－４グリッドで確認された。東側部分は調査区外になり、正確な規模は不明であるが、長辺６m、短辺４mの方形になると思われる。Pit１に柱の痕跡があり、長軸方向に並ぶ２本柱であると思われる。また、中央部のPit３からは焼土が検出されており、炉の跡ではないかと思われる。中央部西寄りには約１m×0.8mの溝があり、室内を区切る形になっている。

出土したのはすべて土師器で、このうち、実測可能な９点を掲載した（第19、20図)。１は壺または甕の口縁部と考えられる破片である。頸部で屈曲して外傾し、口唇近くでわずかに外反する。２と３は小型丸底



第19図　１号住居跡実測図および出土土師器（１）





0　10cm

第20図　1号住居跡出土土師器（2）

の鉢である。２は短く外傾する頸部、３は長く内彎する頸部を持つ。４～６は高坏の坏部の破片で、坏部中位の接合面で屈曲し、外反気味に立ち上がる。このうち４と６は外面に段を持つ。７は脚柱部の破片である。８は丸底の甕である。口唇がわずかに内彎し、外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整で、最大径を胴部中位に持つ。９は壺の上半部である。口縁は欠損して不明であるが、複合口縁になるものと思われる。

２　墳墓

今回の調査において、木棺墓１基、石棺墓１基、円形周溝墓２基が確認された。いずれも古墳時代のものであると考えられる。それぞれの遺構の詳しい内容については、以下のとおりである。

なお、遺構より出土した土師器は主要なものを図化して掲載し、個別の計測値および観察結果については「遺構出土土器観察表」(第７表）にまとめた。

１号木棺墓（第21図）

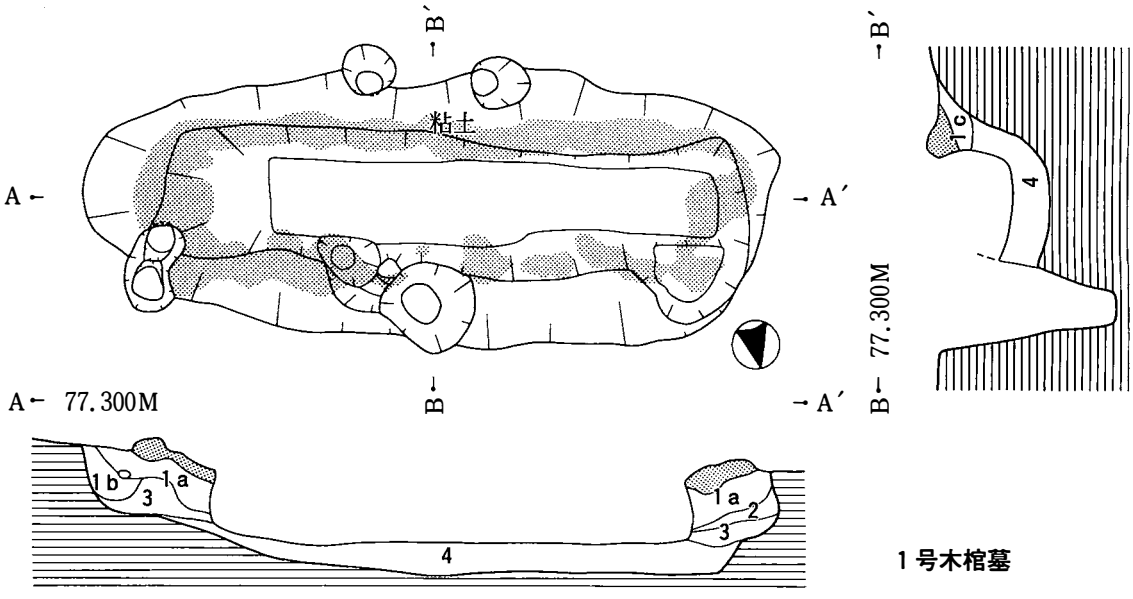
平成４年度調査区Ｅ－３グリッドで確認された。棺材は残っていなかったが、形態から木棺であったと思われる。長軸2.75m、短軸1.0m、深さ0.5mの墓壙の中に、長軸2.35m、短軸0.5m、深さ0.35mの周囲を粘土で覆った主体部がある。長軸の方位はN－75°－Eである。周溝等は確認されなかった。主体内部の埋土は粘土粒とカーボン粒を含む暗褐色土で、遺物は出土しなかった。また、主体部の周囲の土は、粘土の他に粘土粒が混入した暗褐色土である１ａ層、１ａ層より粒土粒が微量な１ｂ層、粘土粒と地山の黄褐色土粒を含む１ｃ層、粘土粒を含まない暗褐色土の２層、明褐色土である３層、やや明るい暗褐色土の４層に分層できる。

第７表　遺構出土土師器観察表

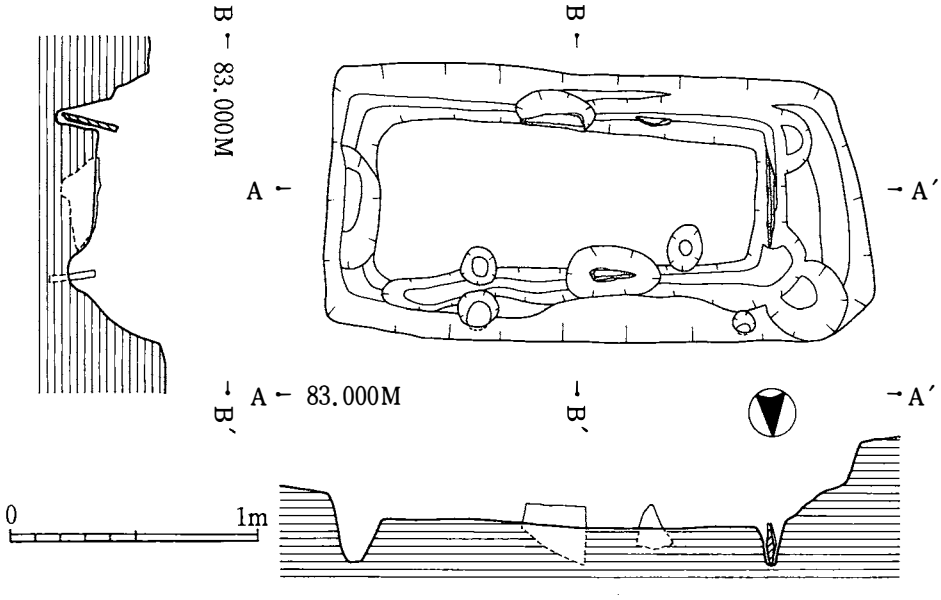
遺構	遺物番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	現存高(cm)	調整 (内面)	調整 (外面)	色調 (内面)	色調 (外面)	胎土	焼成	調査年度	取上番号	備考
１号住	1	甕か壺	15.6		7.1	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	にぶ黄橙(10YR7/3)	浅黄橙(10YR8/3)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H4	１住17	外面煤付着
１号住	2	鉢	9.6		9.8	ナデ、ヘラケズリ、指頭痕	ナデ、ハケ目	にぶ橙(7.5YR6/4)	にぶ橙(7.5YR6/4)	砂粒多量、石英、長石、雲母を含む	良好	H4	１住13，18他	
１号住	3	鉢	12.8		10.1	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ヘラミガキ、ハケ目	にぶ橙(7.5YR7/4)	にぶ橙(7.5YR6/4)	小石、砂粒多量、角閃石、長石を含む	良好	H4	１住２他	
１号住	4	高坏	15.6		4.5	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目	にぶ黄橙(10YR7/3)	淡橙(5YR8/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	不良	H4	１住８他	
１号住	5	高坏	17.0		6.5	ナデ、ヘラミガキ、ハケ目	ナデ、ヘラミガキ、ハケ目	にぶ黄橙(10YR7/4)	浅黄橙(10YR8/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	H4	１住20，37，38	
１号住	6	高坏	16.5		5.8	ナデ、ヘラミガキ、ハケ目	ナデ、ヘラミガキ	にぶ黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H4	１住２、21T	
１号住	7	高坏				ナデ	ナデ	にぶ黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H4	１住４	
１号住	8	甕か壺	18.0		28.6	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	浅黄橙(10YR8/3)	にぶ橙(7.5YR7/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	H4	１住34	両面煤付着
１号住	9	壺			22.7	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ、指頭痕	ナデ、ハケ目	にぶ黄橙(10YR7/3)	明褐(7.5YR5/6)	砂粒少量、角閃石、長石、雲母を含む	良好	H4	１住31、21T	
１号墳	10	壺	18.6		9.9	ナデ、ハケ目	ナデ	にぶ黄橙(10YR7/4)	橙(5YR6/6)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	D－５　178，141	
１号墳	11	壺か高坏	16.2		4.7	ナデ	ナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	砂粒多量、石英、長石を含む	良好	H6	D－５　1周	
１号	12	小型壺	6.3		7.8	ナデ、指頭痕	ナデ、ハケ目	橙(5YR8/6)	橙(5YR8/6)	砂粒多量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	H6	D－５　2	
１号墳	13	小型壺	6.1		8.3	ナデ、指頭痕	ナデ、ハケ目	橙(5YR8/6)	橙(5YR8/6)	砂粒多量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	H6	D－５　35，139	外面一部に赤色顔料痕
１号墳	14	碗	20.4		4.0	ナデ	ナデ	橙(5YR8/6)	橙(5YR8/6)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	１周溝墓周溝	
１号墳	15	碗	12.0		4.0	ナデ	ナデ、ヘラケズリ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	粗砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	D－５　26	
１号墳	16	碗	13.6		5.1	ナデ	ナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	D－５　142	両面一部に赤色顔料痕
１号墳	17	高坏	18		5.1	ナデ	ナデ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	粗砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	D－５　151	
１号墳	18	高坏	19.4		4.5	ナデ	ナデ	橙(7.5YR8/6)	明褐(7.5YR5/6)	粗砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	D－５　19，28，149	
１号墳	19	高坏	19.2	15.0	15.7	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	橙(7.5YR6/6)	橙(5YR6/6)	小石、粗砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	D－５　182	
１号墳	20	高坏				ナデ	ナデ	橙(7.5YR6/6)	にぶ褐(7.5YR5/4)	小石、粗砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	D－５　15	
１号墳	21	高坏		15.0	4.5	ナデ	ナデ	橙(7.5YR6/6)	明褐(7.5YR5/6)	小石、砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	D－５　48	
大型土坑	22	甕	12.6		27.5	ナデ、ヘラケズリ、指頭痕	ナデ	灰白(10YR8/2)	浅黄橙(10YR8/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	１号大土坑７他	

１号石棺墓（第21図）

平成６、７年度調査区Ｂ－５グリッドで確認された。板状の安山岩の組み合わせ石棺であったと思われるが、かなり破壊されており、墓壙内には棺材が原型を留めずに廃棄されていた。墓壙は長軸2.15m、短軸1.05m、深さ0.35mで、長軸の方位はＮ－87°－Ｅで、ほぼ東西方向である。墓壙内からは人骨、副葬品等は発見されず、壁際に石材の差込痕が残っており、棺材の一部が残っていた。差込痕の内部は、長軸1.5m、短軸0.75mを測る。棺材の一部にはベンガラと思われる赤色顔料が塗られていた。周溝等は確認されなかった。



１号木棺墓



１号石棺墓

第21図　１号木棺墓および１号石棺墓実測図

１号円形周溝墓（第22図）

平成６、７年度調査区Ｃ・Ｄ－４・５グリッドで確認された。削平を受けて、上部および周溝のかなりの部分が消滅しているが、直径は約17m程度と推定される。陸橋部の方位はＮ－60°－Ｗである。

主体部は、長軸1.85m、短軸1.0mで、長軸の方位はＮ－54°－Ｗである。壁際には石材の差込痕が残り、板状の安山岩の組み合わせ石棺であったと思われるが、破壊が激しく、棺材の一部を残すのみである。屍床の土は、小石混じりの明茶褐色土（１層）とそれよりやや淡い明茶褐色土（２層）に分層でき、２層から土師器片が出土している。

周溝からは、多数の土師器が出土しているが、須恵器は出土しなかった（第23図）。10は壺の口縁部である。長めの頸部を持ち、口縁は内彎気味になる。また、頸部の屈曲部直下に突帯を持つ。11も壺の口縁部で、頸部途中で段をなして屈曲し、口縁は外反する。12、13は小型の丸底壺で、ともに長い頸部を持つが、口縁は、12が直口であるのに対して、13は内彎気味になる。14～16は坏または高坏の口縁部である。いずれも深めの体部を持ち、口唇が外反する。17～21は高坏である。17の坏部は浅めで、下位で段をなして外に開く。18の坏部も浅めで、下位で段をなすが、口唇が外反する。19は直口口縁でやや深めの坏部を持ち、ラッパ状に外反しながら開く脚部を持つ。20も深めの坏部になる。21は脚部でラッパ状に外反しながら開く。

なお、主体部と切り合う形で、長軸5.6m、短軸3.8mの土坑が確認された。埋土はローム粒を含む、ややしまりのある暗褐色土である。この土坑が、別の主体部あるいは石室など円形周溝墓に伴うものであるかどうかは不明であるため、仮に１号大型土坑とした（第24図）。削平により、主体部との新旧関係は不明であるが、大型土坑の底面近くより、土師器の甕（22）が出土したことから、主体部と大型土坑は、それほど時期差はないと考えられる。この甕は胴部中位に最大径を持つ、やや長胴気味の丸底で、外傾する長めの頸部を持つ。内面ヘラケズリ、外面ナデ調整である。

２号円形周溝墓（第25図）

平成６、７年度調査区Ｂ・Ｃ－１・２グリッドで確認された。削平によって、周溝のかなりの部分が消滅しているが、直径は13～14m程度と推定される。周溝からは土師器片が出土しているが、復元できるものはなかった。南西部にある周溝の空白部は陸橋と思われ、方位はＳ－25°－Ｗである。

主体部は、差込痕と棺材の一部を残すのみである。棺材は安山岩で、差込痕の内部は、長さ2.15m、幅0.85mを測り、長軸の方位はＮ－88°－Ｅで、ほぼ東西方向を向く。内部から遺物は出土しなかった。

３　土師器（第26～28図）

出土した古墳時代の土器は、土師器がほとんどを占める。須恵器は少なく、復原できたものはほとんどなかった。また、器形的には甕・壺、高坏が多く、他に小型壺、小型鉢などが出土した。ここでは、口縁部と底部を中心に器形の推定が可能なものを28点掲載した。これらの土器を器種別に見ていきたい。なお、個別の土器の計測値および観察結果については「出土土師器観察表」（第８表）にまとめている。

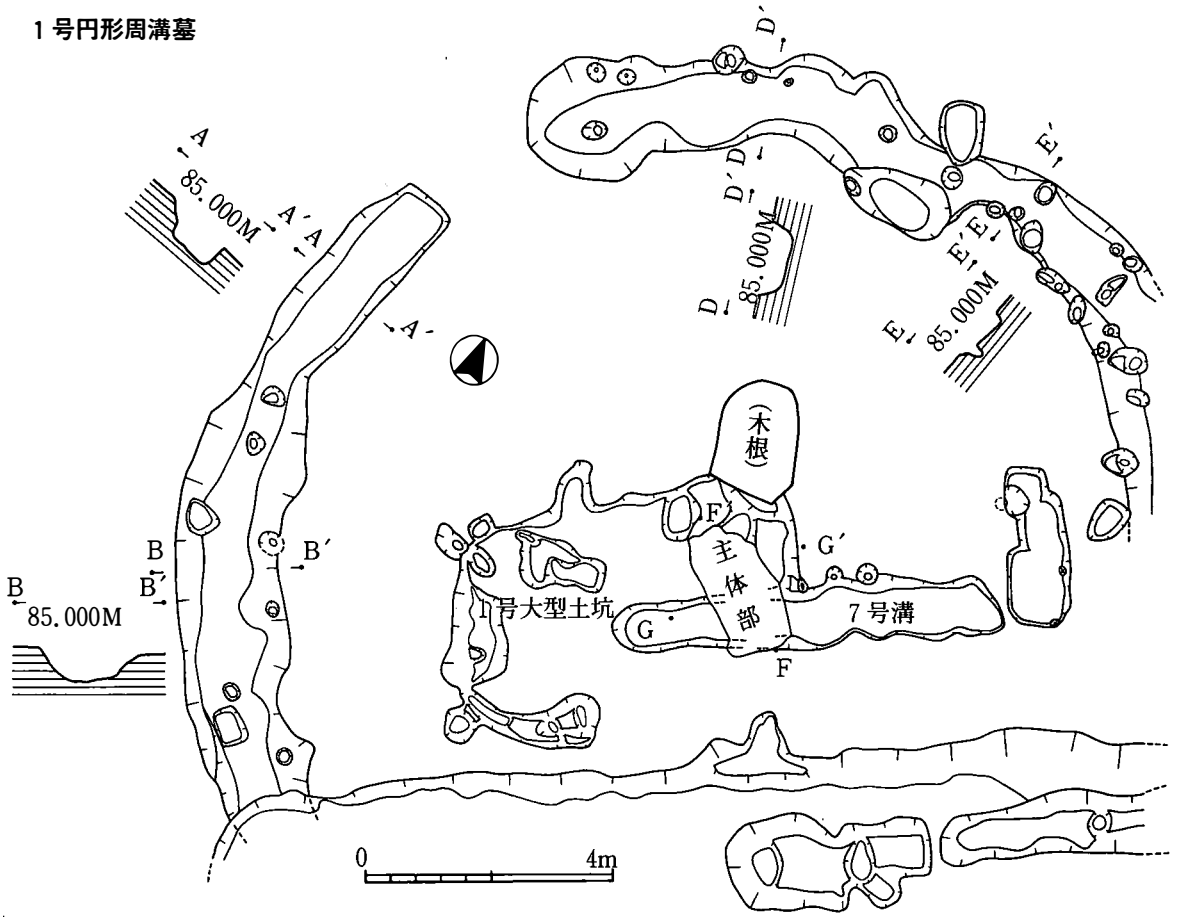
甕・壺（１～７、９～15）

甕・壺は14点掲載した。口縁部の破片のみで、全体の器形が不明なものが多いが、丸底のものがほとんどであると思われる。器面の調整は外面ハケ目、内面ヘラケズリのものが多い。口縁はまっすぐ外傾するもの（１～６）、外反するもの（７、９～12）、内彎するもの（13、14）、複合口縁のもの（15）に分けられる。

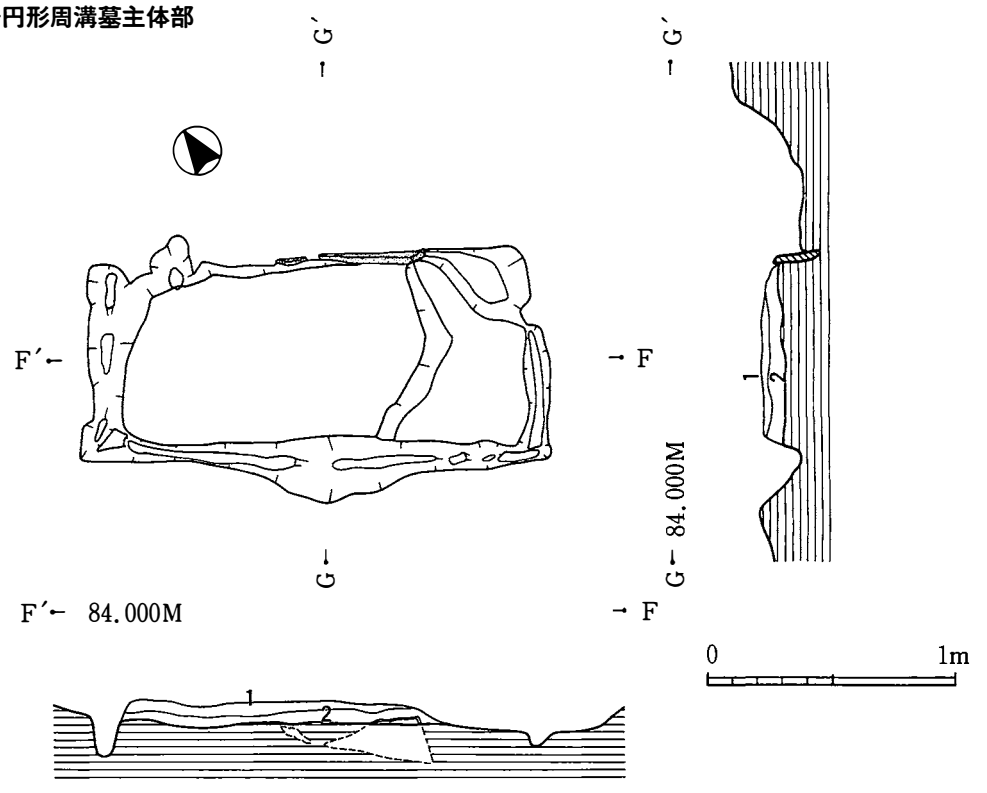
小型壺（８、16）

小型壺は２点掲載した。いずれも丸底になると思われる。８は内面ヘラケズリ、外面と口縁部内面はヘラミガキ調整で、最大径は胴部中位やや上にある。頸部はやや外傾して直口する。16は胴部の破片で、最大径

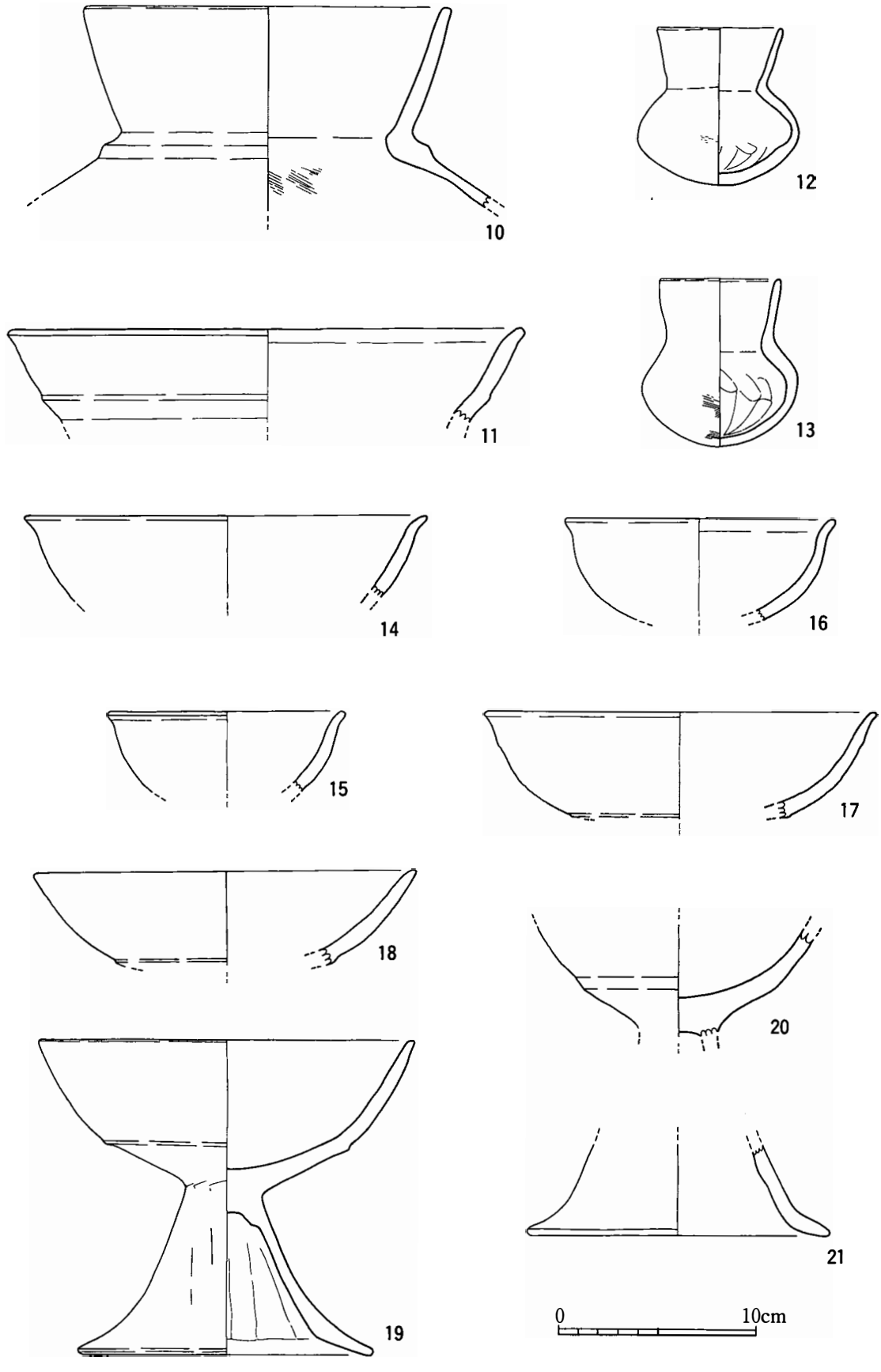
1号円形周溝墓



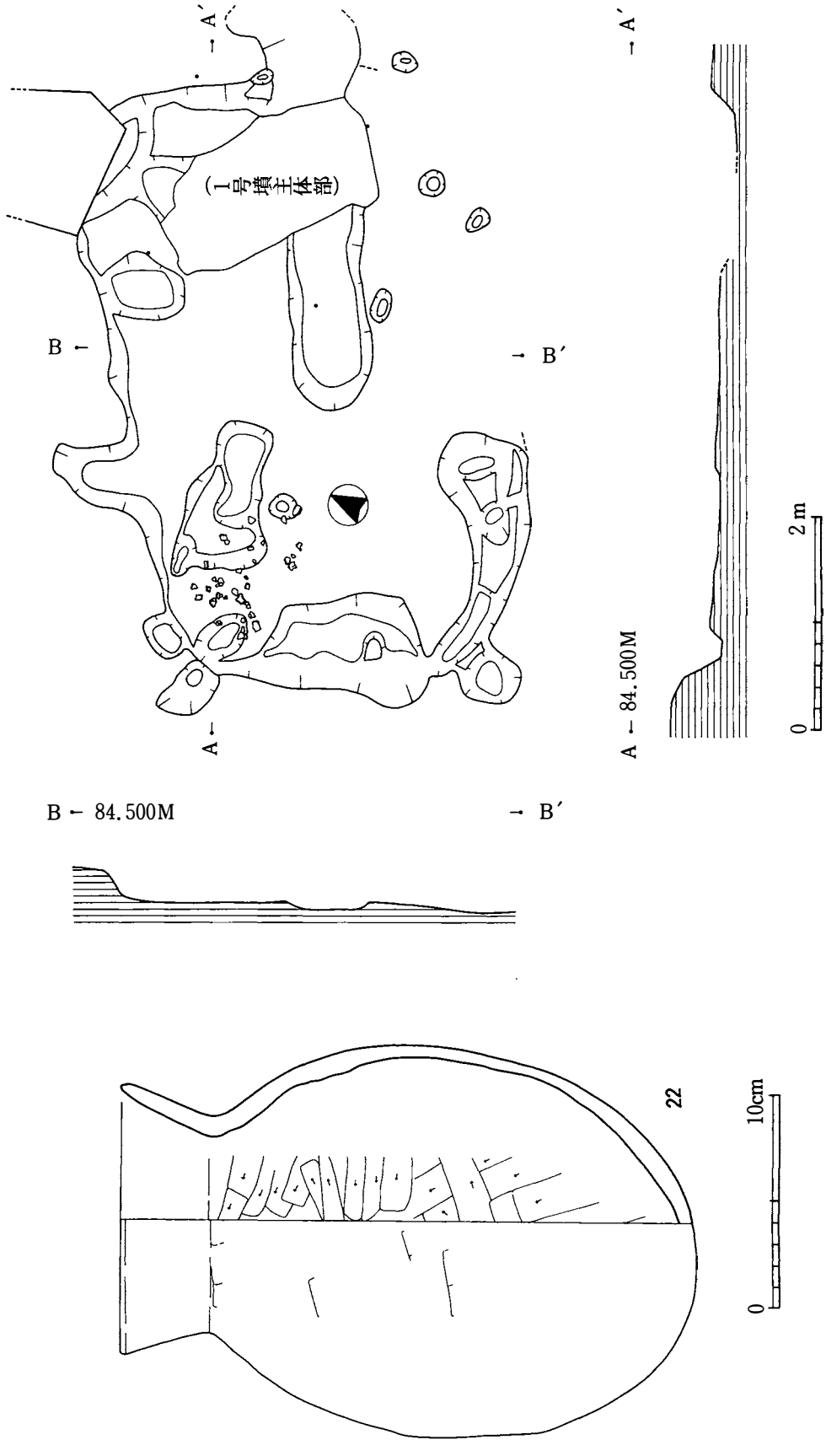
1号円形周溝墓主体部



第22図　1号円形周溝墓および主体部実測図

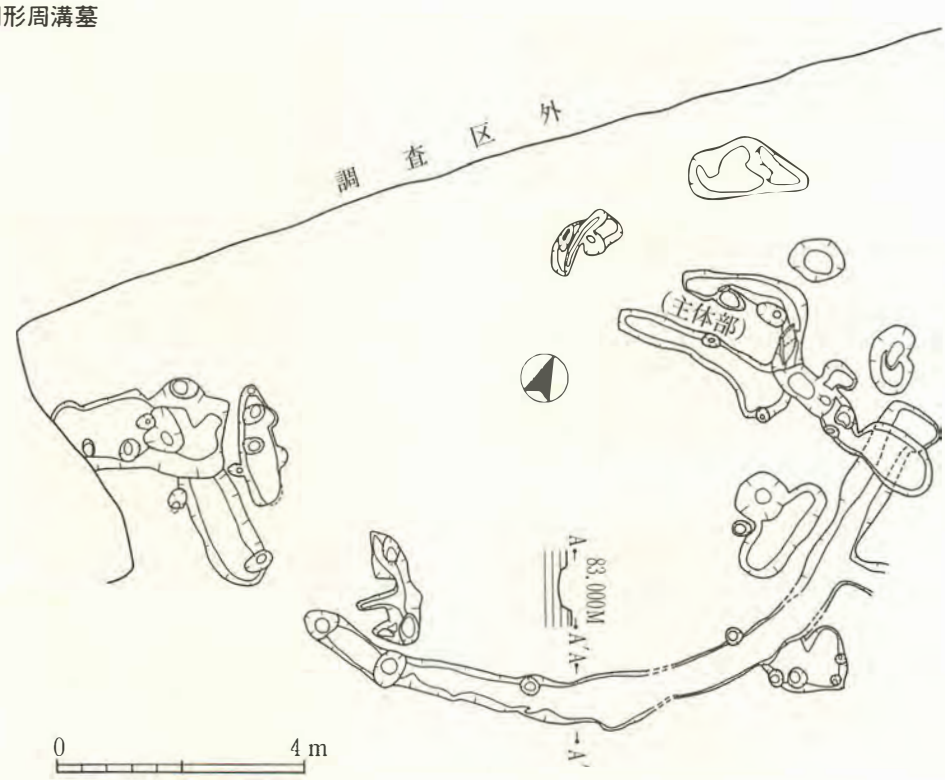


第23図　１号円形周溝墓出土土師器

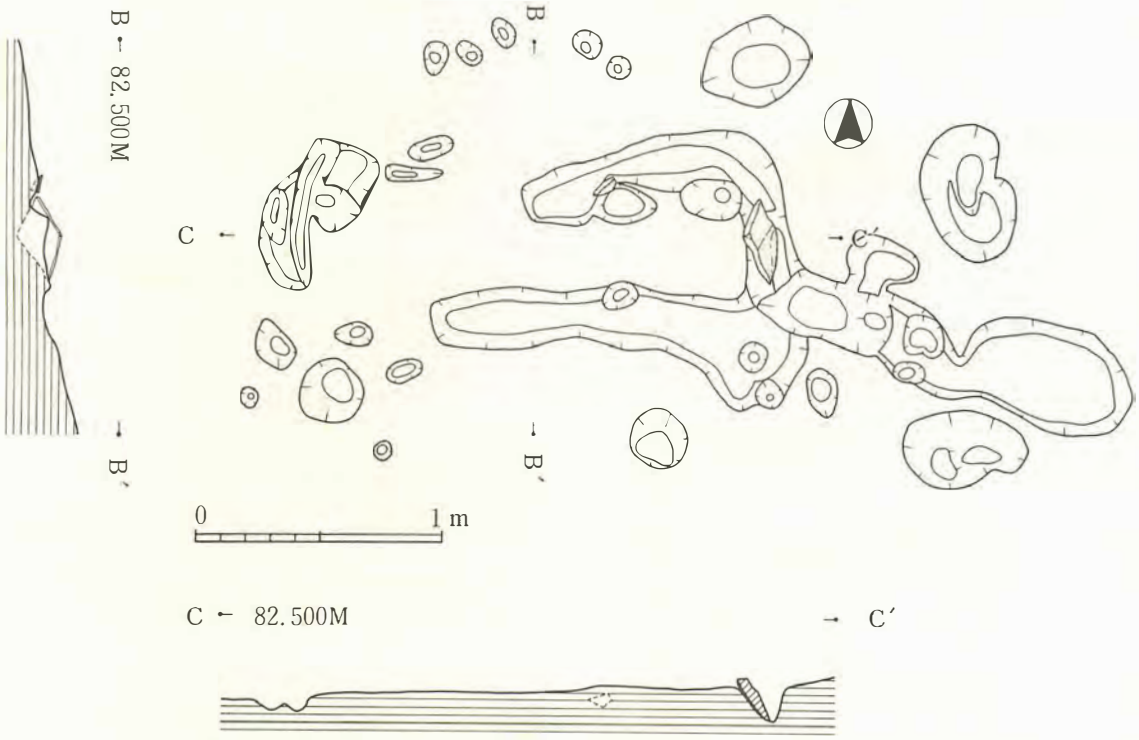


第24図　1号大型土坑実測図および出土土師器

２号円形周溝墓



２号円形周溝墓主体部



第25図　２号円形周溝墓および主体部実測図

は胴部中位にある。

小型鉢（17、18）

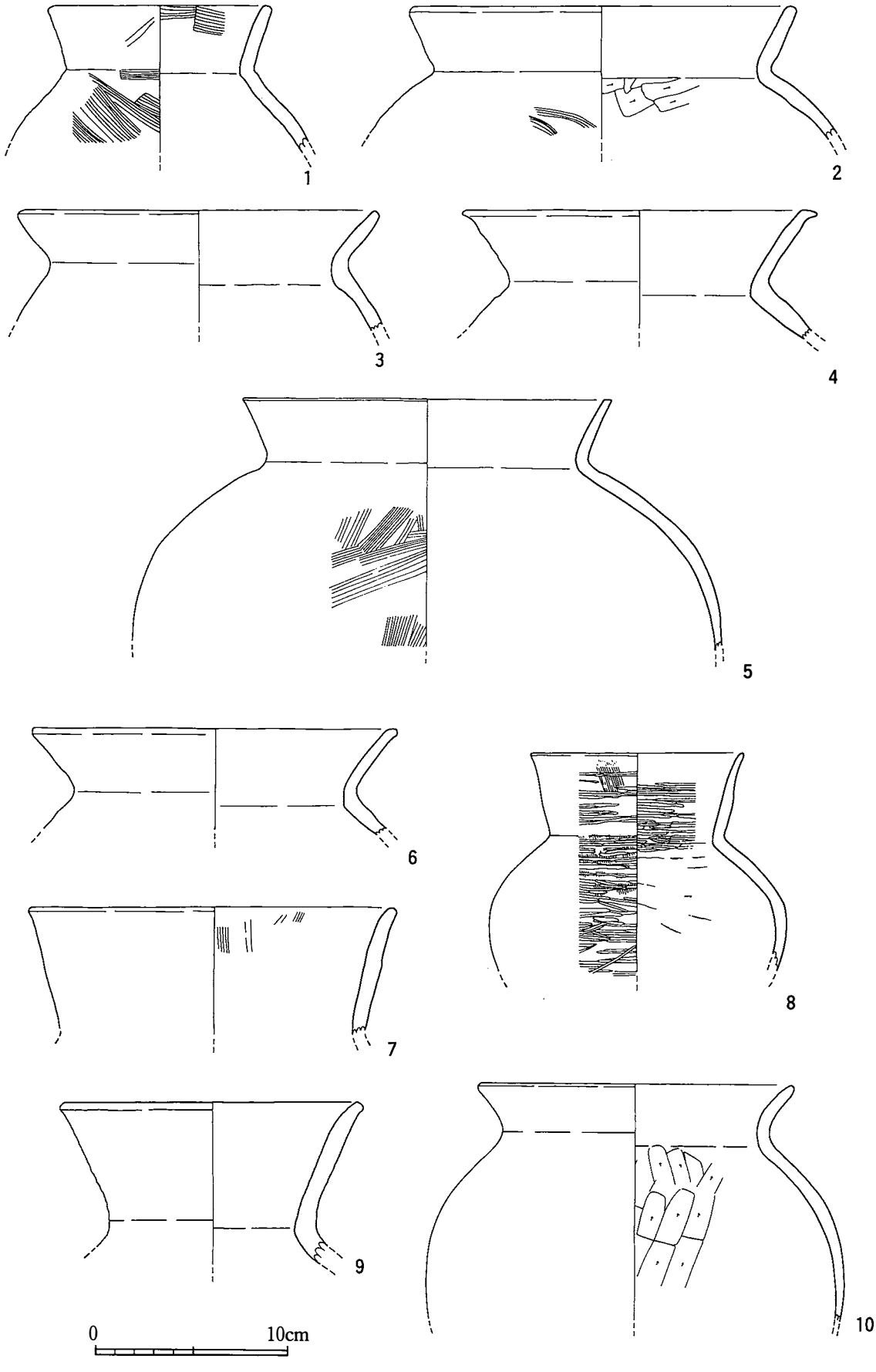
小型鉢は２点掲載した。17は口縁部片で頸部は短く外傾する。丸底になるものと思われる。18は丸底で、長く外傾する頸部を持ち、口縁は直口になる。

高坏（19～27）

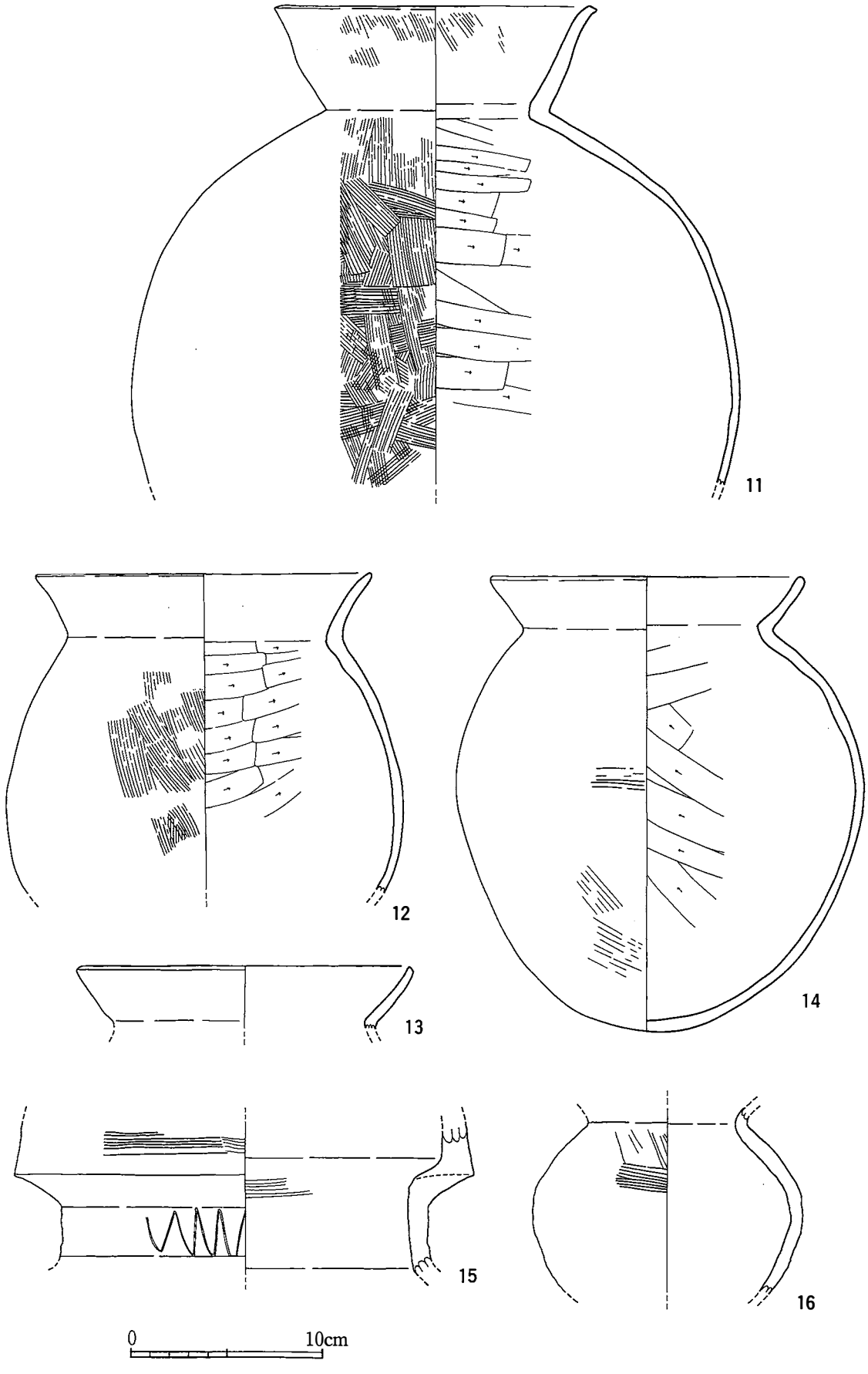
高坏は９点掲載した。坏部は浅く、下位で段をなして外に大きく開く。また、脚部はラッパ状に外反しながら開くもの（19、21～24）と脚柱部が屈曲して開く裾部をもつもの（25～27）がある。

第８表　出土土師器観察表

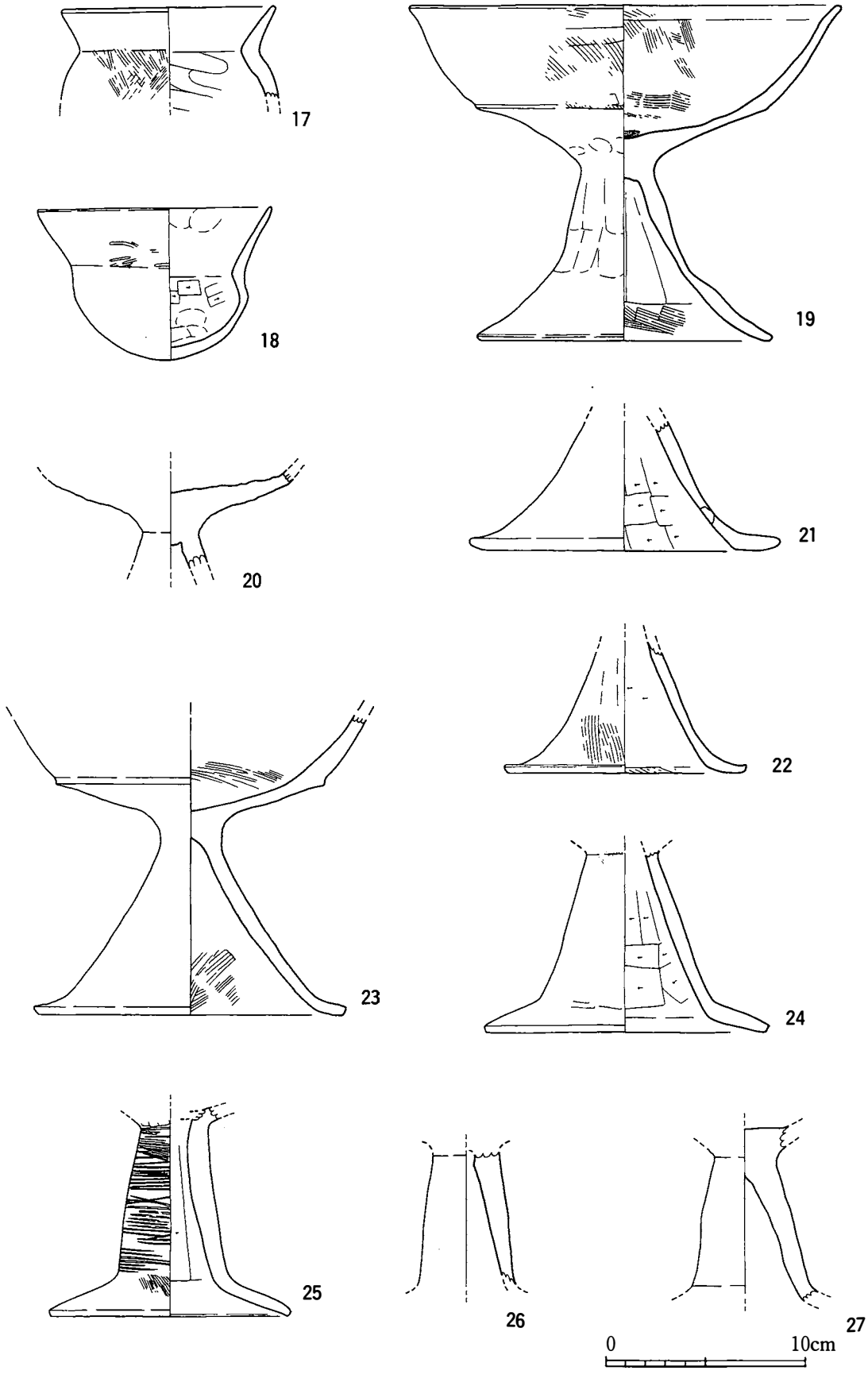
遺物番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	現存高(cm)	調整 (内面)	調整 (外面)	色調 (内面)	色調 (外面)	胎土	焼成	調査年度	取上番号	備考
1	壺	11.6		7.5	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	にぶ黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒多量、角閃石、長石、雲母を含む	良好	H6	B－6	外面煤付着
2	壺か甕	10.0		6.8	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	にぶ黄褐(10YR5/3)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	H6	A－1　77	外面煤付着
3	甕	18.2		6.1	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	橙(7.5YR8/6)	明褐(7.5YR5/6)	粗砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	不良	H6	F－3	器面風化
4	壺	18.2		6.5	ナデ	ナデ	明黄褐(10YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	B－5　71	器面摩耗
5	壺	19.2		12.8	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	にぶ黄橙(10YR7/3)	浅黄橙(10YR8/3)	砂粒多量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	H4	21T	外面煤付着
6	壺か甕	19.0		5.2	ナデ	ナデ	黄橙(10YR8/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	B－5　211	器面摩耗
7	壺	19.2		6.5	ナデ	ナデ、ハケ目	褐(7.5YR4/3)	橙(7.5YR6/6)	小石、砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	不良	H6	B－5　113	器面風化
8	小型壺	11.0		11.3	ナデ、ヘラミガキ	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ、ヘラミガキ	にぶ黄橙(10YR6/3)	にぶ黄橙(10YR6/3)	砂粒少量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	H4	F－4　21,28,37	外面煤付着
9	壺	15.8		8.3	ナデ	ナデ、ハケ目	橙(7.5YR7/6)	橙(5YR7/6)	小石、砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	B－4　4溝4	
10	壺	16.4		12.1	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	にぶ黄橙(10YR7/3)	浅黄橙(10YR8/3)	砂粒多量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	H4	21T	外面煤付着
11	壺	16.8		24.4	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	灰オリーブ(5Y5/2)	橙(5YR7/6)	小石、砂粒多量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	H4	C－3　3、E－1　6溝	外面赤色顔料痕
12	甕	17.4		16.3	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	にぶ黄橙(10YR6/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	H6	B－4　31, 33他	
13	甕	17.6		3.2	ナデ	ナデ	明黄褐(10YR7/6)	黄橙(10YR8/6)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6		
14	壺	16.4		23.2	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	にぶ黄褐(10YR5/3)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	H6	A－1　85, 15溝	内面煤付着
15	壺				ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目、線刻文	にぶ黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR6/4)	小石、粗砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H4	C－2　4溝1	
16	小型壺				ナデ	ナデ、ハケ目	にぶ黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	B－5　93	
17	鉢	10.8		4.6	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	にぶ橙(7.5YR6/4)	にぶ橙(7.5YR6/4)	砂粒多量、長石、雲母を含む	良好	H4	21T	
18	鉢	11.7		7.5	ナデ、ヘラケズリ、指頭痕	ナデ、ヘラミガキ	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/6)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	A－1　15溝25,50他	
19	高坏	21.6	14.8	16.5	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	橙(5YR7/6)	にぶ橙(7.5YR6/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	B－4　35, 39他	
20	高坏				不明	ナデ	明赤褐(5YR5/6)	明赤褐(5YR5/6)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	B－5　40, 41	器面風化
21	高坏		15.6	6.5	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	にぶ橙(7.5YR6/4)	橙(7.5YR6/6)	小石、粗砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	E－5　8，33他	中位に穿孔状の穴
22	高坏		12.1	6.6	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	B－5　263	
23	高坏		15.6	14.6	ナデ、ハケ目	ナデ	赤褐(5YR4/6)	赤褐(5YR4/6)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	B－5　55,214他	
24	高坏		14.3	9.0	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	黄橙(7.5YR7/8)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6	B－5　30	
25	高坏		12.1	10.0	ナデ	ナデ、ハケ目、ヘラミガキ	橙(7.5YR7/6)	橙(5YR7/6)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H4	21T	
26	高坏				ナデ	ナデ	橙(7.5YR7/6)	にぶ橙(7.5YR6/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	H4	C－4　7溝3	
27	高坏				ナデ、ヘラケズリ	ナデ	にぶ橙(7.5YR6/4)	にぶ橙(7.5YR6/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H4	21T	



第26図　出土土師器（１）



第27図　出土土師器（2）



第28図　出土土師器（３）

4　その他の遺物（第29図）

砥石（1）

平成4年度調査区1号住居跡から出土した。棒状の泥岩を用い、研磨面は端部を除いた4面で、一部が欠損している。残存部の長さ7.7cm、幅4.0cm、厚さ6.0cm、重さ13.8gを測る。

鉄刀子（2）

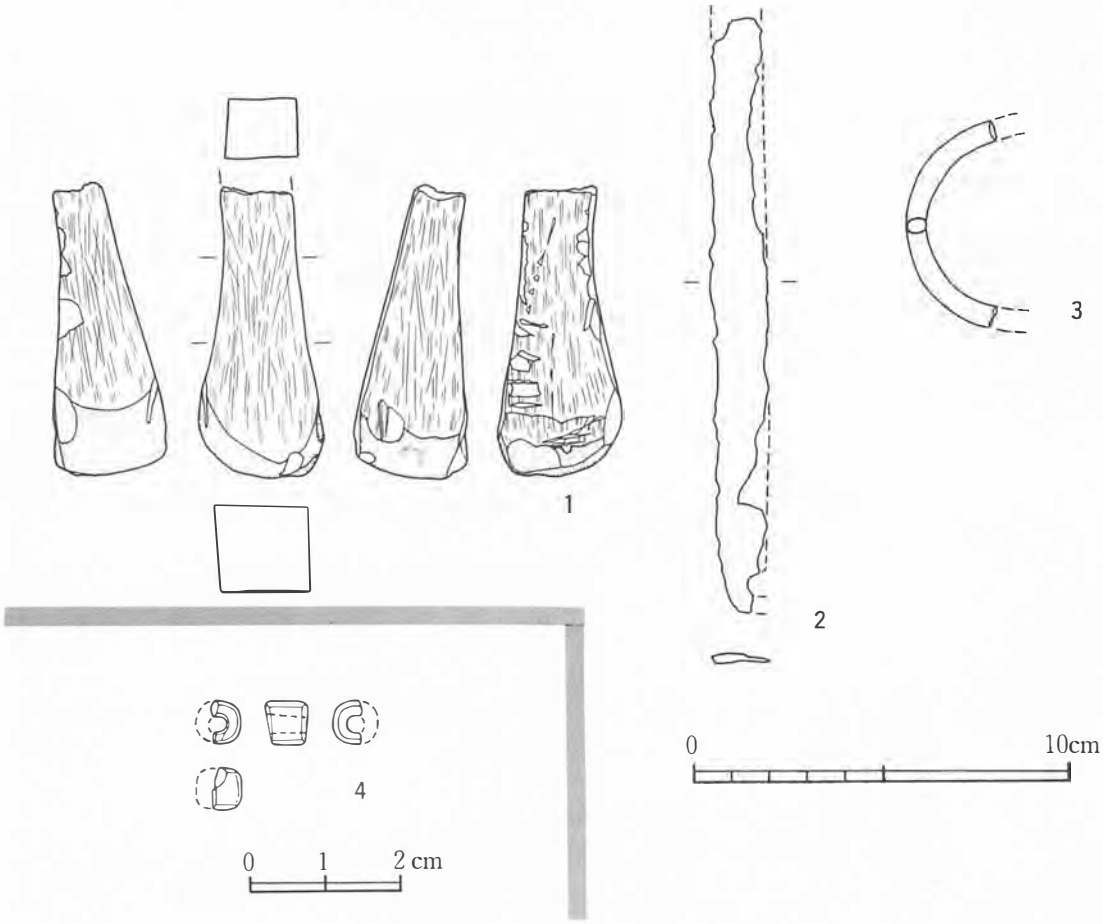
鉄製品は数点出土したが、比較的残存状態が良く、実測できたものは刀子1点のみであった。平成4年度調査区E－1グリッドで出土した。蕨手で、先端部を欠損している。また刀身もかなり腐食が進んでいる。残存部の長さ15.5cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm、重さ17.9gを測る。

銅環（3）

平成4年度調査区E－2グリッドで出土した。一部を欠損しており、幅0.5cm、厚さ0.4cm、重さ10.0gを測る。

ガラス玉（4）

平成4年度調査区C－2グリッドで出土した。半分を失っているが、推定直径0.6cm、孔径0.2cm、厚さ0.6cm、重さ0.2gを測る。



第29図　古墳時代出土遺物

第６節　歴史時代の遺物

古閑山遺跡の包含層からは古代・中世などの歴史時代の土器も出土した。しかし、遺構に伴うものはなく、すべてが破片で、復原できるようなものはなかった。

ここでは、５点を掲載した（第30図）。これらの土器を器種別に見ていきたい。なお、個別の土器の計測値および観察結果については「歴史時代土器観察表」（第９表）にまとめている。

甕・甑（１、２）

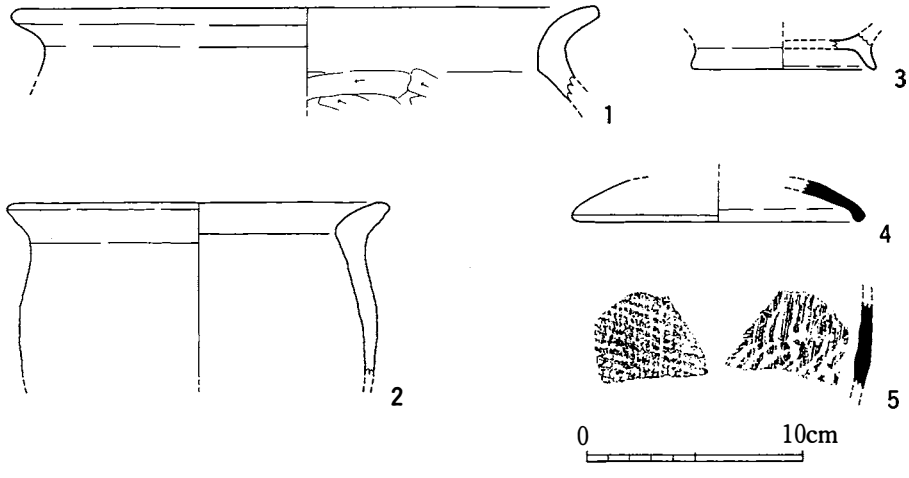
甕または甑の口縁部である。いずれもわずかに膨らむ胴部で、頸部から外反して外に開く口縁を持つ。また、内面にはヘラケズリが施されている。

碗（３）

３は碗の底部で、外傾する高台を持つ。内面は内黒である。

須恵器（４、５）

４は蓋の一部である。体部は緩やかな曲線で、口縁部は下方に短く折れている。５は、壺の胴部片である。内面には青海波状、外面には格子目状の叩き目をもつ。



第30図　歴史時代土器実測図

第９表　歴史時代土器観察表

遺物番号	器種	口底径(cm)	現存高(cm)	調整 (内面)	調整 (外面)	色調 (内面)	色調 (外面)	胎土	焼成	調査年度	取上番号	備考
1	甕・甑	27.0	4.4	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	にぶ黄橙(10YR7/4)	浅黄橙(10YR8/4)	砂粒多量、角閃石、長石を含む	良好	H4	135	
2	甕・甑	17.6	8.0	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	にぶ橙(7.5YR7/4)	橙(7.5YR7/4)	砂粒多量、角閃石、長石を含む	良好	H4	A－2　4溝2	
3	碗	8.5	1.6	ナデ	ナデ	にぶ黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒多量、角閃石、長石を含む	良好	H4		
4	須恵蓋	13.0	1.9	回転ナデ	回転ナデ	灰白(10YR7/1)	灰(N5/0)	砂粒少量、長石を含む	良好	H6	C－7	
5	須恵胴			青海波叩き目	格子状叩き目	灰黄褐(10YR5/2)	にぶ赤褐(5YR4/3)	砂粒微量	良好	H4	F－5	

第Ⅲ章　ま　と　め

1　旧石器時代

平成４年度調査区において、ニガシロ層下のローム層直上から旧石器時代のものと思われるチャート製の台形様石器と黒曜石の剥片が出土したほか、一括遺物の中から黒曜石製の細石刃が出土している。

台形様石器は、石器の形態的特徴や素材の用い方等の技術的特徴から、熊本県曲野遺跡Ⅵ層石器群に類例を求めることができ、ＡＴ火山灰降灰以前の石器群に比定できる資料である。

一方、細石刃は西北九州産と考えられる良質の黒曜石を使用している。しかし、当該遺跡からは細石刃核は検出されておらず、また資料も頭部を欠失しているため詳細な位置づけは困難である。

2　縄文時代

今回の調査では、明確に縄文時代のものと位置づけられる遺構は確認できなかった。また、包含層からは早期、中期、後期、晩期の土器が出土したが、出土点数はそれほど多くなかった。

早期前半の押型文土器は、大部分が木崎康弘氏の編年案による早水台式～沈目式にあたり、周辺の庵ノ前遺跡、迫ノ上遺跡の出土押型文土器の時期とほぼ一致しているが、手向山式にあたると思われるものも数点出土している。

後期前半土器は御手洗式・鐘崎式・北久根山式などが出土している。

また、晩期土器は、器形の特徴から、天城式～黒川式にあたるものと思われ、主体をなすのは黒川式にあたる時期のものと考えられる。

3　弥生時代

調査区からは、数は多くないものの、弥生土器や石包丁が出土している。時期は中期、後期にあたるものである。遺構は確認されていないが、周辺の庵ノ前、迫ノ上の両遺跡において甕棺墓が確認されおり、何らかの生活の痕跡があったものと推定される。

4　古墳時代

古墳時代のものと考えられる遺構は、竪穴住居跡１基、木棺墓１基、石棺墓１基、円形周溝墓２基が確認されている。また、１号円形周溝墓の主体部と切り合う形で、用途不明の大型土坑が１基検出されている。

１号住居跡は、一部が調査区外にかかるため、全容は不明であるが、２本柱と考えられ、中央部に炉をもつ方形の住居跡である。中央部西よりにはコの字形の小さい溝が確認されたが、室内を区切る壁状の施設があったものと推定される。出土する土器は土師器のみである。野田拓治氏による中九州地方の古式土師器編年案をもとに見ると、これらの土師器は、特徴などからⅢ期に該当し、実年代は４世紀末から５世紀初頭に位置するものと考えられる。

２基の円形周溝墓は、いずれも削平による破壊が激しく、墳丘や周溝の全容を確認することができなかったが、主体は安山岩の組み合わせ石棺である。また、２号円形周溝墓に伴う遺物は出土しなかったが、１号方形周溝墓の周溝から土師器が出土している。これらの土師器も器形の特徴から野田氏編年のⅢ期に該当す

ると考えられ、4世紀末から5世紀初頭のものと位置づけられる。なお、1号大型土坑から出土した土師器の甕は、外傾口縁で長胴気味であることなど、周溝出土の土師器に比べると器形的にやや古い要素を含んでおり、このことからすると、1号大型土坑の時期は、1号円形周溝墓より古くなる可能性がある。

1号石棺墓は、周溝は確認されなかったものの、2基の円形周溝墓に近く、主体の形状も近似していることから、円形周溝墓とほぼ同時期のものであると考えることができる。

1号木棺墓は伴出する遺物が無く、周溝等も確認できなかった。形状から古墳時代のものと思われるが、詳しいことは不明である。

今回、熊本北バイパス第3工区の工事に伴って調査が行われた庵ノ前、迫ノ上、古閑山の3遺跡からは、いづれも古墳時代の土師器のみを伴う住居跡が確認されている。土師器の特徴から、これらの住居跡群は野田氏編年のⅢ期にあたり、ほぼ同時期のものと考えられる。このことから、4世紀末から5世紀初頭にかけて、このあたり一帯には集落が点在していたものと推定される。これらの遺跡はいずれも台地上の谷頭部に立地しており、付近を流れる谷水を利用して耕作を行っていた可能性がある。特に迫ノ上遺跡は、集落の規模が他に比べて大きく、かまどと須恵器を伴う住居跡が確認されるなど集落の存続期間も長かったものと考えられる。さらに、大型住居の跡も確認されていることから、このあたり一帯の拠点的な集落であった可能性がある。また、古閑山遺跡の円形周溝墓の周溝から出土した土師器も住居跡とほぼ同時期であり、3遺跡を含めた周辺を見渡せる丘陵の尾根上に立地していることからも、被葬者は3遺跡の集落と密接な関わりを持っていたことが考えられる。

5　歴史時代

歴史時代の遺構としては、調査区全体より十数本の溝が確認されている。埋土から近世の陶磁器等が出土したため、ほとんどは近世以降のものと考えられる。溝は現在の筆境に並行する形で確認されることが多く、耕作に伴って畑の1筆1筆を区画していたものと考えることができる。

溝以外の包含層からは近世以降の陶磁器の他に古代から中世にかけての土器も出土しているが、点数が少なく、小破片がほとんどであることから、本来的なものではないと考えられる。

参　考　文　献

『日本地名大辞典43熊本県』角川書店　1987

『熊本県遺跡地図』熊本県教育委員会　1998

『熊本市北部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会　1969

『新熊本市史史料編第一巻考古史料』新熊本市史編纂委員会　1996

浦田信智『西谷遺跡』熊本県教育委員会　1985

平岡勝昭『新南部・潤野遺跡』熊本県教育委員会　1986

江本直他『竜田陳内遺跡』熊本県教育委員会　1988

大田幸博他『庵ノ前遺跡Ⅰ・Ⅱ』熊本県教育委員会　1991

濱田彰久『庵ノ前遺跡Ⅲ』熊本県教育委員会　1997

加藤晋平・鶴丸俊明『石器入門事典　先土器』柏書房　1991

木崎康弘『狸谷遺跡』熊本県教育委員会　1987

第Ⅲ章　ま　と　め

大川清他『日本土器事典』雄山閣　1996

戸沢充則他『縄文時代研究事典』雄山閣　1996

鈴木道之助『石器入門事典　縄文』柏書房　1991

可児通宏「押型文系土器様式」『縄文土器大観』小学館　1989

新東晃一「塞ノ神・平栫式土器様式」『縄文土器大観』

新東晃一「九州貝殻文系土器様式」『縄文土器大観』

木村幾多郎「曽畑式土器様式」『縄文土器大観』

本田道輝「市来・一湊式土器様式」『縄文土器大観』

松永幸男「九州磨消縄文系土器様式」『縄文土器大観』

島津義昭「黒色磨研系土器様式」『縄文土器大観』

山崎純男「凸帯文系土器様式」『縄文土器大観』

緒方勉『瀬田裏遺跡調査報告Ⅰ』大津町教育委員会・阿蘇大津ゴルフ場　1991

緒方勉『瀬田裏遺跡調査報告資料Ⅱ』大津町教育委員会・阿蘇大津ゴルフ場　1992

緒方勉『瀬田裏遺跡調査報告Ⅱ』大津町教育委員会・阿蘇大津ゴルフ場　1993

宮坂孝宏『白鳥平Ａ遺跡』熊本県教育委員会　1993

宮坂孝宏『白鳥平Ｂ遺跡』熊本県教育委員会　1994

坂田和弘『深水谷川遺跡』熊本県教育委員会　1994

古森政次『ワクド石遺跡』熊本県教育委員会　1994

木崎康弘『無田原遺跡』熊本県教育委員会　1995

木崎康弘『蒲生・上の原遺跡』熊本県教育委員会　1996

坂田和弘『鶴羽田遺跡』熊本県教育委員会　1998

石野博信「総論」『古墳時代の研究２』雄山閣　1990

小笠原信彦「住居と倉と井戸」『古墳時代の研究２』

笹森健一「竪穴住居の使い方」『古墳時代の研究２』

山本輝雄「住居の上屋構造と建築材」『古墳時代の研究２』

高橋一夫・広瀬和雄「集落の形態」『古墳時代の研究２』

柳田康雄「土師器の編年２九州」『古墳時代の研究６』雄山閣　1993

舟山良一「須恵器の編年２九州」『古墳時代の研究６』

舟山良一「Ⅰ北部九州」『須恵器集成図録第５巻西日本編』雄山閣　1996

池田榮史「Ⅱ南部九州」『須恵器集成図録第５巻西日本編』

野田拓治「古式土師器の成立と展開」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会　1982

古庄浩明「中九州における古式土師器の成立」『國學院大學考古学資料館紀要第５輯』國學院大學考古学資料館　1989

網田龍生『大江遺跡群Ⅱ』熊本市教育委員会　1993

松本健郎他『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』熊本県教育委員会　1980

野田拓治『上の原遺跡Ⅲ』熊本県教育委員会　1985

江本直『柏木谷遺跡』熊本県教育委員会　1993

長谷部善一『竈門寺原遺跡』熊本県教育委員会　1995

丸山伸治他『陣山遺跡』熊本県教育委員会　1996

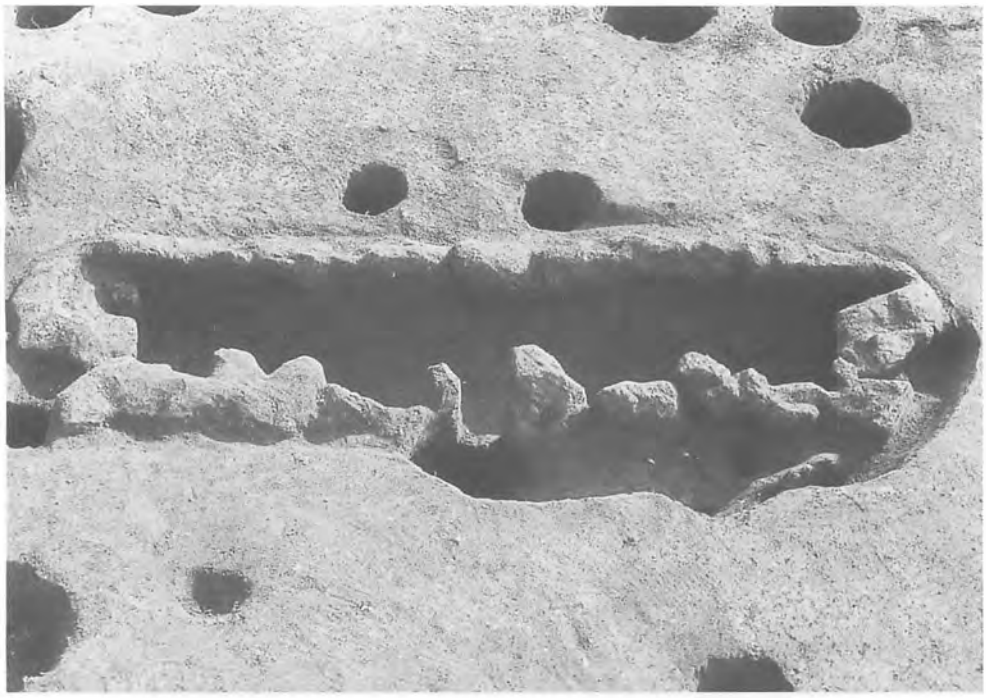
写 真 图 版

平成 4 年度調査区全景（南より）

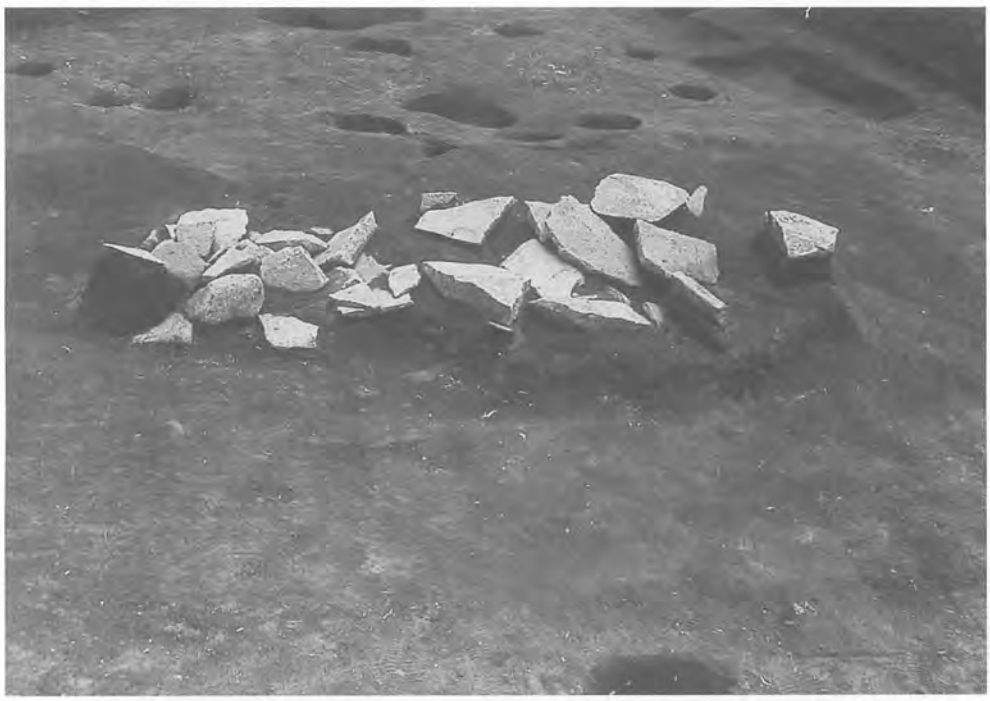
平成 4 年度調査区全景（北より）

1 号住居跡（完掘）

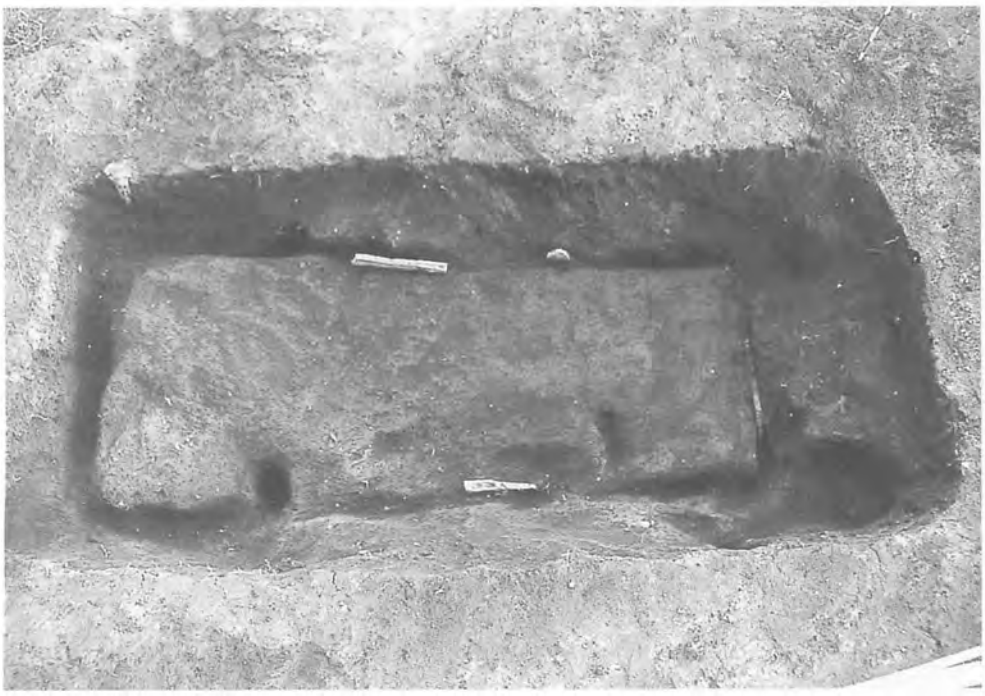
図版 2



1 号木棺墓検出状況

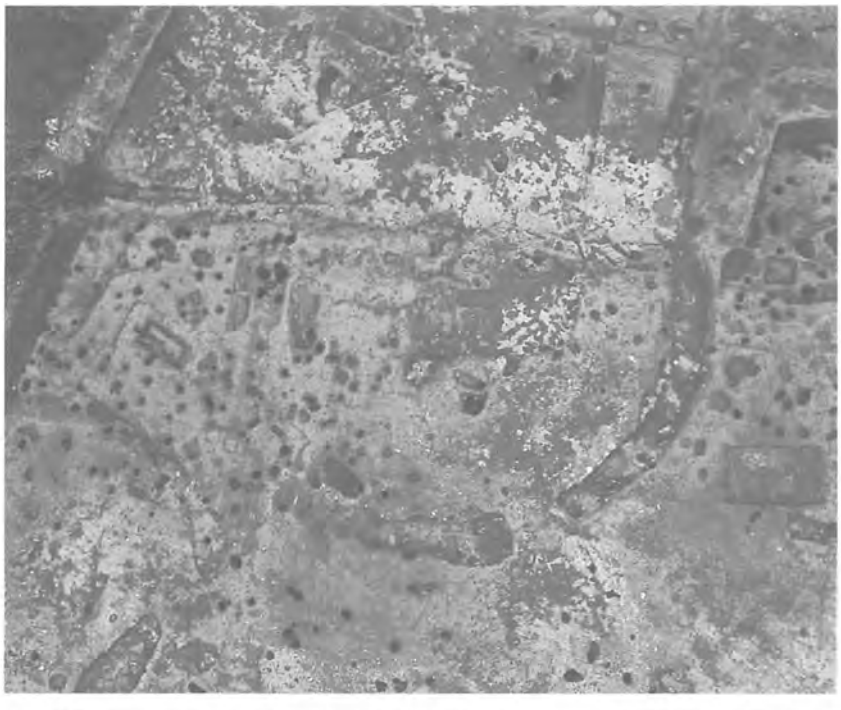


1 号石棺墓検出状況



1 号石棺墓（完掘）

1 号円形周溝墓遺物出土状況



1 号円形周溝墓全景

1 号円形周溝墓主体部

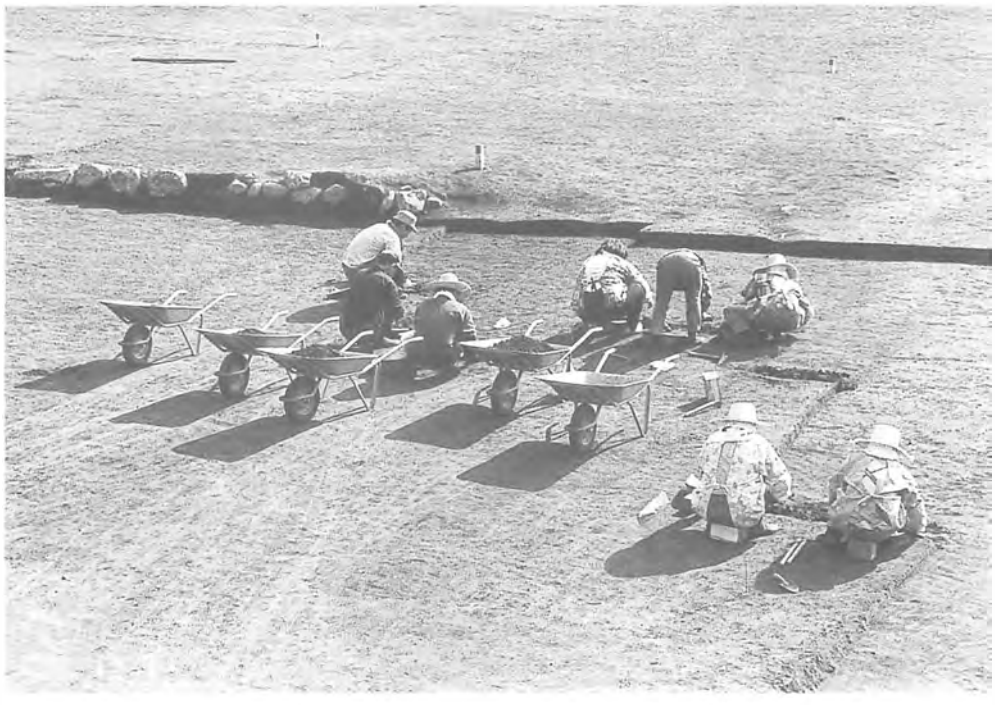
図版 4

1 号大型土坑

2 号円形周溝墓全景

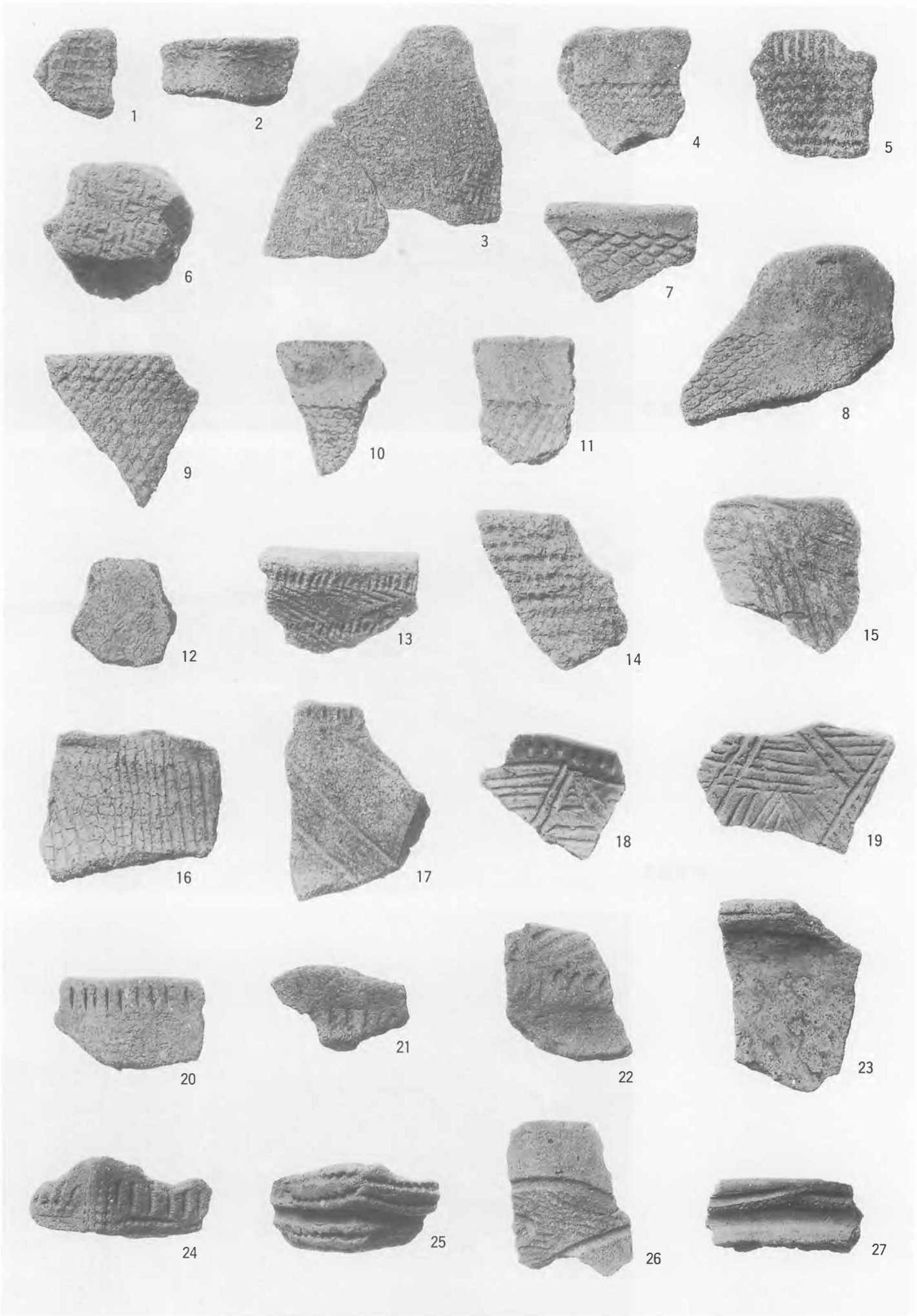
2 号円形周溝墓主体部

作業風景

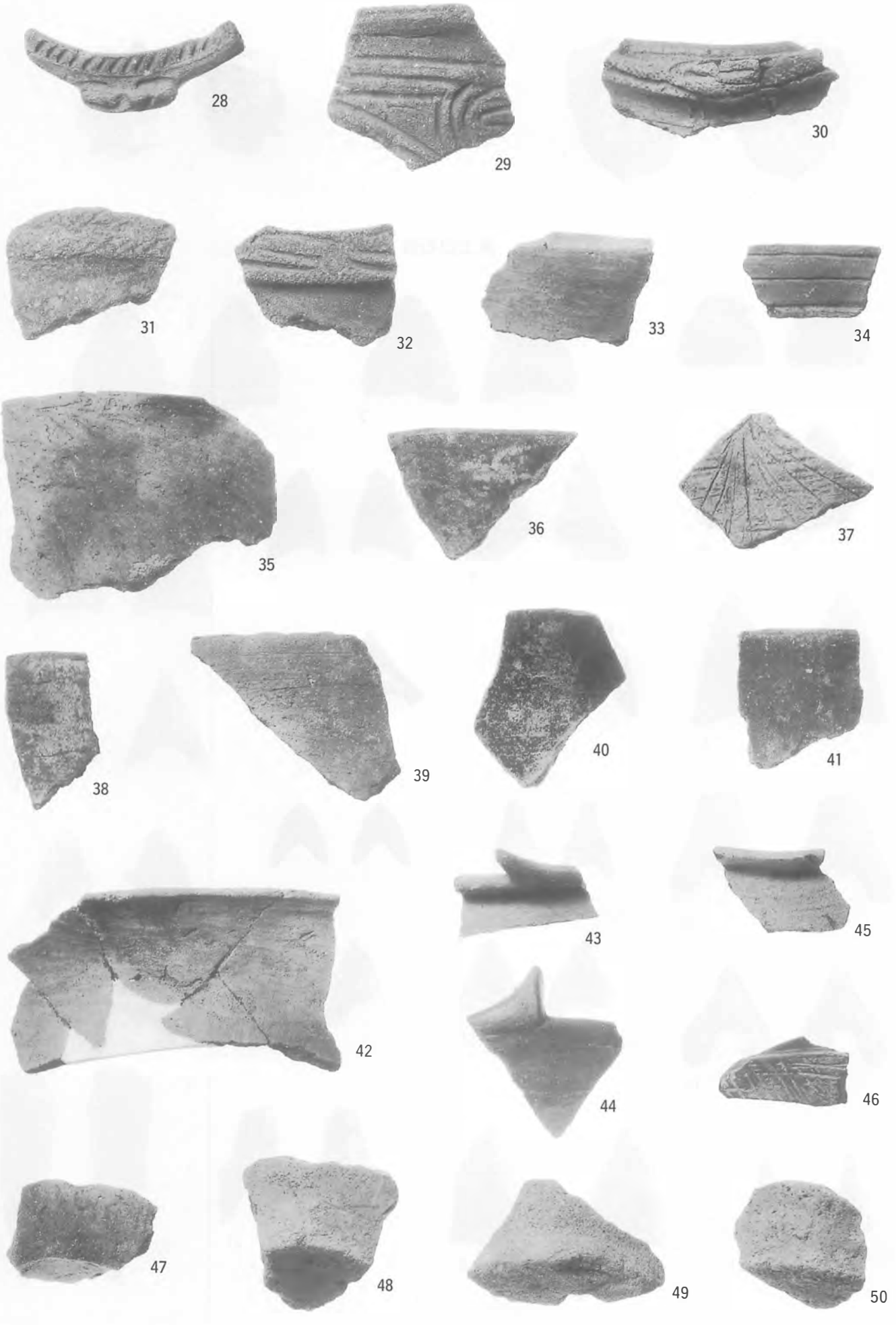


作業風景

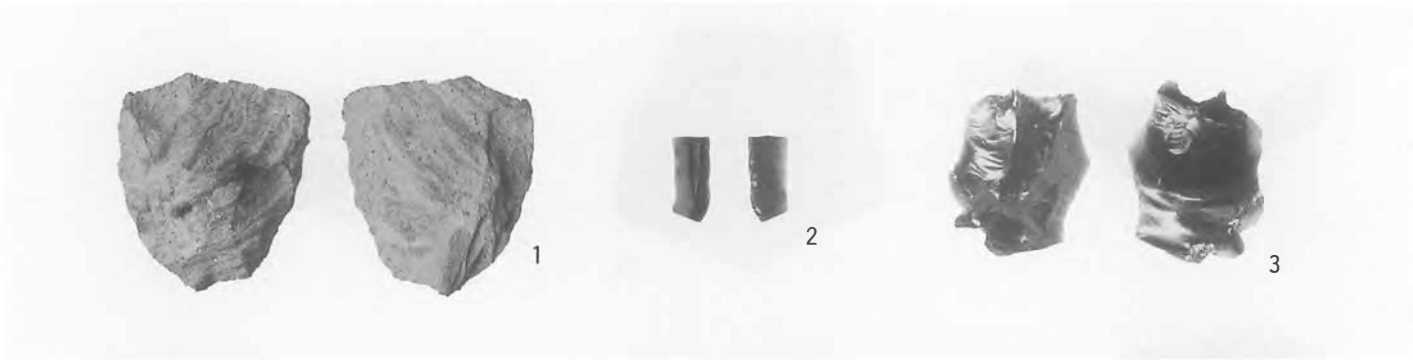
熊本北高校遺跡見学



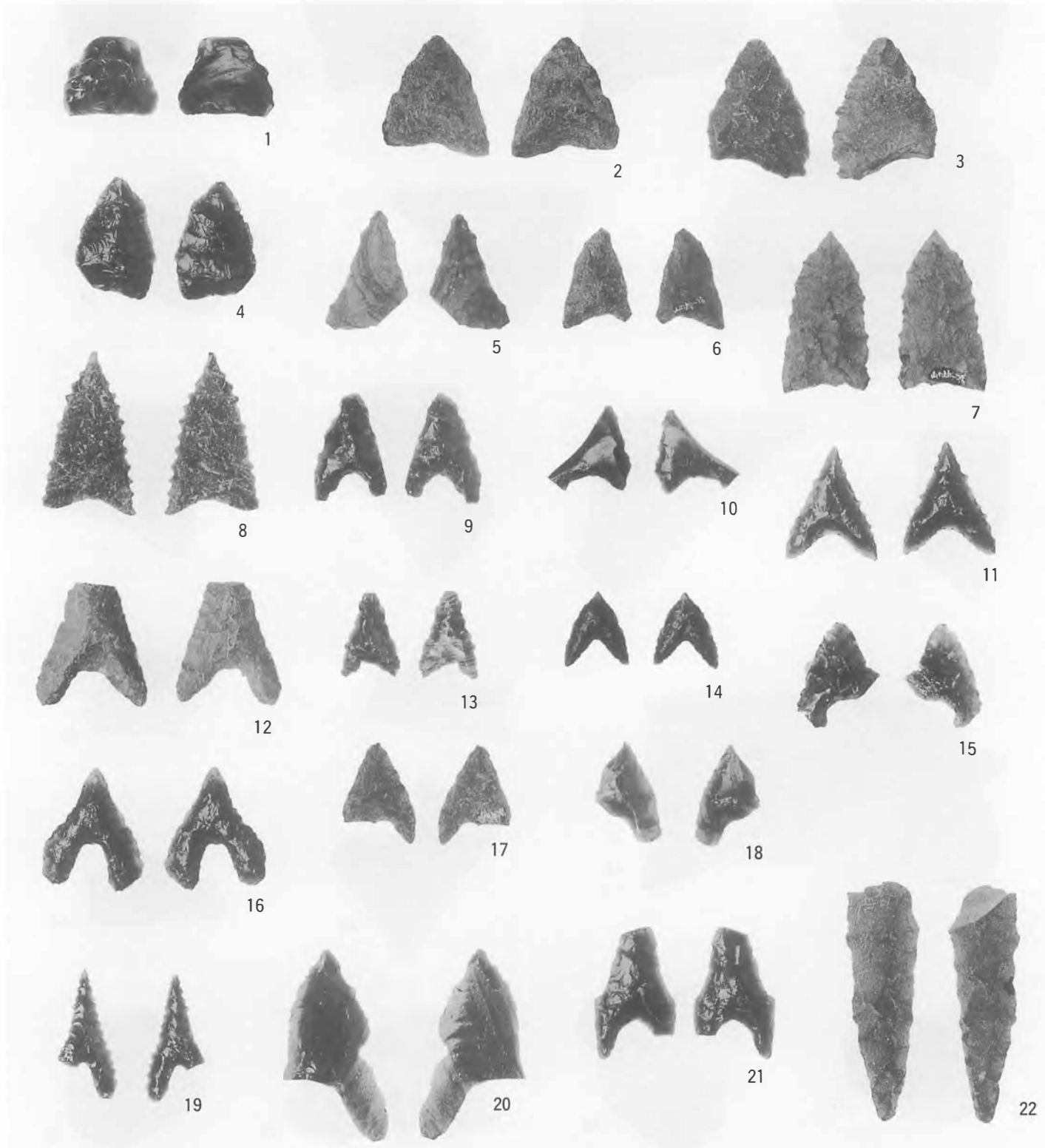
出土縄文土器（1～27）



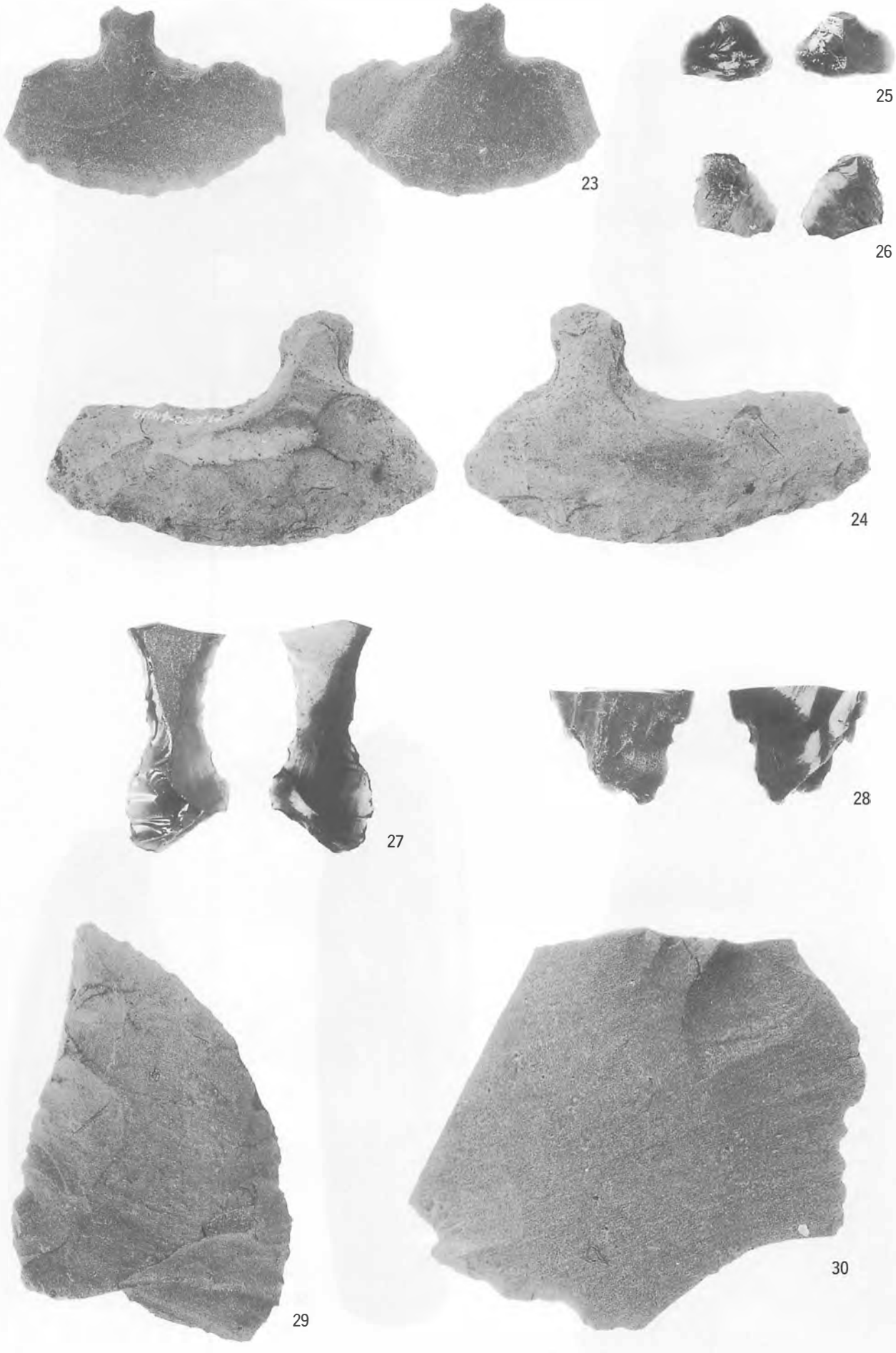
出土縄文土器（28～50）



出土旧石器



出土縄文石器（1～22）



出土縄文石器（23～30）

31

32

33

34

35

出土縄文石器（31～35）

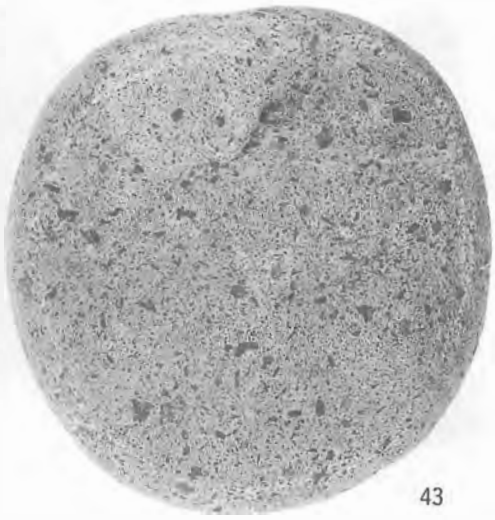
36

37

38

39

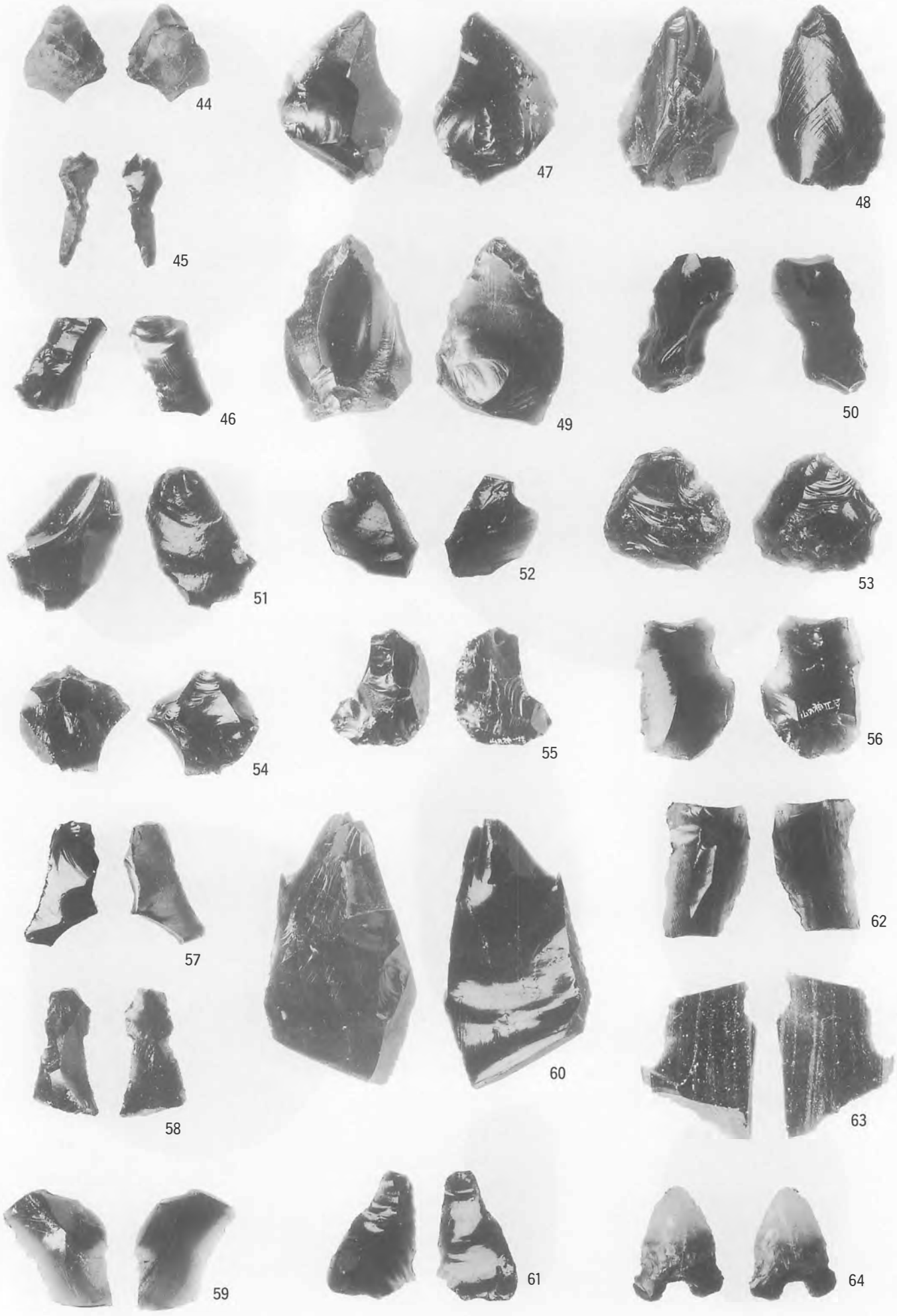
40


43

41

42

出土縄文石器（36～43）



出土縄文石器（44～64）

1

2

3

5

4

6

7

8

9

10

11

出土弥生土器（1～11）

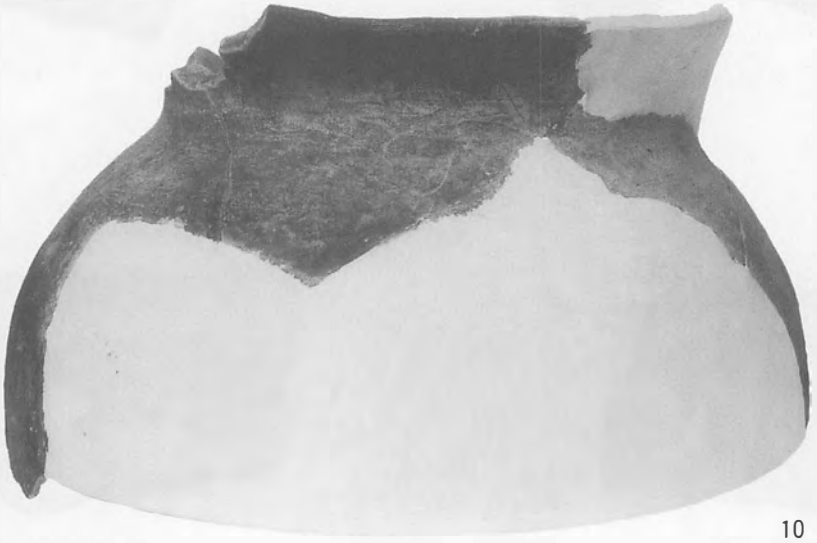
1号住居跡出土土師器（1～4、7、8）

1号住居跡出土土師器（5、6、9）

1号円形周溝墓出土土師器（10～21）

1号円形周溝墓出土土師器（22）

出土土師器（1～4）



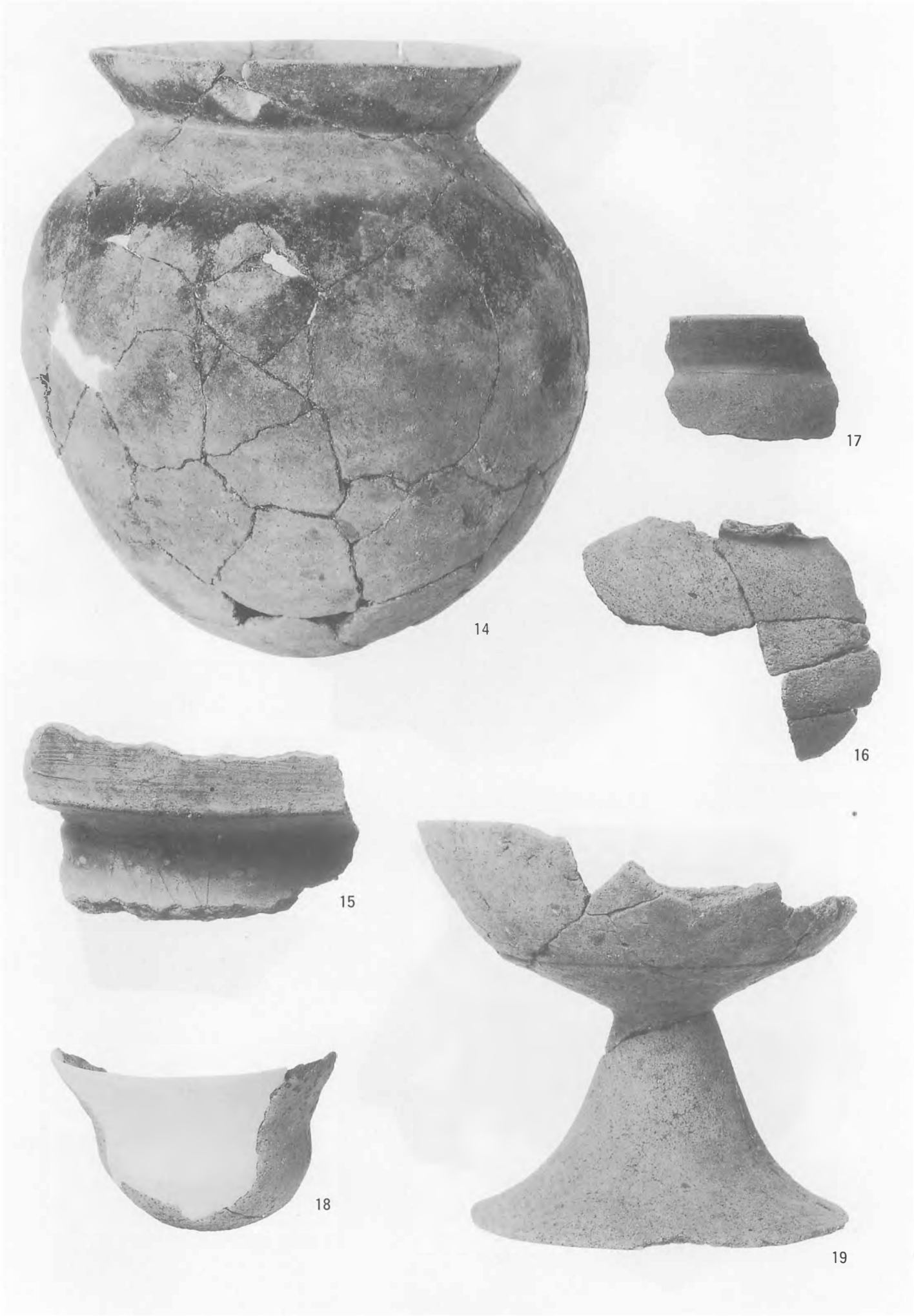
出土土師器（5～10）

11

12

13

出土土師器（11～13）



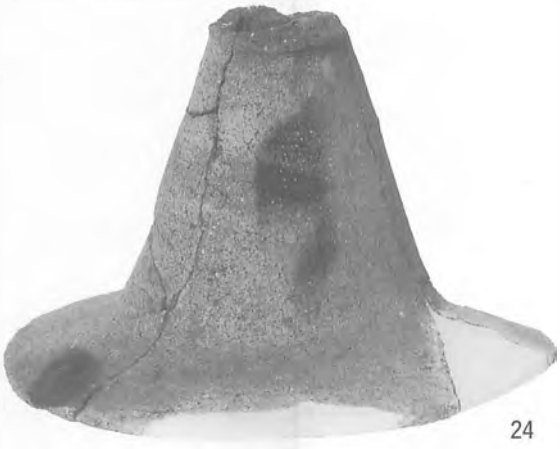
出土土師器（14～19）

20

21

22

23


24

25

26

27

出土土師器（20～27）

出土石包丁

砥石

ガラス玉

銅環

刀子

古墳時代出土遺物

出土歴史時代土器

（平成４年度）

（平成７年度）

作　業　員　の　皆　さ　ん

報　告　書　抄　録

ふりがな	こがやまいせき
書　　名	古閑山遺跡
副　書　名	一般国道３号熊本北バイパス改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第１７１集
編　著　者	濱田彰久
編集機関	熊本県教育委員会
所　在　地	〒862-8609　熊本県熊本市水前寺６丁目18番１号　　TEL096-383-1111
発　行　年	１９９９年３月３１日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こがやま 古閑山	くまもとしたつだまちおおあざかみたつだ 熊本市龍田町大字上立田 あざこがやま 字古閑山 あざてんじんめん 字天神免	43201	091			19920901 ～ 19930331 19950118 ～ 19950710	4,500m² 3,000m²	国道改築 (バイパス建設)

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特注事項
古閑山	散布地	旧石器		チャート製台形石器、黒曜石製細石刃	
		縄文時代 早期 前期 後期 晩期		押型文土器、撚糸文土器、条痕土器、塞ノ神式土器 曽畑式土器 後期前半土器、磨消縄文土器、黒色磨研土器、粗製深鉢土器 石鏃、石匙、石錐、削器、抉入石器、楔型石器、打製石斧、磨製石斧、台石、磨石、敲石、不定形石器、使用痕ある剥片、石核、異形石器	
		弥生時代		中後期土器、石包丁	
	集落 墓地	古墳時代	住居跡１基 木棺墓１基 石棺墓１基 円形周溝墓 ２基	土師器、須恵器 砥石、鉄刀子、銅環、ガラス玉	
		歴史時代	柱穴 溝		

あ と が き

熊本北バイパス第３工区関連の埋蔵文化財調査は、発掘調査と整理・報告書編集作業をあわせると足かけ８年に及ぶ長期にわたる事業でありましたが、この報告書の発行で一つの区切りを迎えることができました。

これも、発掘・整理作業に携わって頂いた多くの皆様のご協力とご努力のおかげであります。

報告書を終えるにあたって、そのご芳名を記し、感謝の意を表したいと思います。

調査協力	村崎　孝宏	本松亜希子	岩谷　史記			
発掘作業	荒木えみ子	池袋　隆行	石川　政代	石田ミネ子	犬塚冨美代	岩崎　　将
	岩田　政秀	有働　春美	江藤　一也	奥村　竜二	小田　信子	甲斐美紀代
	甲斐由貴子	貝瀬　千秋	河上タツコ	熊谷　美里	桑原　栄子	合志カツ子
	合志ミツ子	後藤　幸子	斉藤美由紀	境　喜美栄	島村　政和	清水たつよ
	白井　勝子	菅原　貴明	杉浦りえ子	杉浦　泰子	高野　美香	立花　幸一
	立原　恵子	田中　　強	谷口ヨシエ	土田　俊雄	土田ちえみ	内藤なおみ
	長尾　彰心	中西　陽子	中林留利子	中村　孝子	中山　森重	西坂スマ子
	西嶋　　功	西村　栄子	野口　康雄	野口ヨシノ	野崎千枝子	野田　　隆
	橋本スミ子	馬場美智子	早田　輝美	原田　菊代	番山　明子	東　　菊子
	肥野　芳光	淵上久美子	本田　貴博	松田　計子	松村喜代子	三浦キエコ
	水野美知子	宮田　日文	宮本　典美	村上　春枝	森　せい子	山内真千代
	山城　玲子	横田　浩士	渡辺　佳子			
整理作業	江島　園子	大塚トシ子	緒方千代子	興梠富貴子	重永　照代	白井美恵子
	塩田喜美子	津留富美枝	徳永みどり	橋本由美子	早野　弘子	宮本　幸子
	村山　紀子	山切　律子	山下千栄子	山元　友子	吉本　清子	

熊本県文化財調査報告　第171集

古閑山（こがやま）遺跡

一般国道３号熊本北バイパス改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日　平成11年３月31日

発　行　熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市水前寺６丁目18番１号

印　刷　印刷協業組合 サンカラー
〒862-0935　熊本市御領２丁目19-13

10 教 教文
② 003

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 171 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：古閑山遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/